岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第119集

大堤II遺跡発掘調査報告書

一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第119集

大堤II遺跡発掘調査報告書

一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の大堤Ⅱ遺跡は、軽米町西方の観音林丘陵に立地し、昭和61年の発掘調査によって縄文時代の陥し穴や平安時代の土坑が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに調査報告書として発刊するはこびになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました軽米町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和62年11月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　中　村　　直

例　言

1．本報告書は岩手県九戸郡軽米町晴山大字大堤31－2ほかに所在する大堤II遺跡（岩手県遺跡台帳番号ＩＦ81－0248）の発掘調査結果を収録したものである。

2．大堤II遺跡の調査は、国道340号の改良工事に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県土木部と岩手県教育委員会文化課との調整を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は、大堤II遺跡のうち道路用地の6,000㎡を対象として、昭和61年6月2日から9月9日まで実施し、調査資料の整理及び報告書の作成は同年11月1日から翌年2月28日まで行った。

4．発掘調査は平井　進、玉川英喜が担当した。

5．発掘調査に際して、軽米町教育委員会や軽米町立晴山中学校等の御協力をいただいた。

6．岩質及び火山灰の分析や鑑定は次の方々へ依頼した。（敬称略）

岩質鑑定	佐藤地質工学研究所	佐藤二郎
火山灰の分析・鑑定	奈良教育大学	三辻利一

7．本報告書の執筆はＩ　調査に至る経過　を昆野　靖が、他は平井　進が担当した。

8．発掘調査では高沢喜一氏をはじめとする地元の方々の御協力をいただいた。

9．発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、遺跡調査略号ＯＴII－86を付して岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

序
例　言

本 文 目 次

I　調査に至る経過……3
II　位置と環境……3
　1　位置……3
　2　地理的環境……3
　3　地形……4
　4　地質……4
　5　基本層序……4
　6　歴史的環境……5
III　調査の方法と経過……9
　1　調査の方法……9
　2　経過の概要……13
IV　検出された遺構と遺物……17
　1　ピット……18
　2　陥し穴……28
　3　遺物……38
V　まとめ……51
　1　ピット……51
　2　陥し穴……52
　3　遺物……55
付篇　親久保遺跡、その他の遺跡出土火山灰の蛍光X線分析　三辻利一……56

図 版 目 次

第1図　岩手県全体図……1
第2図　遺跡位置図……2
第3図　基本層序柱状図……4
第4図　遺跡分布図……7
第5図　グリッド配置図及び遺構配置図…15
第6図　ピット（VIB－1、VIC－1、VC－1、VIC－4）…19
第7図　ピット（IVB－5、IVB－6、VB－2、VC－2）…21

第8図　ピット（ⅣB－11、ⅣB－10、ⅤB－1、ⅤB－3）…23
第9図　ピット（ⅣB－9、ⅥC－3、ⅣB－1、ⅣB－2）…25
第10図　ピット（ⅣB－3、ⅣB－4、ⅣB－7、ⅣB－8）…27
第11図　陥し穴（ⅥC－2）……28
第12図　陥し穴（ⅦB－1）……29
第13図　陥し穴（ⅥB－2、ⅥB－3、ⅥC－5、ⅥC－6）…31
第14図　陥し穴（ⅥC－7、ⅥC－8、ⅥC－9、ⅥC－10）…33
第15図　陥し穴（ⅥC－11、ⅦB－2、ⅦB－3、ⅦB－4）…35
第16図　陥し穴（ⅦC－2、ⅦC－1、ⅦC－3）……37
第17図　ⅣB－6ピット内出土遺物(1)……41
第18図　ⅣB－6ピット内出土遺物(2)……42
第19図　ⅣB－6ピット内出土遺物(3)……43
第20図　ⅣB－6ピット内出土遺物(4)……44
第21図　遺構外出土遺物、土器(1)……45
第22図　遺構外出土遺物、土器(2)……46
第23図　遺構外出土遺物、石器(剝片・礫)47
第24図　遺構外出土遺物、石器(礫)・古銭48
第25図　遺構外出土遺物、石器(礫)……49
第26図　遺構外出土遺物、石器(礫)……50

表　目　次

第1表　石器一覧表……39
第2表　土器観察表……40

写真図版目次

写真図版1　遺跡全景（空中写真）……63
写真図版2　作業風景等……64
写真図版3　ピット（ⅥB－1、ⅥC－1、ⅤC－1、ⅥC－4）…65
写真図版4　ピット（ⅣB－5、ⅣB－6、ⅤB－2、ⅤC－2）…66
写真図版5　ピット（ⅣB－11、ⅣB－10、ⅤB－1、ⅤB－3）…67
写真図版6　ピット（ⅣB－9、ⅥC－3、ⅣB－1、ⅣB－2）…68
写真図版7　ピット（ⅣB－3、ⅣB－4、ⅣB－7、ⅣB－8）…69
写真図版8　陥し穴（ⅥC－2、ⅦB－1）……70
写真図版9　陥し穴（ⅥB－2、ⅥB－3、ⅥC－5、ⅥC－6）…71
写真図版10　陥し穴（ⅥC－7、ⅥC－8、ⅥC－9、ⅥC－10）…72
写真図版11　陥し穴（ⅥC－11、ⅦB－2、ⅦB－3、ⅦB－4）…73
写真図版12　陥し穴（ⅦC－2、ⅦC－1、ⅦC－3）……74
写真図版13　ⅣB－6ピット内出土遺物…75
写真図版14　ⅣB－6ピット内出土遺物…76
写真図版15　ⅣB－6ピット内出土遺物…77
写真図版16　遺構外出土遺物(土器)……78
写真図版17　遺構外出土遺物(土器・石器)79
写真図版18　遺構外出土遺物(石器・陶磁器・古銭）…80

青森県
遺跡位置
階上岳
雪谷川
二戸市
折爪岳
久慈市
安比川
平藤川
七時雨山
秋田県
八幡平
北上川
丹藤川
小本川
柴沢川
姫神山
岩手山
葛根田川
四十四田ダム
岩洞ダム
外山ダム
米内川
盛岡市
中津川
御所ダム
宮古市
閉伊川
太平洋
豊沢ダム
早池峰山
織笠川
花巻市
豊沢川
小槌川
猿ヶ石川
釜石市
北上市
遠野市
湯田ダム
和賀川
田瀬ダム
江刺市
気仙川
焼石岳
水沢市
胆沢川
大船渡市
石淵ダム
陸前高田市
磐井川
栗駒山
一ノ関市
0
30
60KM
宮城県

第1図　岩手県全図

第2図　遺跡位置図

I　調査に至る経過

九戸郡軽米町地内における一般国道340号の道路改良工事は、観音林南側を迂回する総延長2,600mの改良工事であり、昭和60年度に着工して昭和66年度完成の予定である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地については、昭和60年12月3日付け「二土第1334号　一般国道340号道路改良工事施行に伴う埋蔵文化財発掘調査の事前調査について」により、岩手県教育委員会文化課長あての依頼があり、文化課において同12月23・24日の両日現地確認調査を実施した。

路線内には既に大堤II、皂角子久保VI、皂角子久保VII、小沼I等の遺跡が確認されており、現地調査の結果は、昭和60年12月25日付け教文第526号により二戸土木事務所長あて回答した。これにより、昭和61年度に大堤II遺跡の発掘調査が実施されることとなり、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業計画に編入された。

二戸土木事務所から委託をうけた当埋蔵文化財センターは、昭和61年6月1日付け契約により発掘調査に着手することとなった。

II　位置と環境

1　位置

本遺跡の所在する軽米町は、岩手県の北端に位置し、北は青森県名川町、南郷村、階上町に接する。東は岩手県種市町と大野村、南は山形村と九戸村、西は二戸市に接する。本遺跡は折爪岳(852m)山頂の北約6km、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の東約6.5kmに位置する。同地点は北緯40度19分7秒、東経141度23分1秒付近である。本遺跡は晴山郵便局の南東400m、晴山中学校の北200m付近に所在する。

2　地理的環境

本遺跡の東約2.5kmには瀬月内川が北流している。同河川は山形村の明神岳（887m）を水源とし部分的には蛇行しながらも全体的にはほぼ北流する。同河川は二級河川であり水量も少ないが、流域には九戸村の戸田、伊保内、江刺家、軽米町の山内、晴山、高家など多くの集落が立地し生活用水としての役割を果している。

軽米町の年平均気温は9.3℃、降水量は1,047mmである。(注1) 最寒月平均気温が−3.5℃、最暖月平均気温が23℃である。ケッペンの気候区分からいえば冷帯湿潤気候に属する。この気象条件を岩手県内の他の地域と比較すると、気温では内陸性気候の特徴を有する盛岡とほぼ同じ、降水量

においては非常に少ない。[注2] 初霜は10月初旬、終霜は5月中旬で積雪期間は約3カ月である。風向は年間を通じ西風が多いが特に冬期間は季節風による西風となる。5月～7月に北東風（山背）が吹きこむことがあり、その日数が多いと冷害の要因となる。

3　地形

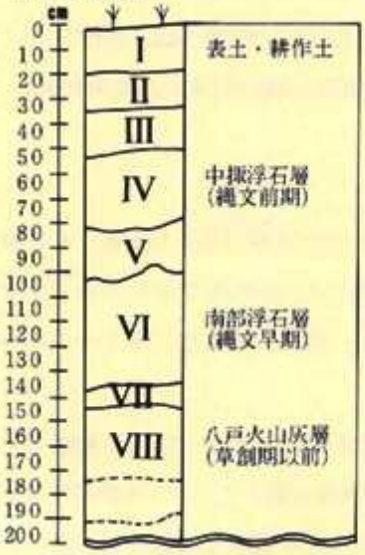
本遺跡がのる軽米町晴山地区は北上山地北端に位置し、西に折爪岳山地や猿越峠山地がほぼ南北に連なっている。折爪岳山地は急斜面を形成しその脚部は明瞭であるが、猿越峠山地の脚部は特にその東側ではそれ程明瞭とはいいがたい。これらの山地の東側には瀬月内川が山地に平行するように北流する。この山地と瀬月内川の間は幅のせまい丘陵となっているが、中村（本遺跡の南約2km）付近から北部では比較的まとまった面的広がりをもつ。これが観音林丘陵である。この丘陵は標高200～300mでその起伏量は概ね50～150mである。しかも、本遺跡付近では起伏量が50m未満であり、なだらかな丘陵のなかでも一層なだらかな地形となっている。本遺跡の現況は、尾根は荒地、尾根の裾野及び平坦地は畑地である。

本丘陵地には瀬月内川に注ぐ水量の少ない沢が幾本か流れているが、それらの沢による開析は部分的であり狭く起伏の小さい谷底平野となっている。したがって尾根も明瞭な尾根筋を作って一定方向にのびることはなく、尾根の斜面も緩やかである。

4　地質

馬淵川寄りの山地斜面は第三紀層が基盤として露われ、瀬月内川寄りには直接古生層のチャート、スレート等が基盤となっている。丘陵は大小の沢や川によって開析され、谷底平野は砂、礫、泥の堆積となっている。

本遺跡は観音林丘陵の縁辺にのり、火山砕屑物を基盤としている。表土の土壌は駒板統の黒ボクである。



第3図　基本層序柱状図

5　基本層序

調査区の微地形は、尾根の頂部とそこから続くやや急な斜面、及び尾根の裾野として広がる平坦地の三つに区分される。この微地形の層序を比較すると、層の欠落や層厚の相違となって表われる。

尾根の頂部では第II～III層が欠落する所が多い。南～西の斜面では第II～IV層が流失しているが、東斜面では概ね第II層のみが流失している。平坦地の縁辺は第II層が厚く堆積している。以上のことから、最も平均的な層序、層厚を示すと考えられたS－90、E－170地点の土層を観察し基本層序ととらえた。

第Ⅰ層10YR2/2～2/1黒褐色～黒色土	黒ボク。一部は腐葉土との混土。遺跡を被う表土で一部は畑地として耕作されている。層厚20cm。
第Ⅱ層10YR2/1　黒色土	黒ボク。十和田b降下火山灰が混入する。平安時代の遺構検出面である。層厚20cm。
第Ⅲ層10YR1.7/1～2/2黒色土	浮石を含む。縄文後～晩期の遺構検出面である。層厚20cm。
第Ⅳ層10YR3/4～2/2暗褐色土	中礫浮石を含む。黒色土（第Ⅲ層）との混土で上位は黒色土が卓越するが、下位になるほど中礫浮石が増し明るくなる。粘性に乏しい。層厚25cm。
第Ⅴ層10YR2/1～2/2黒色～黒褐色土	南部浮石粒を含む。縄文早～前期の遺構検出面である。層厚25cm。
第Ⅵ層7.5YR5/8　明褐色土	南部浮石層。一次堆積で全面に広がる。層厚は40cmで一定している。
第Ⅶ層10YR2/1～2/2黒色～黒褐色土	上位に若干南部浮石粒が混入するところもある。層厚5～8cmで一定している。
第Ⅷ層10YR4/4～4/6褐色土	八戸火山灰層。粘性がある。土色、粒径等により細分が可能である。遺跡全体を覆う基盤層である。層厚50cm以上。

6．歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、軽米町及びその周辺からの確実な報告例はないが、叺屋敷Ⅰaの遺跡から「『旧石器』的要素を持つ石器」として尖頭器3点、彫器1点が報告されている。(注3) しかし、出土層位が不明であり再吟味する必要がある。

縄文時代草創期の遺構と遺物は馬場野Ⅱ遺跡から発見されている。同遺跡は本遺跡の東約5.9kmに位置し、瀬月内川とその東を蛇行しながら北流する雪谷川との間の丘陵地に立地している。該期の遺跡は県北地区では唯一の遺跡である。

県北部の縄文時代早期の遺跡数は、近年の発掘調査が増加するに伴いその数を増してきている。当町では土弓Ⅰ遺跡、馬場野Ⅱ遺跡、天馬沢遺跡、平中遺跡が知られ、前二者は発掘調査によって遺構や遺物が確認されている。これらの遺跡は町の中央部とやや東寄りに位置し、なだらかな丘陵に立地している。

縄文時代前期の遺跡は叺屋敷Ⅰa遺跡、叺屋敷Ⅰb遺跡、叺屋敷Ⅱ遺跡、叺屋敷Ⅲ遺跡、大日向Ⅱ遺跡などが発掘調査されているほか、少なくとも駒木Ⅶ遺跡、駒木遺跡、上館遺跡の3遺跡が知られている。

縄文時代中期の遺跡は、遺跡数が増加し、規模においても前期に比較して拡大される。時期は中期前半に属する遺跡は少なく、ほとんどが中期末葉のものである。住居跡でみると叺屋敷Ⅰａ遺跡の34棟、君成田Ⅳ遺跡10棟、叺屋敷Ⅱ遺跡の７棟など集中的に立地する傾向がみられる。

縄文時代後期は更に遺構数が増加する。馬場野Ⅱ遺跡の35棟、駒板遺跡の34棟、大日向Ⅱ遺跡の27棟などのように住居跡数も増加する。

縄文時代晩期は後期にあげた遺跡以外に40以上の遺跡が知られ、時期別の遺跡数では最も多い。

以上のように縄文時代の遺跡は時期が新しくなるほど遺跡数が増加する傾向にある。

弥生時代の遺跡としては馬場野Ⅱ遺跡が上げられるが、遺物のみの出土例は君成田Ⅳ遺跡、土弓Ⅰ遺跡、駒板遺跡等がある。馬場野Ⅱ遺跡では第Ⅸ群土器として一括されているが「土器から見た時期は東北地方における弥生時代初頭頃と考えられる」[注4]と報告されている。また、叺屋敷Ⅰａ遺跡からは谷起島式併行とされるもののほかに、わずか１点のみの出土ではあるが後北Ｃ２式に併行する土器が報告されている[注5]。また、『軽米町誌』によれば長倉遺跡から甑が、諏訪の森遺跡からは江別Ｃ式土器が出土している[注6]。

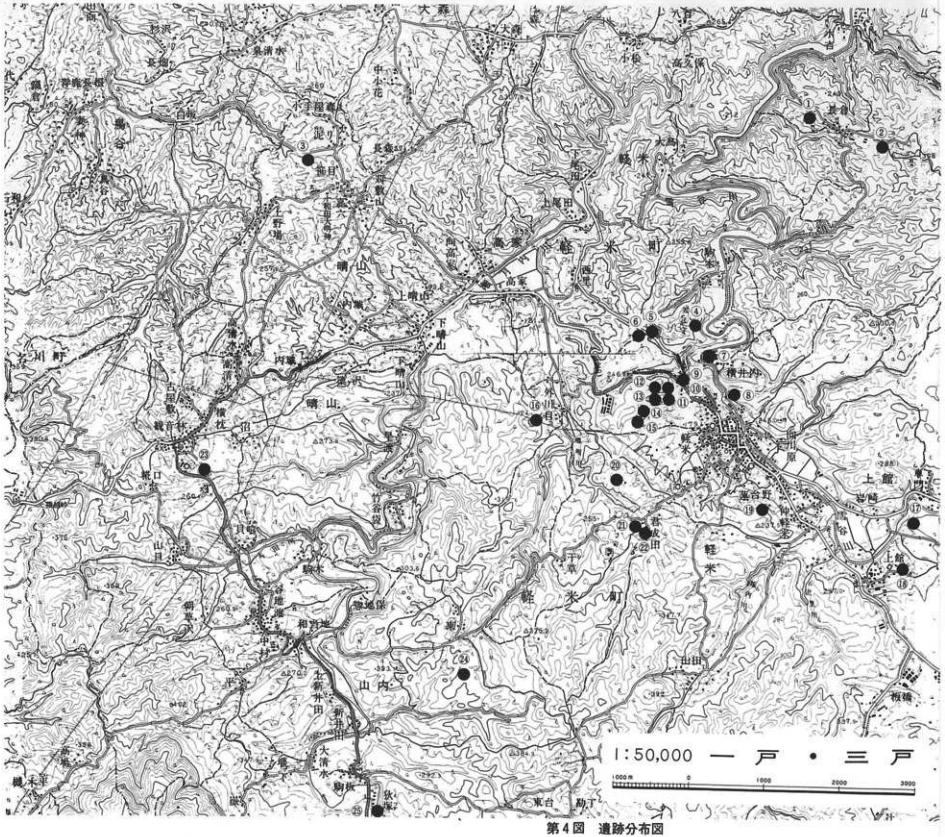
古墳時代から奈良時代にかけては縄文時代の中～晩期ほどの解明は進んでいない。町内唯一の古墳といわれる御前水古墳は未発掘であり、その全容は不明であるが同古墳からは蕨手刀１振が出土している[注7]。同古墳は本遺跡の東4.5kmに位置している。また、同町誌では古代城柵として「チャシ」をあげ、下野場館にその可能性をもとめている[注8]。

発掘調査によって奈良時代の遺跡と確認されたのは君成田Ⅳ遺跡、叺屋敷Ⅰａ遺跡、駒板遺跡、大日向Ⅱ遺跡である。

平安時代にはいると叺屋敷Ⅰa遺跡、叺屋敷Ⅰb遺跡、大日向Ⅱ遺跡と大鳥Ⅰ遺跡、土弓Ⅲ遺跡、君成田Ⅴ遺跡、君成田Ⅵ遺跡、狄塚Ⅰ遺跡等[注9]が知られている。また、土師器、須恵器が出土している遺跡はこれらのほかにも多数あることから、該期の遺跡は相当数にのぼると思われる。それは奈良～平安時代にはかなりの村落が構成されていたことを推測させる。

町内の徳薬寺に収蔵されている薬師如来像、脇侍菩薩像等の仏像は平安時代中期の作といわれている[注10]。材質はカツラであり、浄法寺町天台寺の聖観音像と同様である。中央ではヒノキ材を使用するのが通例であることから当地方の作と考えられている。

中世における当町は南部氏の統治下にはいり、糠部五郡中九戸郡に属したとされるが、南部氏の直接統治が鎌倉期の初めまで遡るという説について、町誌は否定的見解をとっている[注11]。鎌倉期の後半には北条氏の支配に一時入るが、中世末の天正年間には再び南部氏一門の支配に入るなど揺れ動いている。しかし、当該時期の詳細な文献史料を欠くため、軽米町の詳細な変遷



①長倉No.14遺跡
②長倉遺跡
③下野場廻跡
④大島Ⅰ遺跡
⑤土弓Ⅰ遺跡
⑥土弓Ⅱ遺跡
⑦駒木Ⅰ遺跡
⑧駒水遺跡
⑨大日向Ⅱ遺跡
⑩ボ屋敷Ⅰa遺跡
⑪ボ屋敷Ⅰb遺跡
⑫ボ屋敷Ⅱ遺跡
⑬ボ屋敷Ⅲ遺跡
⑭馬場野Ⅰ遺跡
⑮馬場野Ⅱ遺跡
⑯御前水古墳
⑰平中遺跡
⑱上館遺跡
⑲諏訪の森遺跡
⑳若戸田Ⅳ遺跡
㉑若戸田Ⅴ遺跡
㉒若戸田Ⅵ遺跡
㉓大畑Ⅱ遺跡
㉔駒板遺跡
㉕狄塚Ⅰ遺跡
※天馬沢遺跡は平中遺跡の北東約1.5kmに位置するため図幅外である。

第4図　遺跡分布図

は不明である。中世の最終末の戦いとなった九戸政実の乱（1591年）では当町に勢力を有していた地侍のうち小軽米左衛門佐久俊のみが三戸南部の信直に味方し、他はすべて政実側に立っている。現在、当時の城館跡との伝承をもつ館跡が6遺跡あるが、『岩手県中世城館跡分布調査報告書』によれば、町内にある中世城館の遺跡数は32を数えている。

近世後半から幕末にかけて砂鉄を原料とする鉄産業が北上山系北部に成立する。八戸藩領九戸郡では大野鉄山が最大で玉川・金取・葛柄・水沢・大谷・滝山の6鉄山から成る。[注12] 玉川鉄山は軽米町の東端に位置する。玉川鉄山跡の発掘調査は県立博物館が昭和60年から調査を行ったが、その規模が大きく全貌を明らかにするまでには至っていない。

II　注記

1．岩手県（1971）『土地分類基本調査　一戸』（P．4）

2．岩手日報社（1985）『岩手年鑑　昭和60年版』によれば次のとおりである。

	平均気温	降水量
盛岡市	9.6℃	1237.5mm
宮古市	10.1℃	1456.0mm
大船渡市	10.5℃	1718.5mm

3．小平忠孝（1983）『臥屋敷Ｉａ遺跡発掘調査報告書』（岩埋報第61集）、岩埋セ（P.235）

4．工藤利幸（1986）『馬場野II遺跡発掘調査報告書』（岩埋報第99集）、岩埋セ（P.313）

5．注3に同じ（P.232）

6．7．8．軽米町（1975）『軽米町誌』（P.33～35）

9．岩手県教育委員会の『遺跡地名表』による。

10．注6に同じ（P.60）

11．注6に同じ（P.67）

12．注6に同じ（P.140）

III　調査の方法と経過

1．調査の方法

（1）野外調査

〔グリッドの設定〕（第5図）

調査範囲は南西方向から北東方向へ延びる部分と、北西方向から南東方向に延びる部分とから成るが調査の中心（主体部）となるのは前者である。その主体部には二戸土木事務所が設定した中心杭がほぼ一直線に並ぶ。

この中心線を基線とし、中心杭№13を基点に縦横30mの大グリッドを調査区全域が網羅されるように設定した。得られた大グリッドに北西から南東に向かってA～E、南西から北東へI～VIIIを付し、その組み合わせによりＩＡ区、IIＢ区のように命名した。次に、各大グリッドを同様の操作により10等分し、アルファベットの小文字ａ～ｊと算用数字の0～9を付し、その

組み合わせにより０ａ、１ｂのように小グリッド名を命名した。したがって大グリッドは30m区画、小グリッドは３ｍ区画である。

次に、総グリッドを１ｍごとに区分した。北西隅を座標原点とし北東方向へはＥ、南西方向にはＳを冠して表わした。地点を表わす場合はこの組み合わせを用いた。

基準点の測量は東奥測量設計株式会社に依託し、次のような結果を得た。経線・緯線は平面直角座標第Ｘ系、標高はグリッド区画に使用した杭高である。

（Ｓ-60、Ｅ-60）	Ｘ＝＋35,531.543m	北緯	40°19′7″.509	標高 249,914m
	Ｙ＝＋46,777.862m	東経	141°23′1″.717	真北方向 −0°21′23″
（Ｓ-60、Ｅ-210）	Ｘ＝＋35,588.276m	北緯	40°19′9″.320	標高 244,170m
	Ｙ＝＋46,916.650m	東経	141°23′7″.611	真北方向 −0°21′26″

なお、農道と町道が調査区主体部を横断するように通っていたため、農道より西側をＡ区、農道と町道の間をＢ区、町道より東側をＣ区と便宜的に呼んだ。

〔粗掘り〕

Ａ区はＳ-60とＥ-40の線に沿って１ｍ幅で直交するようにトレンチを入れた。Ｂ区はＳ-59とＳ-61の線とＥ-171とＥ-175の線に沿って１ｍ幅で４本のトレンチを、Ｃ区はＳ-59とＳ-61の線に沿って１ｍ幅のトレンチを２本入れ、それぞれ、表土の厚さ、遺構の有無、遺物の分布状況など、遺跡の概要を把握した。その結果、Ａ区は遺物が土器片１点が出土したのみで遺構は認められず、Ｂ区、Ｃ区も遺物はほとんど出土せず、ピットや陥し穴が合計３基検出されたのみであった。また、層序はIIの５で述べたとおりであることから一部は手掘りによって行ったが、大部分は重機によって行った。なお、重機は中瓶浮石層までと、南部浮石層までの２回に分けて行った。

〔遺構検出と遺構の命名〕

遺構検出はＡ区からＣ区へ向かって順に進めた。また、遺構検出は第II層上面（平安時代の遺構）、第IV層上面（縄文時代中期以降の遺構）および第Ｖ層上面（縄文時代早〜前期）の３面で行った。また第VII層上面では18の小グリッドで試掘をしたが遺構・遺物は検出されなかった。

検出された遺構には大グリッドごと、検出順に連番を付した。数字の後に遺構の種別を加え遺構名とした。遺構の種別ではピット（土坑）とトラップ・ピット（陥し穴）は即断できない場合も考えられたため、野外調査ではすべてピットの項に含めることとした。

〔精査と実測〕

ピット、陥し穴とも２分法をとった。半截にあたっては遺構の形を優先させたが、詳細な断面形や堆積状況を必要とした場合は、一部の地山を含めて裁断した。

平面実測は遣り方実測で行い、標高の計測はレベルを用いて行った。遺構実測図は20分の１

の縮尺で行った。埋土の土層は上位から順に算用数字を用いて表わし、基本層序のローマ数字とは区別した。

遺構の観察や精査の過程において必要と思われる事項は、フィールドカードに記録した。

〔写真撮影〕

現場での写真撮影は35mm判2台（モノクロ、カラーリバーサル）と6×7cm判のモノクロ1台を使用した。また、空中写真はほぼ調査が終了に近づいた8月末に東邦航空株式会社に委託して行った。

（2）室内整理

〔整理担当者と整理計画〕

野外調査で得た資料の整理は、一部は野外調査と並行して行ったものもあるが、その大半は当センターで行った。野外調査には平井、玉川が当ったが、整理は平井が担当した。しかし、本文記載に当っては両調査員の意思疎通を計るように心がけた。

室内整理は11月1日から翌年2月末日まで4カ月、整理作業補助員1名を充当して行った。11月は遺物の洗浄・注記・接合・復元と遺構図面の点検・合成・トレースを中心に、12月は遺物実測と調査略報用の図版及び本文記述、1月は遺物トレースと拓本作成及び遺物の観察、2月は図版作成と本文の執筆を進めた。本文執筆と割付けを除いて概ね予定通り進行した。

〔遺構図面〕

現場で作成した図面を点検した後、登録番号を付し台帳に記載した。必要に応じて図面を合成・分解し、報告書掲載用に第2原図を作成した。トレース、図版作成は作業員が、図版の割付けは調査員が行った。

〔遺物処理〕

野外調査と並行して、遺物の処理（洗浄・注記・接合・復元）を行った。しかし、一部は室内整理まで残った。遺物量は、石器が16点、土器は接合・復元しない状態でコンテナ1箱と少なかったため、上記の処理の後、報告書掲載用の遺物を選び仮番号を付した。登録番号は報告書で使用した番号とし、台帳に記載した。登録しなかった遺物は、縄文のみの土器片と土師器片および陶磁器片である。

実測図又は拓影図として報告書に掲載した遺物と陶磁器片は写真撮影をし、報告書の巻末に写真図版として一括し掲載した。写真は35mmモノクロで、撮影した。

〔写真整理〕

野外調査中に撮影した写真は35mm判と6×7cm判に分けてネガアルバムに整理した。スライドはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し、台帳に記載した。

遺物写真は遺物写真として一括し、撮影にネガアルバムに整理した。

（3）掲載図版等について

本報告書に掲載した図版は下記の要領で作成したものである。

〔遺構図版〕

遺跡位置図や遺構配置図等は任意の縮尺とし、縮尺率をそのつど記した。各遺構の平面図と断面図は40分の1の縮尺とし、図版ごとにスケールを付した。使用したスクリーントンは凡例に示したとおりである。方位は真北を指す。

〔遺物図版〕

遺物実測図は原寸大で行い、報告書に掲載する時点で土器と剥片石器は2分の1に縮少した。礫石器は3分の1の縮尺を原則としたが、特に大きい物は4分の1とし図版にその縮尺を注記した。拓影図も2分の1で掲載した。

遺物番号は土器は1から、石器は51から連番を付した。

〔写真図版〕

遺物は概ね遺物図版と同じ縮尺を用いたが、遺構やその他の写真の縮尺は不安である。

遺物番号は遺物図版と同一である。

〔凡例〕

地山……　　調査区外……　　撹乱……

本報告で使用した略記は次のとおりである。

To-a……十和田a降下火山灰

To-b……十和田b降下火山灰

Ch　……中掘浮石

Nb　……南部浮石

Nb p……南部浮石粒

岩埋報……岩手県埋文センター発掘調査報告書、及び岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書

岩埋セ……㈶岩手県埋蔵文化財センター、及び㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

（注）㈶岩手県埋蔵文化財センターは、昭和60年4月から、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターとなった。

2．経過の概要

〔野外調査〕

年度当初の予定では7月1日から調査を開始する計画となっていたが、都合により1カ月繰り上がって6月2日から始めることになった。そのため、5月下旬に依託者の二戸土木事務所と当センターとの立会を得て現場確認、土捨て場等の協議を行った。発掘調査を行うに当っての特別な支障条件はなかったが、調査区の東側を流れる沢を処理するための工事用道路として利用したい旨要望があった。また、調査区の隣接地を事務所用地として地権者の山内秀美氏の快諾を得て利用した。

5月30日　資材を搬入する。

6月2日　資材整理及び遺跡内の雑物を撤去する。

6月3～7日　計画どおりA区から粗掘りに入る。中心杭№13を基点として基準測量を始める。A区は斜面上部では黒色土が流失しており第Ⅶ層が露出していた。下部では黒色土が厚く堆積している。第1次遺構検出面(第Ⅱ層上面)及び第2次遺構検出面（第Ⅳ層上面）までトレンチを入れる。遺構は全く検出されず、縄文土器片2点が上位から出土したのみであった。

6月6～9日　B区に第1次遺構検出面までのトレンチを入れる。尾根では遺構が検出されなかったが、平坦地となる町道付近で十和田a降下火山灰を埋土とするピットを検出した。遺物は縄文土器片数点が出土したのみである。

6月9～14日　尾根の裾野から町道までを中心に第1次検出作業を行う。平安時代の遺構2基を検出する。

6月12日　遺物の出土状況や土捨て等から重機による粗掘りを行うこととした。

6月16日　重機による粗掘りをA区から始める。石皿2点を磨石1点が一括して出土したが、遺構は検出されなかった。

6月19～23日　重機を使ってB区の粗掘りを行う。併行して第2次遺構検出を行う。

6月24～27日　重機を使ってC区の粗掘りを行う。併行して第1次遺構検出で検出されていた遺構の精査及び実測と第2次遺構検出を進めた。遺構検出は30日まで行われた。トレンチで溝状陥し穴を検出していたため、外にも遺構が検出されると思われたが、遺構・遺物とも発見できなかった。

7月1～9日　B区の遺構精査及び実測を中心に残っていた遺構検出を進めた。9日に第3次検出面（第Ⅵ層上面）を対象としてB・C区にトレンチを入れた。A区及びB区の尾根南西斜面で遺構は検出されなかったが、B区の尾根の頂部でピット2基を、C区では円筒状陥し穴1基を検出した。第Ⅳ層（中掘浮石層）の下に遺構が確認されたため、現在検出されている遺構の精査・実測を急ぐことと、トレンチを入れて遺構の広がりを促えることを当面の目

標とした。

7月10～14日　尾根の頂部を中心に手掘りによって遺構の検出を進めた。その結果、あらたに6基のピットを検出した。

7月15～28日　尾根を中心に遺構の検出・精査・実測を進めた。その結果、第IV層より上位で計10基、第IV層より下位で計6基のピットを調査した。

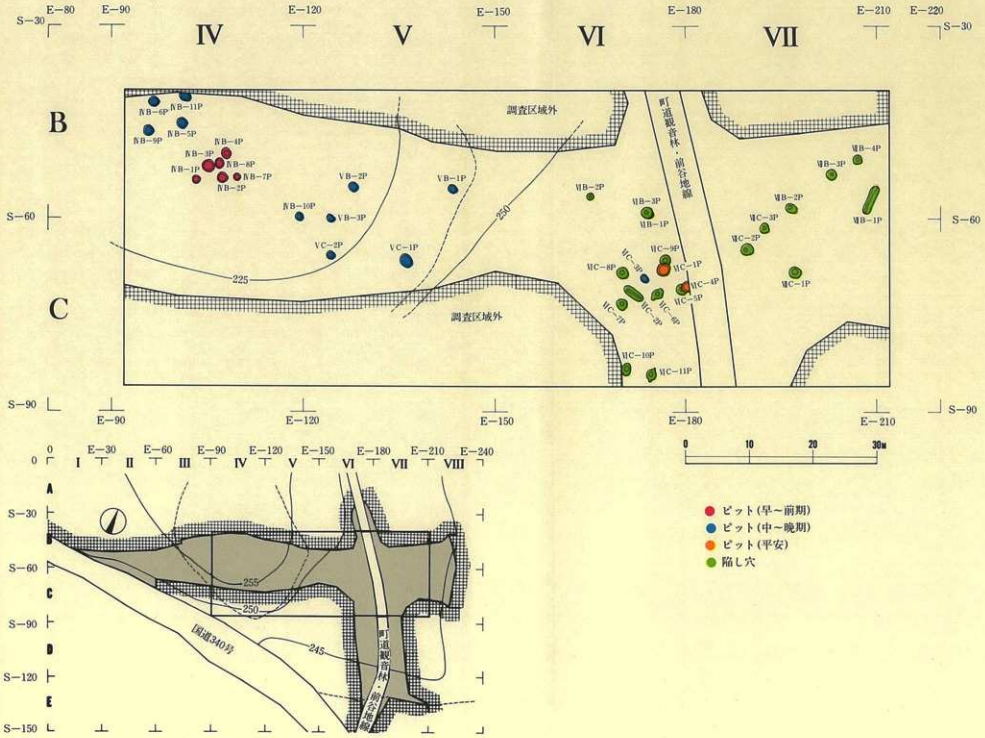
7月29日～8月2日　再び重機による粗掘りを行った。その結果、VIB区、VIC区、VIIB区に新たに14基の円筒状陥し穴が検出された。また、遺物の整理も併行して行った。

8月4～12日　遺構の精査・実測を行う。遺物はIVB－11ピット以外はほとんど出土しない。

8月18～29日　遺構の精査・実測を行う。29日に調査区内に建てていたプレハブ1棟を撤去する。円筒状陥し穴を詳細に観察したところ同遺構に付属すると思われる柱穴状ピットが見られること、内部に何らかの施設が作られていたと思われる痕跡が見られる、等のことが明らかになってきた。

8月29日～9月3日　遺構の精査・実測と第4次遺構検出（第VII層上面）を行う。遺構検出は小グリッドごとに市松状に行ったが、遺構及び遺物は発見できなかった。

9月4～9日　図面の補正等資料の整理点検、荷物の梱包、遺跡内の危険箇所の埋め戻し等をして、9日に野外調査のすべてを完了し撤収した。



第5図　大堤II遺跡遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構はピット20基と陥し穴17基である。

遺物が出土した遺構は３基であるが、うち２基は埋土中から石器が１点ずつ出土したのみである。したがって、大部分の遺構の時期は遺物資料によっては決定できない。しかし、本遺跡の層序は前述したとおりであることから、十和田ａ降下火山灰と中掘浮石及び南部浮石の存在によって、ある幅をもちながらも時期を決定することができる。すなわち、十和田ａ降下火山灰を埋土とする遺構が平安時代に、中掘浮石層より上位は縄文時代中期以降に、中掘浮石層より下位で南部浮石層より上位の遺構は縄文時代早期か前期に属すると考えられる。以上の観点から時期区分すれば、平安時代の遺構はピット３基、縄文時代中～晩期の遺構はピット17基と溝状陥し穴２基、縄文時代早～前期の遺構は円筒状陥し穴15基となる。

検出された遺構の概要は表記のとおりである。なお、表中の記載は次の要領で行った。平面形の形状は開口部の形状を表わした。溝状陥し穴の断面形の形状は短軸方向の形状である。規模は各項目とも平均値をとった。また、開口部径と底部径は長軸と短軸の差が概ね10cm以上となる場合に長軸×短軸として表わした。深さは底部中央での計測値である。

遺物は縄文土器、土師器、石器、陶磁器及び古銭が出土した。遺物の総量はコンテナ２箱である。縄文土器の大部分はⅣＢ－６ピット内から小破片の状態で出土したものである。遺構外から出土した縄文土器はきわめて少量である。土師器は３点のみである。石器は剝片石器５点、礫石器11点の計16点が出土した。遺構内から出土したのは２点のみで，他は遺構外から出土したものである。陶磁器は６点出土した。出土層位は表採又は第Ⅰ層、出土地点はⅥＢ区、ＶＣ区である。古銭は「寛永通寶」１点が出土した。表採である。

1ピット

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIB－1ピット	平坦地	II層上位	隅丸方形	III状	第6図	3
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
195×180		175× 160	28	なし		

埋土	十和田a降下火山灰（付篇参照）が大半を占める。下位はパミスを含まない黒色土である。
備考	壁の一部に掘り過ぎがみられる。
時期	平安中葉

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC－1ピット	平坦地	II層上位	円形	ピーカー状	第6図	3
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
210		160	90	なし		

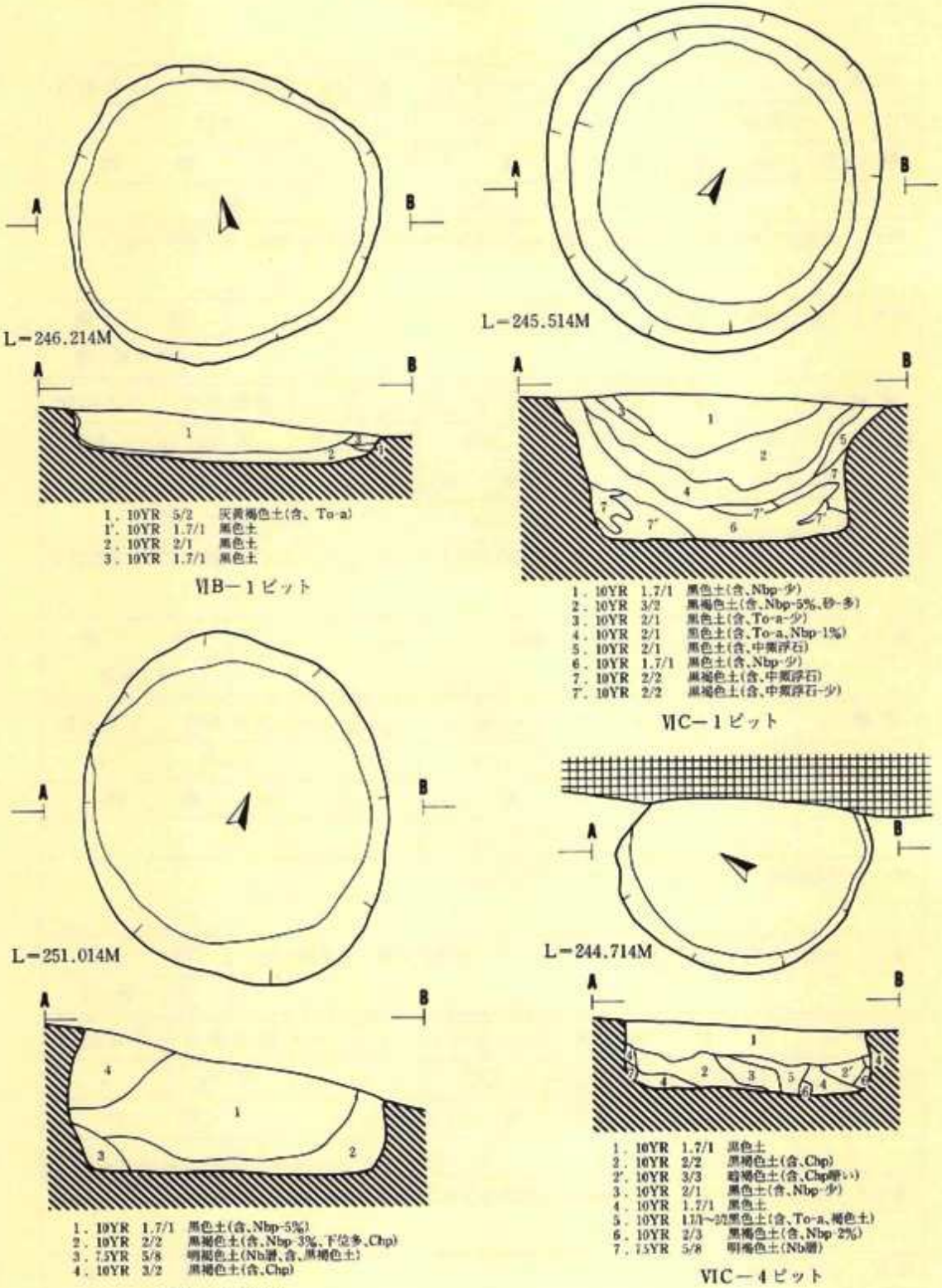
埋土	中位に十和田a降下火山灰がU字状に堆積する。下位の黒～黒褐色土中には中擦浮石が含まれる。
備考	
時期	平安中葉

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC－4ピット	平坦地	II層上位	隅丸方形	ピーカー状	第6図	3
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
138		130	40	なし		

埋土	上位は黒色土がほぼ水平に堆積している。下位は中擦浮石を含む黒褐色土で、中央には十和田a降下火山灰が堆積している。
備考	遺構の一部が道路の造成にともなって破壊されている。
時期	平安中葉

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VC－1ピット	南東斜面	III層上位	円形	ピーカー状	第6図	3
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
205× 190		170	65	なし		

埋土	南部浮石粒を含んだ黒褐色土が大部分である。斜面上位側は中擦浮石の混土である。
備考	斜面上位側は湾曲して立ち上がる。底部はVI層の一部を掘り込んでいる。
時期	縄文中期以降



S=$\frac{1}{40}$

第6図　ピット（VIB－1、VIC－1、VC－1、VIC－4）

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－5ピット	尾根の頂部	Ⅳ層上位	円形	フラスコ状	第7図	4
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
160	120	130	95	なし		

埋土　南部浮石粒が混入した黒～黒褐色土が大半を占める。炭化物が比較的多く混入する。

備考　上部は崩壊し、頸部が下位にみられる。

時期　縄文中期以降

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－6ピット	尾根の頂部	Ⅳ層上位	円形	フラスコ状	第7図	4
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
155	115	170	78	縄文晩期の土器		

埋土　南部浮石粒を含む中撰浮石起源の暗褐色土が大半を占め、その土層内に縄文土器が多数含まれる。

備考　遺物は埋土上位から底部直上の中央部から出土する。

時期　縄文晩期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅤB－2ピット	東斜面	Ⅲ層下位	円形	フラスコ状	第7図	4
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
140	140	150	45	なし		

埋土　中撰浮石が若干含まれる黒褐色土が大半を占める。

備考　斜面に位置するため上部は流失している。底部はⅥ層を若干堀り込んで作られている。

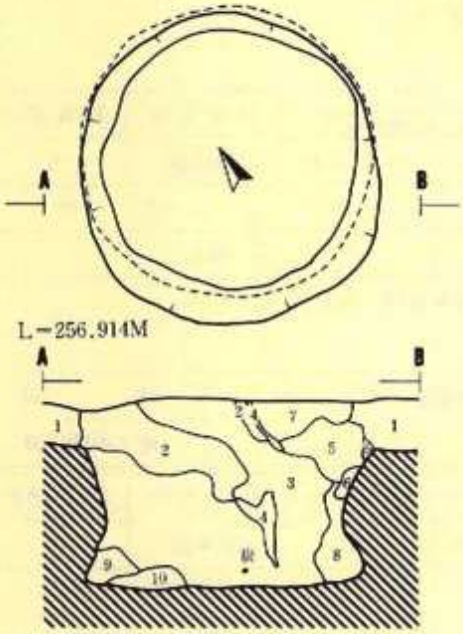
時期　縄文中期以降

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅤC－2ピット	南東斜面	Ⅴ層下位	円形	フラスコ状	第7図	4
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
130	110	130	45	石匙		

埋土　上位は南部浮石粒を含む黒褐色土が大半を占め、下位の壁際にはⅥ層やⅧ層の崩壊土がみられる。

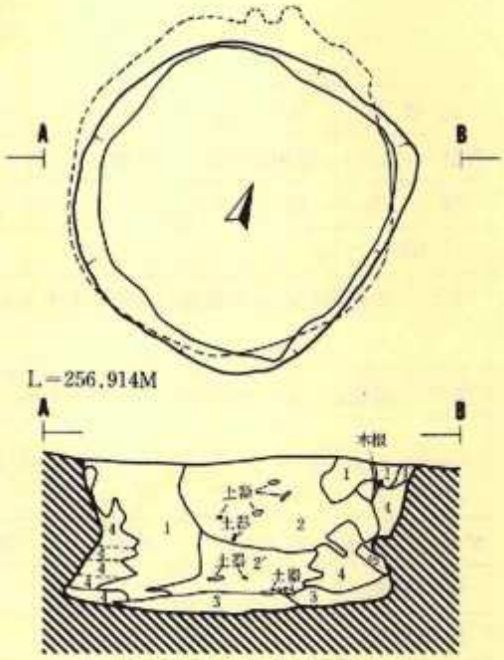
備考　斜面に位置するため上部は流失している。

時期　縄文中期以降



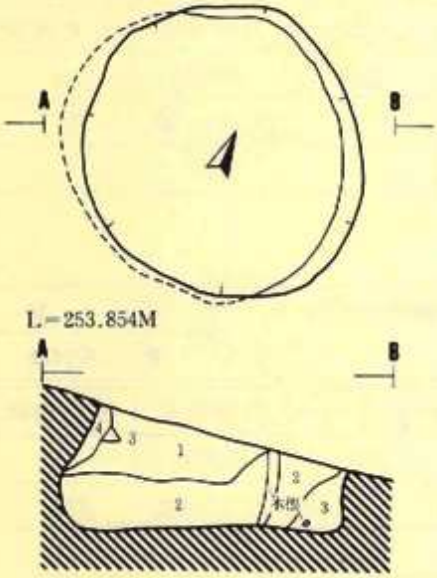
1. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-2%、Chp)
2. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-3%、Chp)
3. 10YR 2/1～2/2 黒～黒褐色土(含、Nbp-3%、炭化物)
4. 7.5YR 3/4 暗褐色土
5. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-3%、褐色土)
6. 10YR 4/6 褐色土(含、Nbp-10%)
7. 10YR 2/1 黒色土
8. 10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-2%)
9. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)
10. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp)

IVB－5ピット



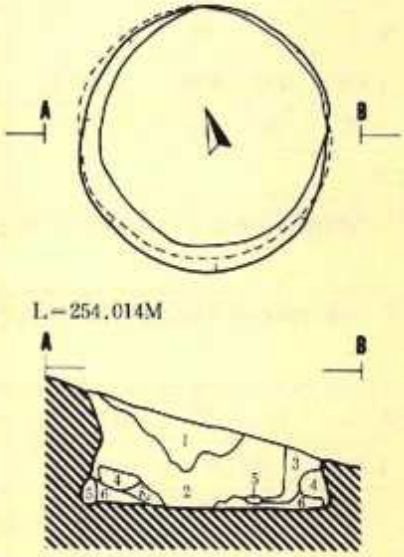
1. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-3%、Chp)
2. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-3%、Chp)
2'. 10YR 2/2 黒褐色土(含、褐色土、炭化物)
3. 10YR 2/1 黒色土(含、褐色土、炭化物)
4. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層、含、暗褐色土)
5. 10YR 4/6 褐色土(八戸火山灰)

IVB－6ピット



1. 10YR 1.7/1 黒色土
2. 10YR 2/1 黒～黒褐色土(含、Nbp-少)
3. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-1%)
4. 10YR 3/2 黒褐色土(含、Chp)

VB－2ピット



1. 10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-2%)
2. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-3%)
2'. 10YR 3/3 暗褐色土(含、褐色土-少)
3. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-1%)
4. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層、含、暗褐色土)
5. 10YR 4/6 褐色土(八戸火山灰)
6. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-1%、褐色土-多)

VC－2ピット

S=$\frac{1}{40}$

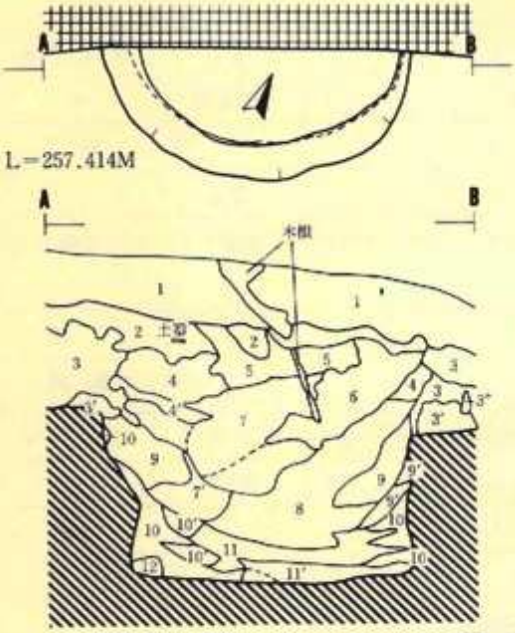
第7図 ピット（IVB－5、IVB－6、VB－2、VC－2）

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－11ピット	尾根の頂部	Ⅲ層上位	円形	ピーカー状	第8図	5
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
160		140	130	なし		
埋土	中擦浮石の再堆積層が埋土の大半を占める。自然堆積と思われる。					
備考	遺構の一部が調査区外へのびるため、一部は未調査である。				時期	
					縄文中期以降	

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－10ピット	南東斜面	Ⅳ層上位	隅丸長方形	皿状	第8図	5
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
123× 112		100×90	29	なし		
埋土	南部浮石粒を含んだ黒色土が大半を占める。					
備考	頂部に近い斜面に位置するため、上部は流失していると思われる。				時期	
					縄文中期以降	

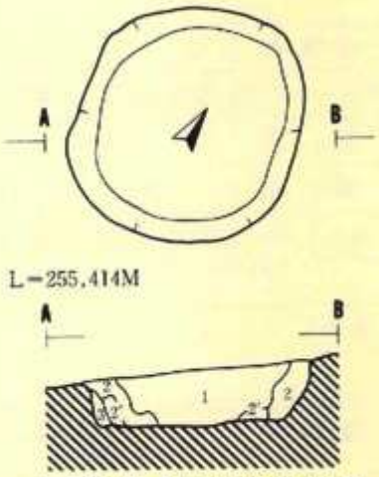
遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅤB－1ピット	尾根の裾部	Ⅳ層下位	円形	皿状	第8図	5
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
130		128	15	なし		
埋土	南部浮石粒を含んだ黒褐色土である。					
備考	上部は耕作地造成に伴い削平されているなめ、詳細は不明である。				時期	
					縄文中期以降	

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅤB－3ピット	東斜面	Ⅲ層下位	円形	皿状	第8図	5
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
125		110	40	なし		
埋土	中擦浮石を含んだ黒色土と含まない黒褐色土の2層に大別される。					
備考	斜面に位置するため、上部は流失していると思われる。				時期	
					縄文中期以降	



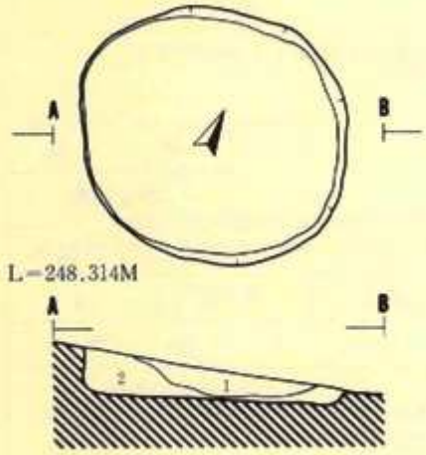
1. 10YR 2/1 黒色土
2. 10YR 2/1 黒～黒褐色土(含,Chp)
3. 10YR 3/4 暗褐色土(中礫浮石)
3'. 10YR 3/4 暗褐色土(やや明るい)
3'. 10YR 3/4 暗褐色土(暗い)
4. 10YR 2/2 黒褐色土(含,Nbp-1%)
4'. 10YR 2/2 黒褐色土(含,黒色土)
5. 10YR 1.7/1 黒～黒褐色土(含,Nbp-3%)
6. 10YR 2/3 黒褐色土(含,Nbp-3%)
7. 10YR 2/1 黒～黒褐色土(含,Nbp-3%)
7'. 10YR 2/1 黒褐色土
8. 10YR 2/2 黒褐色土(含,Nbp-1%)
9. 10YR 3/3 暗褐色土(含,Nbp-1%)
9'. 10YR 3/3 黒褐色土(含,黒褐色土)
10. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)
10'. 10YR 2/3 明褐色土(含,黒褐色土)
11. 10YR 2/3 黒褐色土(含,Nbp-1%)
11'. 10YR 2/3 黒褐色土(含,黒色土)
12. 10YR 4/6 褐色土(八戸火山灰)

IVB－11ピット



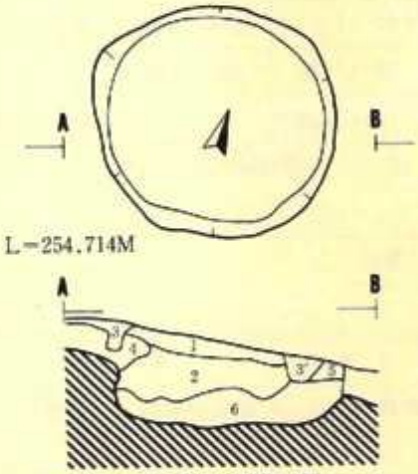
1. 10YR 2/1 黒色土(含,Nbp-7%,褐色土)
2. 10YR 2/3 黒褐色土(含,Nbp-1%)
2'. 10YR 3/4 暗褐色土(含,Nbp-1%)
3. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)

IVB－10ピット



1. 10YR 1.7/1 黒色土(含,Nbp-少)
2. 10YR 2/1 黒～黒褐色土(含,Nbp-1%)

VB－1ピット



1. 10YR 1.7/1 黒色土(含,Nbp-1%)
2. 10YR 2/1 黒色土(含,Nbp-2%,Chp)
3. 10YR 2/3 黒褐色土(含,Nbp-1%)
3'. 10YR 2/3 黒褐色土(含,Chp)
4. 10YR 3/4 暗褐色土(含,Nbp-2%,黒褐色土)
5. 10YR 2/2 黒褐色土
6. 10YR 2/2 黒褐色土(含,Nbp-7%)

VB－3ピット

S=$\frac{1}{40}$

第8図 ピット (IVB－11、IVB－10、VB－1、VB－3)

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－9ピット	尾根の頂部	Ⅳ層上位	円形	フラスコ状	第9図	6
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
160× 155	120	135	80	なし		

埋土　中～上位は中礫浮石の再堆積土が大部分を占め、下位には黒色土が堆積する。自然堆積と思われる。

備考　　時期：縄文中期以降

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅥC－3ピット	平坦地	Ⅲ層上位	円形	フラスコ状	第9図	6
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
105	60	108	120	なし		

埋土　南部浮石粒を含む黒色土が大半を占める。粉炭が少量含まれる。

備考　開口部は若干崩壊しているが頸部以下は原形をとどめている。　　時期：縄文中期以降

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－1ピット	尾根の頂部	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第9図	6
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
130× 120		120× 100	40	なし		

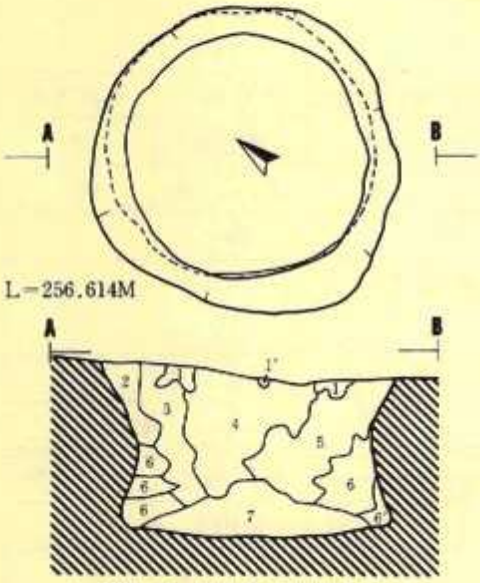
埋土　上位は南部浮石粒が、下位には南部浮石と南部浮石起源の粉状パミスが混入する。

備考　　時期：縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－2ピット	尾根の頂部	Ⅴ層下位	円形	Ⅲ状	第9図	6
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
163		145	55	なし		

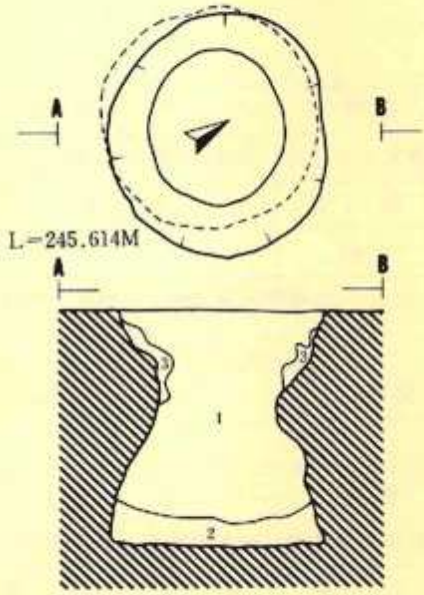
埋土　南部浮石粒を含む、黒～黒褐色土である。中礫浮石は含まれない。

備考　　時期：縄文前期



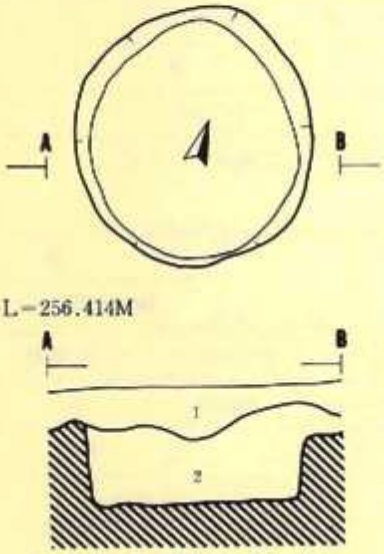
1．10YR 4/6 褐色土(含、暗褐色土、Chp)
2．10YR 4/4 褐色土(含、Nbp-1%)
3．10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-2%、Chp)
4．10YR 3/4 暗褐～褐色土(含、Nbp-3%、Chp)
5．10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-2%、Chp)
6．7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層、含、暗褐色土)
7．10YR 2/1 黒色土(含、Nbp、炭化物-少)

IVB－9ピット



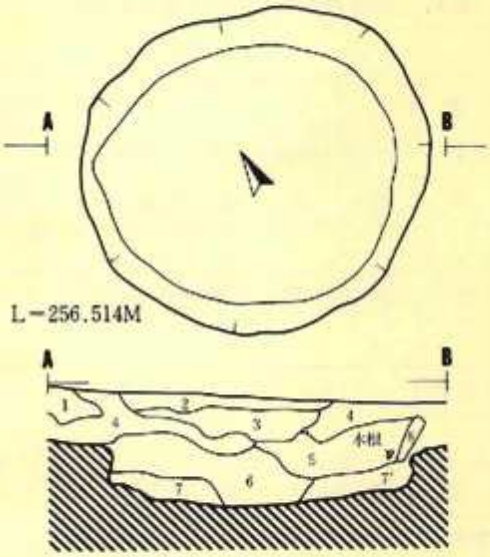
1．10YR 1.7/1 黒色土(含、Nbp-3%、黒褐色土、炭)
2．10YR 2/1 黒褐色土
3．10YR 2/2 黒褐色土

VIC－3ピット



1．10YR 3/2 黒褐色土(含、Nbp-3%)
2．10YR 3/4 暗～黒褐色土(含、Nbp-7%)

IVB－1ピット



1．10YR 2/1 黒色土
2．10YR 3/2 黒褐色土(含、Nbp-3%)
3．10YR 4/6 暗褐色土(含、Nbp-7%)
4．10YR 3/3～2/2 黒褐色土(含、Nbp-3%、Chp)
5．10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-7%)
6．10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-10%)
7．10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-3%)
7'．10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-2%)
8．10YR 4/4 褐色土(含、Nbp-少)

IVB－2ピット

S－$\frac{1}{40}$

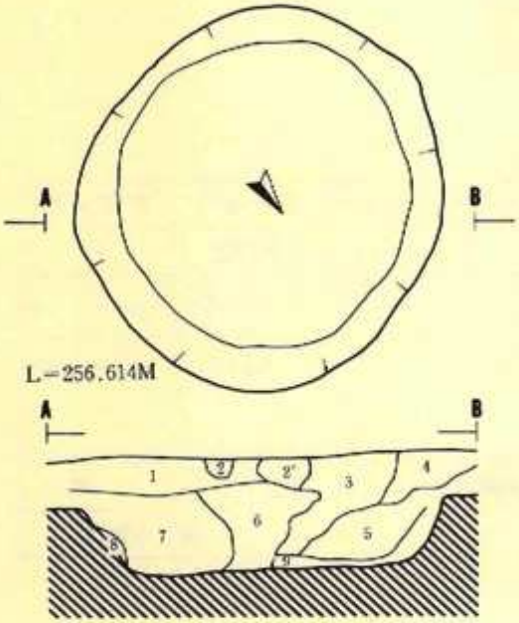
第9図 ピット（IVB－9、IVC－3、IVB－1、IVB－2）

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－3ピット	尾根の頂部	Ⅵ層上位	円形	皿状	第10図	7
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
183		153	40	なし		
埋土	中央部の黒褐色土と周囲の暗褐色土の2層に大別される。					
備考					時期	
					縄文前期	

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－4ピット	尾根の頂部	Ⅵ層上位	楕円形	ピーカー状	第10図	7
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
170× 160		120× 100	68	なし		
埋土	中央部の黒褐色土と周囲の暗褐色土の2層に大別される。					
備考	壁際の底部に副穴1基を有する。				時期	
					縄文前期	

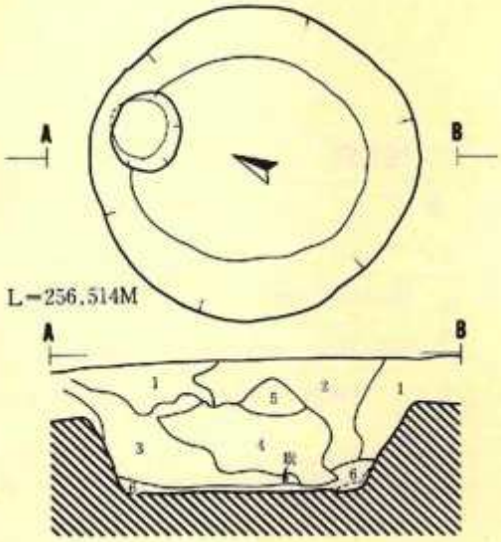
遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－7ピット	尾根の頂部	Ⅵ層上位	不整円形	ピーカー状	第10図	7
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
110		70	30	なし		
埋土	南部浮石粒や暗褐色土の混入率によって細分されるが、大別すれば単層といえる。					
備考					時期	
					縄文前期	

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅣB－8ピット	尾根の頂部	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第10図	7
開口部	頸部	底部	深さ	出土遺物		
150× 145		125× 115	50	なし		
埋土	中央部の下位に南部浮石が多量に堆積する。					
備考	底部は隅丸方形状に角ばる。				時期	
					縄文前期	



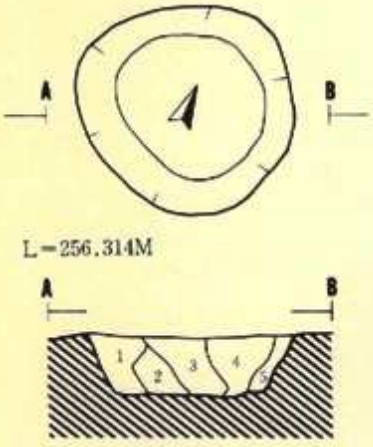
1．10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-3%)
2．10YR 3/4 暗褐色土(Nbpと輝石の混土)
2.' 10YR 3/4 暗褐色土(Nbp、輝石、黒褐色土の混土)
3．10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-7%)
4．10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-1%)
5．10YR 3/2 黒褐色土(含、Nbp-3%)
6．10YR 1.7/1 黒色土(含、Nbp-10%)
7．10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-5%)
8．7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)
9．10YR 4/4 褐色土(含、Nbp 2%)

IVB－3ピット



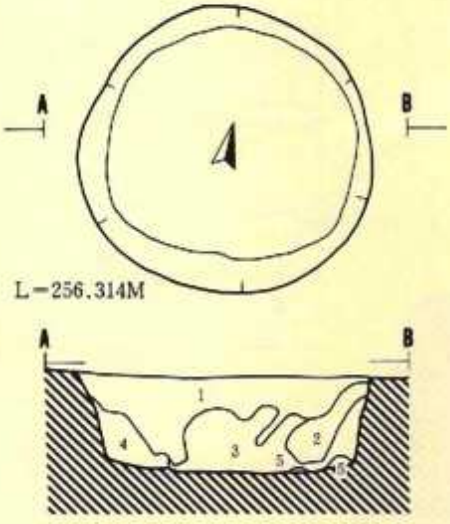
1．10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-3%、Chp)
2．10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-3%)
3．10YR 2/2～2/1 黒褐～黒色土(含、Nbp-5%)
4．10YR 1.7/1 黒色土(含、Nbp-10%)
5．10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-3%)
6．7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層、含、黒褐色土)

IVB－4ピット



1．10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-1%)
2．10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-3%)
3．10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-5%)
4．10YR 3/2 黒褐色土(含、Nbp-2%)
5．10YR 6/8 明黄褐色土(Nb層、粘土)

IVB－7ピット



1．10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-7%)
2．10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-10%)
3．10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-15%)
4．7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)
5．10YR 4/6 褐色土(八戸火山灰)

IVB－8ピット

S＝$\frac{1}{40}$

第10図　ピット（IVB－3、IVB－4、IVB－7、IVB－8）

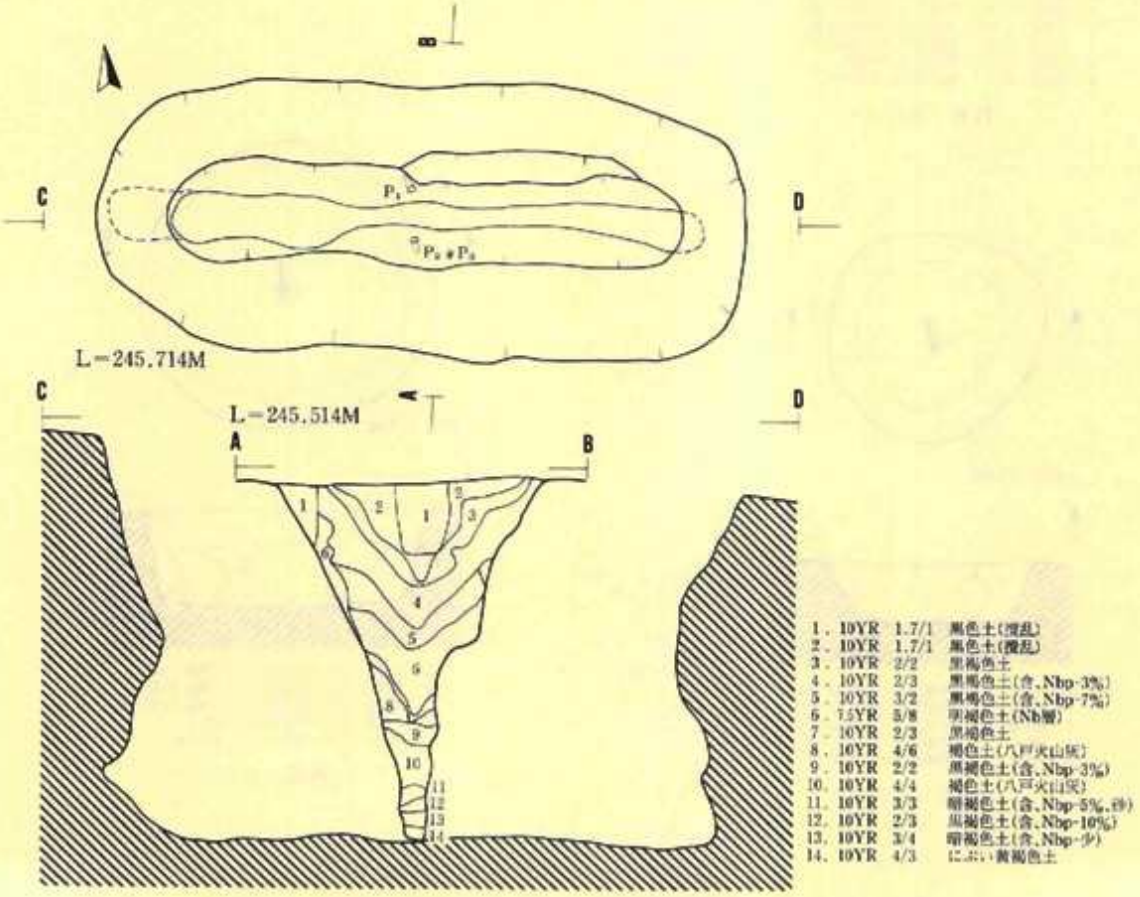
2．陥し穴

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC−2陥し穴	平坦地	III層上位	溝	ロート状	第11図	8

規模 開口部	規模 底部	規模 深さ	杭跡	No	P_1	P_2	P_3
335×133	305×15	183	直径	6	5	5	
			深さ	7	10	8	

埋土	黒褐色土と暗褐色土の互層である。
備考	長軸の両端部はオーバーハングする。杭跡は頸部にみられるが、底部にはみられない。

時期
縄文中期以降



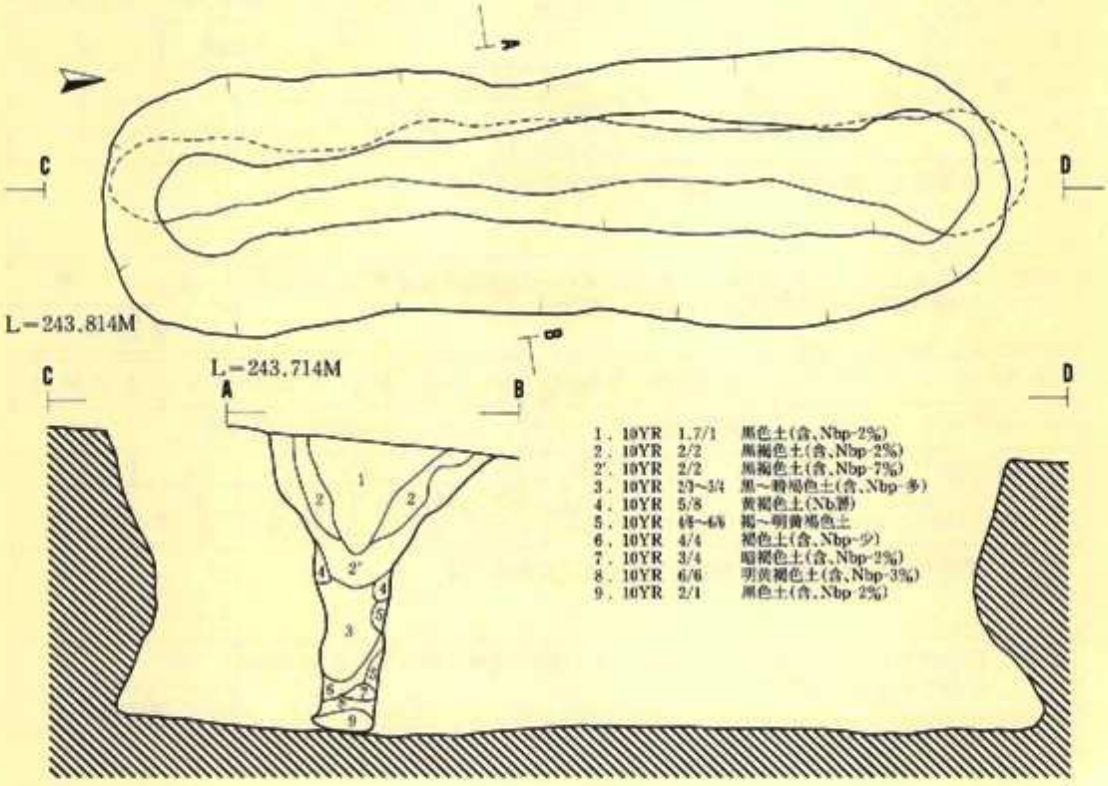
第11図　陥し穴（VIC−2）

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦB−1陥し穴	平坦地	Ⅲ層上位	溝	ロート状	第12図	8

規模	開口部	底部	深さ	杭跡							
					No.						
					直径						
	465×130	475×37	150		深さ						

埋土	黒褐色土、暗褐色土及び南部浮石の互層である。
備考	長軸の両端部はオーバーハングし、底部がやや広くなる。杭跡はない。

時期
縄文中期以降



第12図　陥し穴(ⅦB−1)

S=1/40

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIB−2陥し穴	尾根の裾部	VI層上位	円形	ピーカー状	第13図	9

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No	P1						
				直径	6						
115	68	110		深さ	10.6						

埋土　南部浮石を含む黒色土と褐色土との互層である。

備考

時期：縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIB−3陥し穴	平坦地	VI層上位	円形	ピーカー状	第13図	9

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No							
				直径							
150	50	165		深さ							

埋土　黒褐色土と暗褐色土の互層である。下位は褐色土がほぼ水平に堆積する。

備考　底部は隅丸方形状にふくらむ。湧水。

時期：縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
IVC−5陥し穴	平坦地	VI層上位	円形	ピーカー状	第13図	9

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No	P1	P2					
				直径	25	20					
180	45	126		深さ	14	65					

埋土　黒褐色土、暗褐色土及び褐色土の3層に大別される。

備考　IVC−4ピットに一部を切られる。壁の一部は柱状に崩壊し、その反対側の壁の一部と底部がやや凹む。湧水。

時期：縄文前期

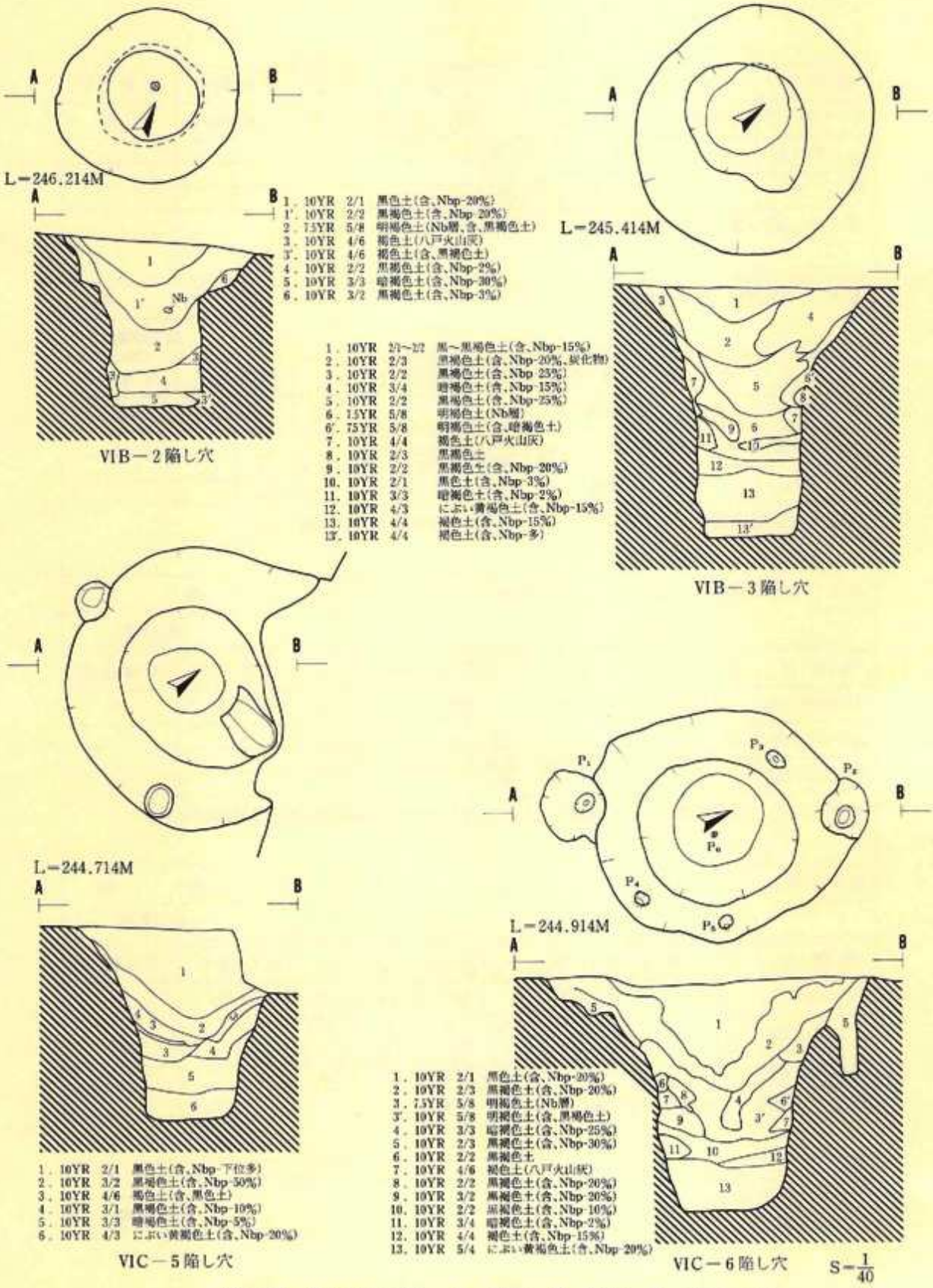
遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC−6陥し穴	平坦地	VI層上位	円形	ピーカー状	第13図	9

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No	P1	P2	P3	P4	P5	P6	
				直径	13	13	9	9	10	5	
170×150	60×55	153		深さ	47	67	40	24	20	11	

埋土　黒褐色土、暗褐色土及び褐色土の3層に大別される。

備考　開口部付近の2ヶ所に太い杭跡が、やや細い杭跡は開口部と頸部の間に見られるが、底部にはない。

時期：縄文前期



第13図　陥し穴（VIB－2、VIB－3、VIC－5、VIC－6）

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC−7陥し穴	平坦地	VI層上位	円形	ピーカー状	第14図	10

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No.							
165	50	162		直径							
				深さ							

埋土　上位は黒〜黒褐色がU字状に下位は褐色土がほぼ水平に堆積する。

備考　下部の壁は隅丸方形状にふくらむ。

時期：縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC−8陥し穴	平坦地	VI層上位	円形	ピーカー状	第14図	10

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No.	P1	P2	P3	P4			
175	60	184		直径	8×5	8×5	16×20	14			
				深さ	8	11	27	30			

埋土　上位は黒褐色土が、U字状に、下位は褐色土がほぼ水平に堆積する。

備考　底部の杭跡はほぼ中央である。刺し替えかどうかは不明である。

時期：縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC−9陥し穴	平坦地	V層下位	円形	ピーカー状	第14図	10

規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No.							
185×165	90	130		直径							
				深さ							

埋土　中位には南部浮石が厚く堆積するが、上位から中央部を柱状に黒色土が垂下する。

備考　湧水。

時期：縄文前期

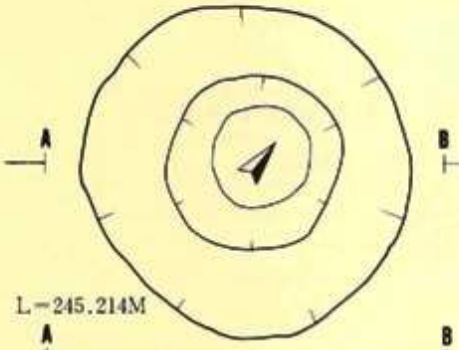
遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
VIC−10陥し穴	平坦地	VI層上位	円形	ピーカー状	第14図	10

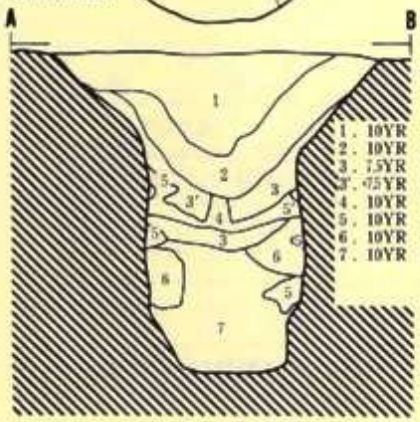
規模 開口部	底部	深さ	杭跡	No.	P1	P2	P3				
210×170	85×75	120		直径	15×20	13	9×7				
				深さ	42	23	26				

埋土　黒褐色土、南部浮石及び褐色土の3層に大別される。

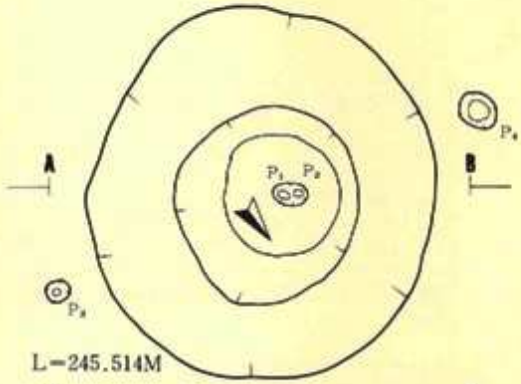
備考　一部は調査区外へのびる。開口部付近の2ヶ所と底部の1ヶ所に杭跡がみられる。

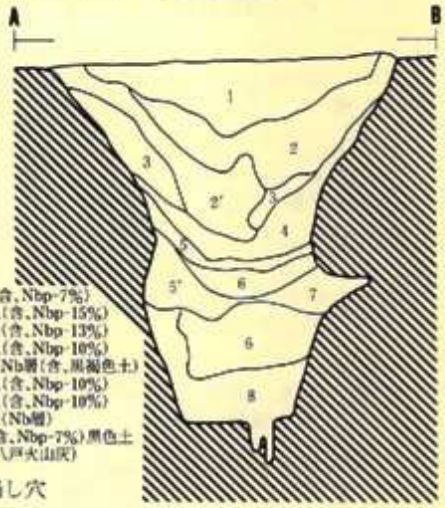
時期：縄文前期



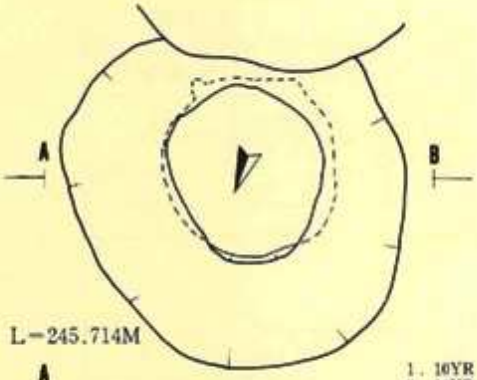


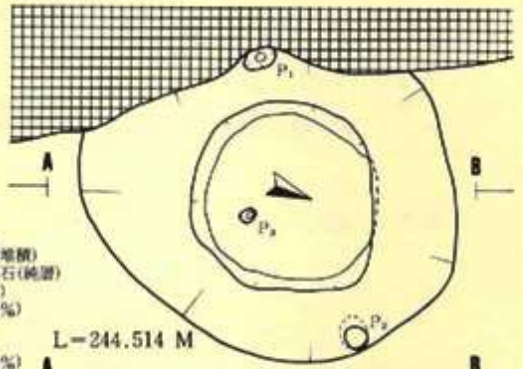
VIC－7陥し穴

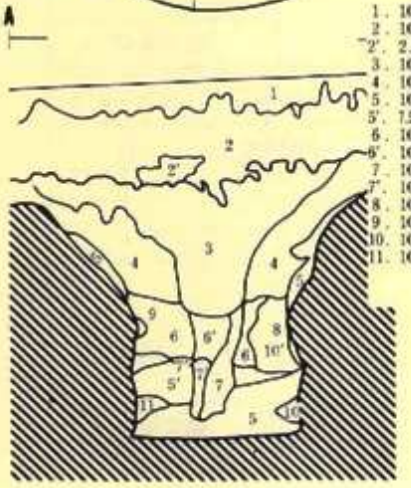




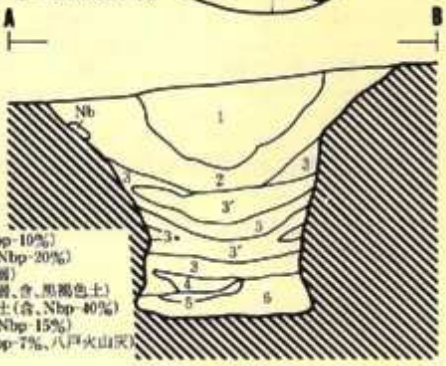
VIC－8陥し穴







VIC－10陥し穴



VIC－10陥し穴

S=1/40

第14図　陥し穴（VIC－7、VIC－8、VIC－9、VIC－10）

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅥC−11陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	隅丸方形	ピーカー状	第15図	11

規模 開口部	規模 底部	規模 深さ	杭跡	No	P1	P2	P3
180×155	75	120		直径	10	8	10×8
				深さ	35	13	8

埋土　中〜下位の埋土は中央部が柱状に黒ずむ。

備考　P2の底部は陥し穴の底部の中心方向へ斜行する。

時期　縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦB−2陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	楕円形	ピーカー状	第15図	11

規模 開口部	規模 底部	規模 深さ	杭跡	No			
185×140	53×43	155		直径			
				深さ			

埋土　黒色土、南部浮石及び褐色土の3層に大別される。上位の埋土はU字状に堆積し、下位は水平化する。

備考　壁及び底の一部が崩壊している。底部は台形状に角ばる。開口部は大きく崩壊している。

時期　縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦB−3陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第15図	11

規模 開口部	規模 底部	規模 深さ	杭跡	No	P1	P2
180×170	53×48	125		直径	12	13
				深さ	25	20

埋土　最下層の埋土をのぞき埋土の中央部が柱状に黒ずむ。

備考　湧水。

時期　縄文前期

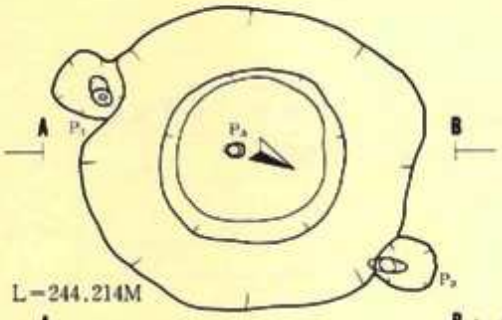
遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦB−4陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第15図	11

規模 開口部	規模 底部	規模 深さ	杭跡	No			
150	60×50	124		直径			
				深さ			

埋土　黒色土、南部浮石及び褐色土の3層に大別される。

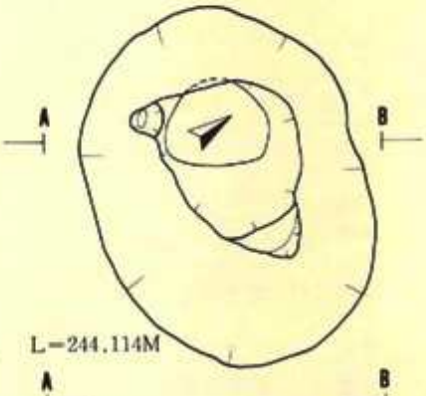
備考　湧水。

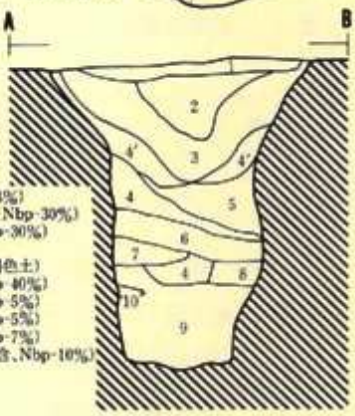
時期　縄文前期



1. 10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-20%)
1'. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-5%)
1". 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-50%)
2. 10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-3%)
2'. 10YR 1.7/1黒色土(含、Nbp-4%)
3. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層、混土)
4. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-50%)
5. 10YR 4/4 褐色土(八戸火山灰)
6. 10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-5%)
7. 10YR 6/6 明黄褐色土(含、Nbp-40%)

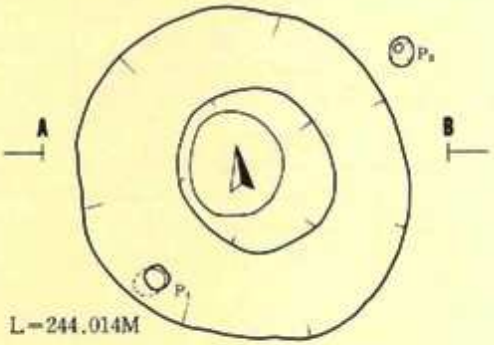
VIC－11陥し穴

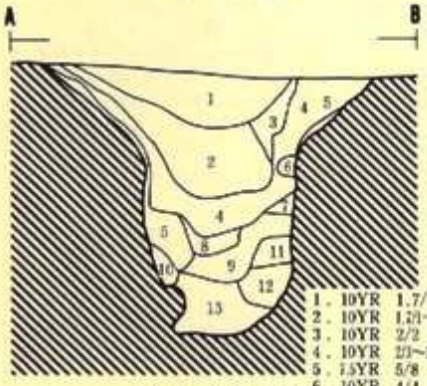




1. 10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-3%)
2. 10YR 2/1～2/2 黒～黒褐色土(含、Nbp-30%)
3. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-30%)
4. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)
4'. 7.5YR 5/8 明褐色土(含、黒褐色土)
5. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-40%)
6. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-5%)
7. 10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-5%)
8. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-7%)
9. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土(含、Nbp-10%)
10. 7.5YR 4/4 褐色土

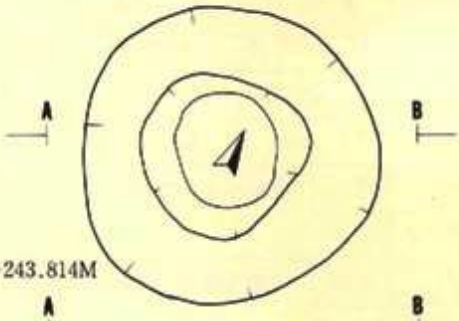
VIIB－2陥し穴

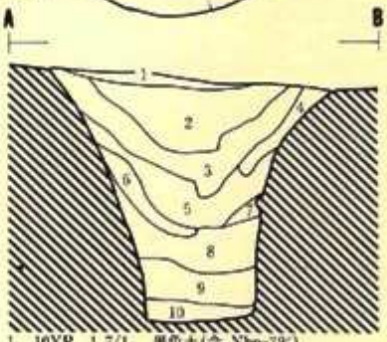




1. 10YR 1.7/1 黒色土(含、Nbp-20%)
2. 10YR 1.7/1～2/2 黒色土(含、Nbp-40%)
3. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-30%)
4. 10YR 2/1～2/2 黒褐色土(含、Nbp-30%)
5. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層、含、黒褐色土)
6. 10YR 4/4 褐色土(含、Nbp-1%)
7. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-1%)
8. 10YR 2/1 黒色土(含、Nbp-20%)
9. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-15%)
10. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-15%)
11. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-30%)
12. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-5%)
13. 10YR 4/4 褐色土(含、Nbp-40%)

VIIB－3陥し穴





1. 10YR 1.7/1 黒色土(含、Nbp-7%)
2. 10YR 1.7/1～2/2 黒～黒褐色土(含、Nbp-40%)
3. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-40%、黒褐色土)
4. 10YR 2/2 黒褐色土(含、Nbp-30%)
5. 10YR 2/2～2/3 黒褐色土(含、Nbp-15%)
6. 7.5YR 5/8 明褐色土(Nb層)
7. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-3%)
8. 10YR 2/3 黒褐色土(含、Nbp-40%)
9. 10YR 3/4 暗褐色土(含、Nbp-10%)
10. 10YR 3/3 暗褐色土(含、Nbp-10%)

VIIB－4陥し穴

第15図　陥し穴（VIC－11、VIIB－2、VIIB－3、VIIB－4）　S＝$\frac{1}{40}$

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦC−2陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第16図	12

規模 開口部	底部	深さ	杭跡								
190×175	56×50	135		No							
				直径							
				深さ							

埋土　埋土中位（4層）は中央部が柱状に黒ずむ。

備考　底部は隅丸方形状に角ばる。湧水。

時期　縄文前期

遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦC−1陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第16図	12

規模 開口部	底部	深さ	杭跡								
200×180	100×90	130		No							
				直径							
				深さ							

埋土　埋土最上位（5層）の上に中撮浮石の純層がのる。

備考　下部は隅丸方形状にふくらむ。湧水。

時期　縄文前期

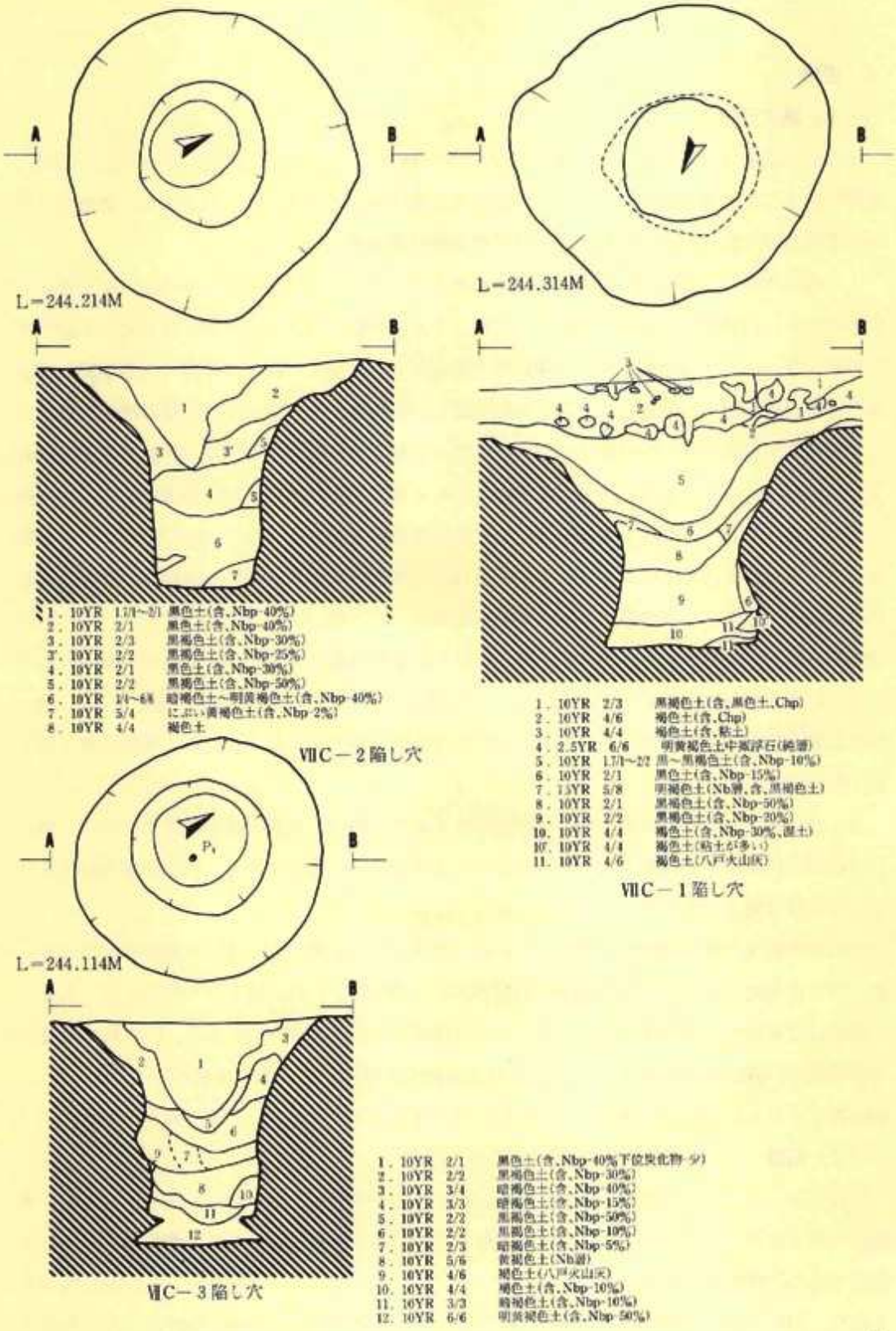
遺構名	位置	検出面	形状 平面形	形状 断面形	図版番号	写真図版
ⅦC−3陥し穴	平坦地	Ⅵ層上位	円形	ピーカー状	第16図	12

規模 開口部	底部	深さ	杭跡								
150	60×52	140		No	P_1						
				直径	1						
				深さ	5						

埋土　黒褐色土、暗褐色土、南部浮石及び褐色土の互層である。

備考　底部より40〜20cmほど上の壁はやや広がる。湧水。

時期　縄文前期



S－$\frac{1}{40}$

第16図　陥し穴（VIIC－2、VIIC－1、VIIC－3）

3．遺物

（1）縄文土器

出土した総量はコンテナ1箱である。その大半はⅣB－6ピット内から出土したものである。遺物が出土した遺構はⅣB－6ピットのみで他は遺構外から出土したものである。遺構外遺物の出土地点は十数点を除きⅣB区とVB区の尾根に集中する。

1～25はⅣB－6ピットの埋土から出土したものである。1は体下半がややすぼまる深鉢形土器である。口縁部は小波状口縁でB状突起が1カ所に貼付される。体部にはLRの単節斜縄文が施文される。2は頸部を有する深鉢形土器である。小波状口縁で口縁部から頸部間には6条の平行沈線が回る。体部にはLRの単節斜縄文が施文される。3～7の口縁部は連結C字文と羊歯状文が施文される同一個体である。体部はLRの単節斜縄文である。8はB状突起を有する口縁部片である。9～12は三叉文が施文される磨消縄文である。同一個体である。13は折り返し口縁状であり口縁部上端は帯状にLRの単節斜縄文が施文され、その下方はミガキが施されている。14は注口土器の注口部である。15は口縁部はV字状の刻みがはいる。縄文はLRの単節斜縄文である。16は縄文のみ（LR）である。17は壺、18も壺と思われる。ともにLRの単節斜縄文が施文される。19は節の細かいRLの単節斜縄文が施文される鉢形土器の体部片と思われる。20は鉢形土器の体部下半、21～23は体部上半で地文はLR単節斜縄文である。24、25はLRにRを加えた付加条文である。24と25は時期不明であるが、他は縄文晩期前葉に属すると思われる。

26～28はRLの単節斜縄文で胎土に繊維が含まれる。29はLRLの複節斜縄文である。30、31は結束羽状縄文と多軸絡条体回転圧痕文が施文される同一個体である。胎土に繊維が含まれる。26～31は縄文前期に属すると思われる。

32は磨消縄文でRLの原体を使用している。器壁の磨耗が激しい。注口土器の体部である。33、34は沈線文が施文されるが詳細は不明である。35は肩部が最大径となる針形土器である。口縁部には羊歯状文が施文される。36～38は口縁端部の形状に違いがあるが，いずれもLRの単節斜縄文が施文されている。39はRLの単節斜縄文を使用しているが回転方向は一定しない。40は無文、41と42はLの無節斜縄文である。43は底部を欠く、LRの単節斜縄文である。

（2）石器

51はVC－2ピットの埋土から出土した石匙である。両面加工によって刃部を形成する。先端の一部に僅かな欠損が見られるがほぼ完形である。52はⅣB－6ピットの埋土から出土した磨石である。稜線部を磨面として使用している。磨面の両端には不鮮明ではあるが敲打痕がみられる。53は一部を欠損するため器種は特定できない。縁辺に細かな押圧剥離によって刃部を形成する。54、55は一部に剥離痕がみられる。56は播器で完形品である。57は砥石又は磨石で

ある。58～60は52と同様に稜線部を使用面とする磨石である。58は1稜線部、59～60は2稜線部を使用している。61の磨石と65、66の石皿はA区から一括出土したものである。同区には遺構は検出されず、遺物も2点の縄文土器片のみで自然礫もないことから、この3点は一括廃棄された可能性がある。出土層位はⅣ層である。65は両面とも中央部が若干凹むほど使用されている。66は両面とも磨耗し光沢を放つが凹んではいない。62は小片のため器種は不明であるが研磨されている。63と64は台石状の扁平な石の破片である。特に64は一面が磨耗し、敲打痕も見られる。以上の石器は石材の観点から見ると、大部分が北上山地で産出するものであり、本遺跡の周辺から容易に得られるものである。

（3）その他

南部浮石層の直下から若干の炭化物が出土した。その中にクルミの実が何点か含まれている。

第1表　石器一覧表

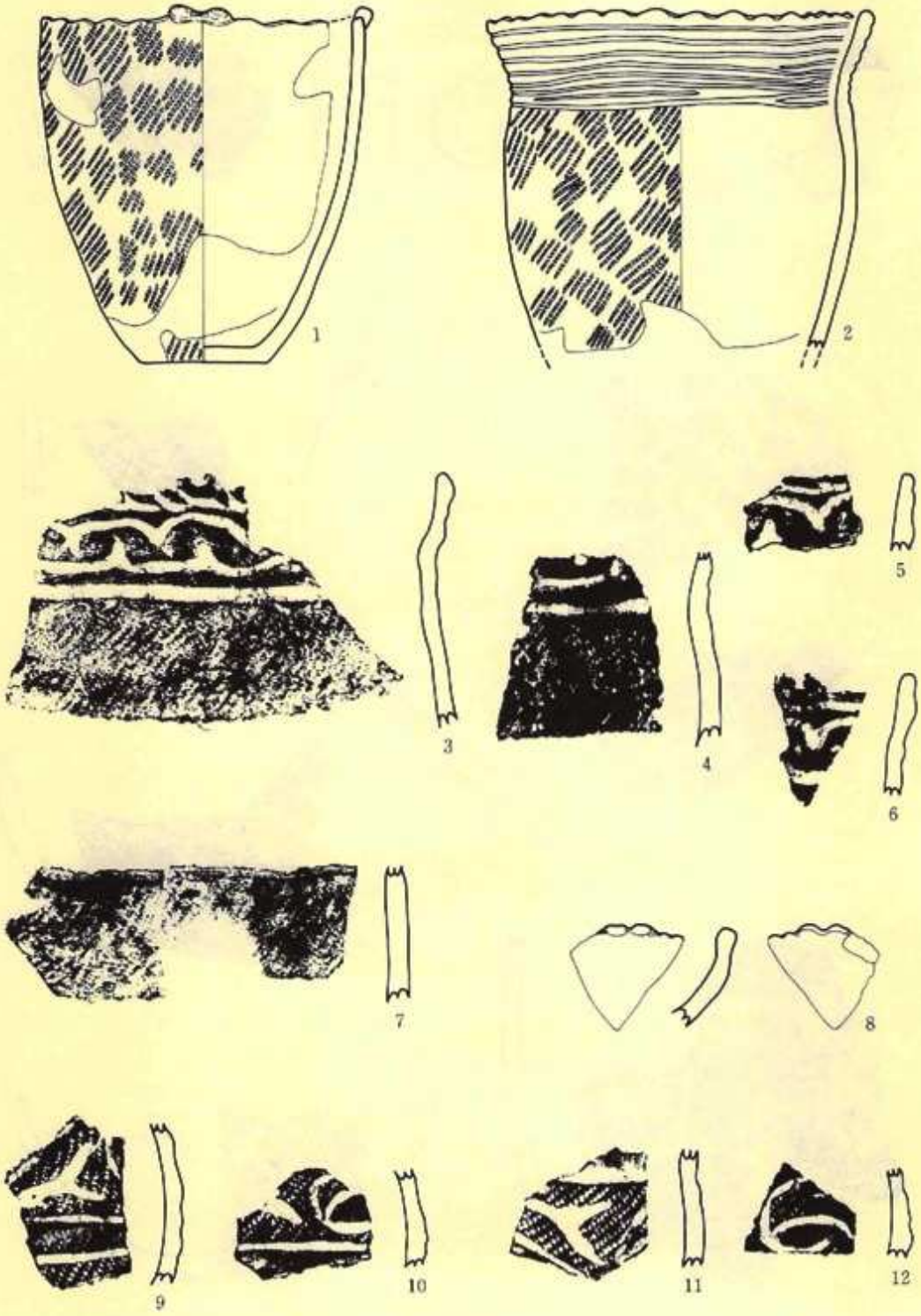
遺物番号	器種	出土地点	法量				備考	石質	産地等	図版番号	写真図版
			長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g					
51	石鏃	VC－2P	6.2	2.8	1.0	13.5	縦型、完形品	チャート質、粘板岩	北上山地、古生界	第22図	17
52	磨石	IVB－6P	11.1	6.5	7.2	575	完形品	輝石、珪岩	北上山地、古生界	第22図	17
53	不明	IVB粗				0.6		粘板岩	北上山地、古生界	第22図	17
54	リタッチド・フレイク	VIC粗				2.6		チャート質、粘板岩	北上山地、古生界	第22図	17
55	リタッチド・フレイク	VIA粗	4.4	3.1	0.7	13.0		凝灰質硬質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	第22図	17
56	掻器	VC粗	5.8	3.4	1.1	29.5		珪質泥岩	雫石西部、新第三系、中新統	第22図	17
57	磨石	IVB粗	8.5	3.9	2.5	162		硬砂岩	北上山地、古生界	第22図	17
58	磨石	IVB粗	7.7	7.5	4.7	312		硬砂岩	北上山地、古生界	第23図	17
59	磨石	IVB粗	10.3	6.9	5.1	470		角閃黒雲母花崗岩	北上山地、中生界	第23図	17
60	磨石	IVB粗	16.4	7.1	6.0	725		硬砂岩	北上山地、古生界	第23図	17
61	磨石	IIB粗	10.2	9.1	5.2	700		輝石安山岩	男鹿山地、新第三系、中新統	第24図	17
62	磨石	IVB粗				18.1		硬砂岩	北上山地、古生界	第24図	17
63	台石	IVB粗				88		硬砂岩	北上山地、古生界	第24図	18
64	台石	IVB粗				300		硬砂岩	北上山地、古生界	第24図	18
65	石皿	IIB粗	25.4	21.4	5.8	—	完形品	硬砂岩	北上山地、古生界	第24図	18
66	石皿	IIB粗	31.7	28.4	4.6	—		硬砂岩	北上山地、古生界	第25図	18

※計測値は最大値である。　—は未計測である。

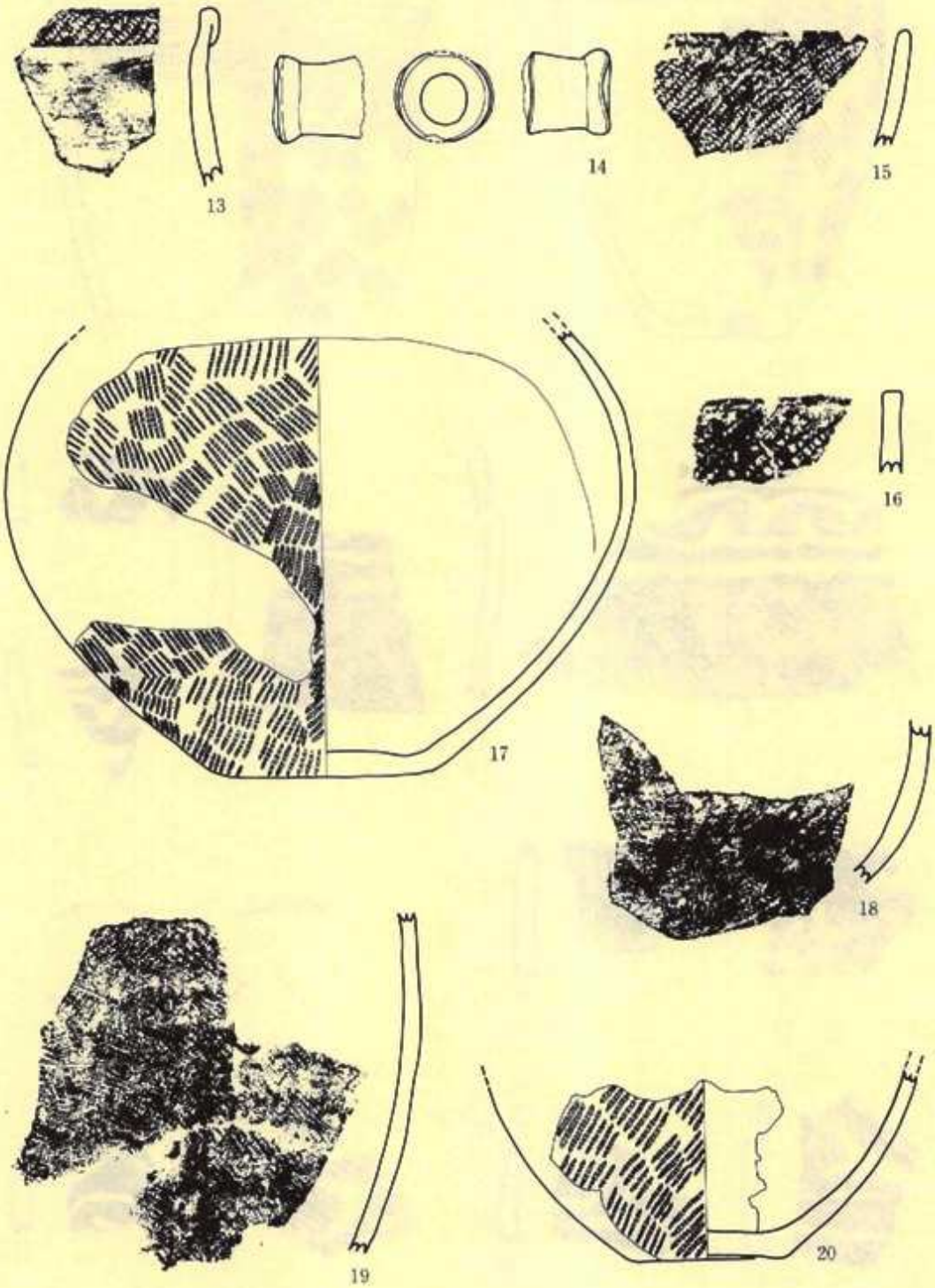
第2表　土器観察表

遺物番号	器種	出土地点	層位	法量(cm) 口径	底径	高さ	胎土	色調	器形・文様・調文	備考	時期	図版番号	写真図版
1	深鉢	IVB　6P	埋土下位	(13.5)	5.3	14.8		明褐色	小波状口縁・B状突起・LR		晩　期	第16図	13
2	〃	〃	〃	(16.0)	—	(14.2)		褐色	小波状口縁・平行沈線　〃 半截状文	底部及び体下半部欠損・内外に残滓	〃	〃	〃
3	鉢	〃	〃					黒褐色	連結C字文　〃		〃	〃	〃
4	〃	〃	埋　土					〃	連結C字文　〃	口縁部のみ　同一個体	〃	〃	〃
5	〃	〃	埋土上位					〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	〃	〃	埋　土					〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃					〃	沈線文・LR		〃	〃	〃
8	〃(?)	〃	〃					表　明赤褐色 裏　暗赤褐色	口縁部に刻み・B状突起	口縁部のみ	〃	〃	〃
9	〃	〃	埋土下位					黒褐色	磨消縄文・LR		〃	〃	〃
10	〃	〃	〃					〃	〃　〃	同一個体	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃					〃	〃　〃		〃	〃	〃
12	〃	〃	〃					〃	〃　〃		〃	〃	〃
13	〃	〃	埋　土					〃	口縁部一帯土　〃　〃 羽状付		後～晩期	第17図	〃
14	注口土器	〃	〃	2.5				暗赤灰色	無文	注口部のみ	〃	〃	〃
15	鉢	〃	〃					にぶい橙色	口縁部に刻み　・LR	口縁部のみ	〃	〃	〃
16	〃	〃	〃				含、粗砂	橙色	〃	〃	〃	〃	14
17	壺	〃	〃		(8.3)	(18.2)		明褐色	〃	平底・体部上半欠損	〃	〃	〃
18	〃(?)	〃	〃					灰白色	〃	体部のみ	〃	〃	〃
19	鉢(?)	〃	〃					赤褐色	RL	〃	〃	〃	〃
20	〃	〃	〃		6.5	(7.5)		褐灰色	LR	平底・底部及び体下半部のみ	〃	〃	〃
21	深鉢	〃	〃	(21.2)	—	(20.5)		表　明褐色 裏　黄灰色	〃	体下半部欠損・体上半に残滓と煤	〃	第18図	〃
22	〃	〃	埋土下位					にぶい橙色	〃	〃	〃	〃	〃
23	鉢	〃	〃					灰褐色	平縁・〃	口縁部のみ	〃	〃	15
24	深鉢	〃	埋　土	(28.0)		(21.1)		褐色	付加条 LR↑R	口縁部外面に残滓	〃	第19図	〃
25	〃	〃	〃					淡橙色	〃	24と同一か(?)	〃	〃	〃
26	深鉢	IVB 4 8	IV　層				含、繊維	褐色	平縁　RL		前　期	第20図	16
27	鉢	〃	〃				〃	〃	〃　〃		〃	〃	〃
28	〃	〃	〃				〃	〃	〃		〃	〃	〃
29	〃	IVB 8 h	〃				〃	赤褐色	撚糸LRL		〃	〃	〃
30	〃	IVB	III　層				〃	〃	平縁　羽状縄文(LR)		〃	〃	〃
31	〃	〃	〃				〃	〃	多軸絡条体 多軸絡条体	同一個体	〃	〃	〃
32	注口土器	〃	I　層				含、長石	褐灰色	磨消縄文　RL		後　期	〃	〃
33	鉢	IVB 3 h	IV層上位					灰白色	沈線文　LR			〃	〃
34	〃	IVB	I　層					〃	〃　〃			〃	〃
35	〃	IVB 1 f	II　層	(20.0)	6.8	13.8		淡橙色	半截状文　〃		晩　期	第21図	〃
36	〃	IVB 5 h	IV　層					灰褐色	小波状口縁　〃			〃	〃
37	〃	IIB	I　層				含、粗砂	黒褐色	〃			〃	〃
38	〃	VIC	〃					灰黄褐色	平縁　〃	煤付着		〃	〃
39	〃	IIB	〃				含、粗砂	赤褐色	RL			〃	〃
40	〃	IVB	〃				〃	黒褐色				〃	17
41	〃	〃	〃				含、砂	浅黄橙色	平縁　無節L			〃	〃
42	〃	〃	II　層				〃	〃	〃			〃	〃
43	〃	〃	〃		(11.2)	(6.0)	〃	灰白色	LR			〃	〃

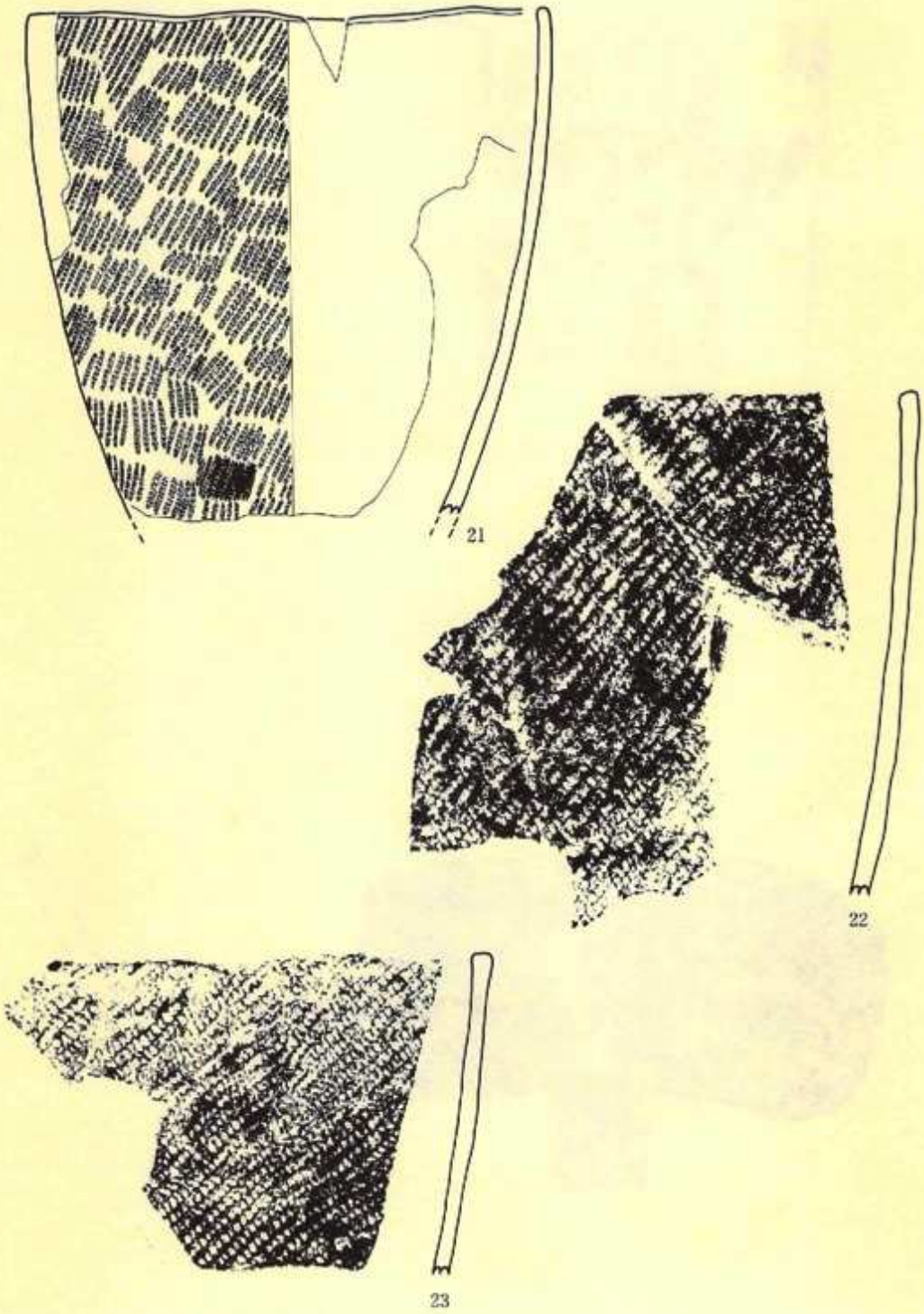
※（　）は推定値、〔　〕は残存値である。



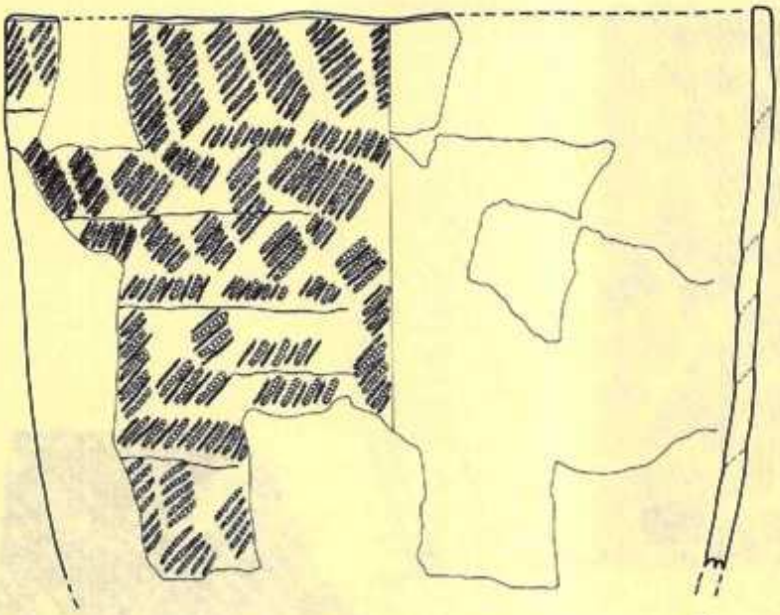
第17図　ⅣB－6ピット内出土遺物(1)



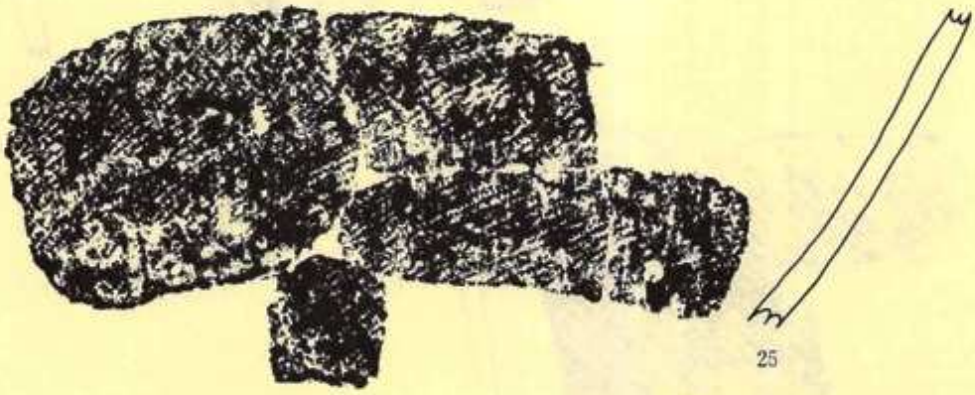
第18図　ⅣB－6ピット内出土遺物(2)



第19図　MB－6ピット内出土遺物(3)

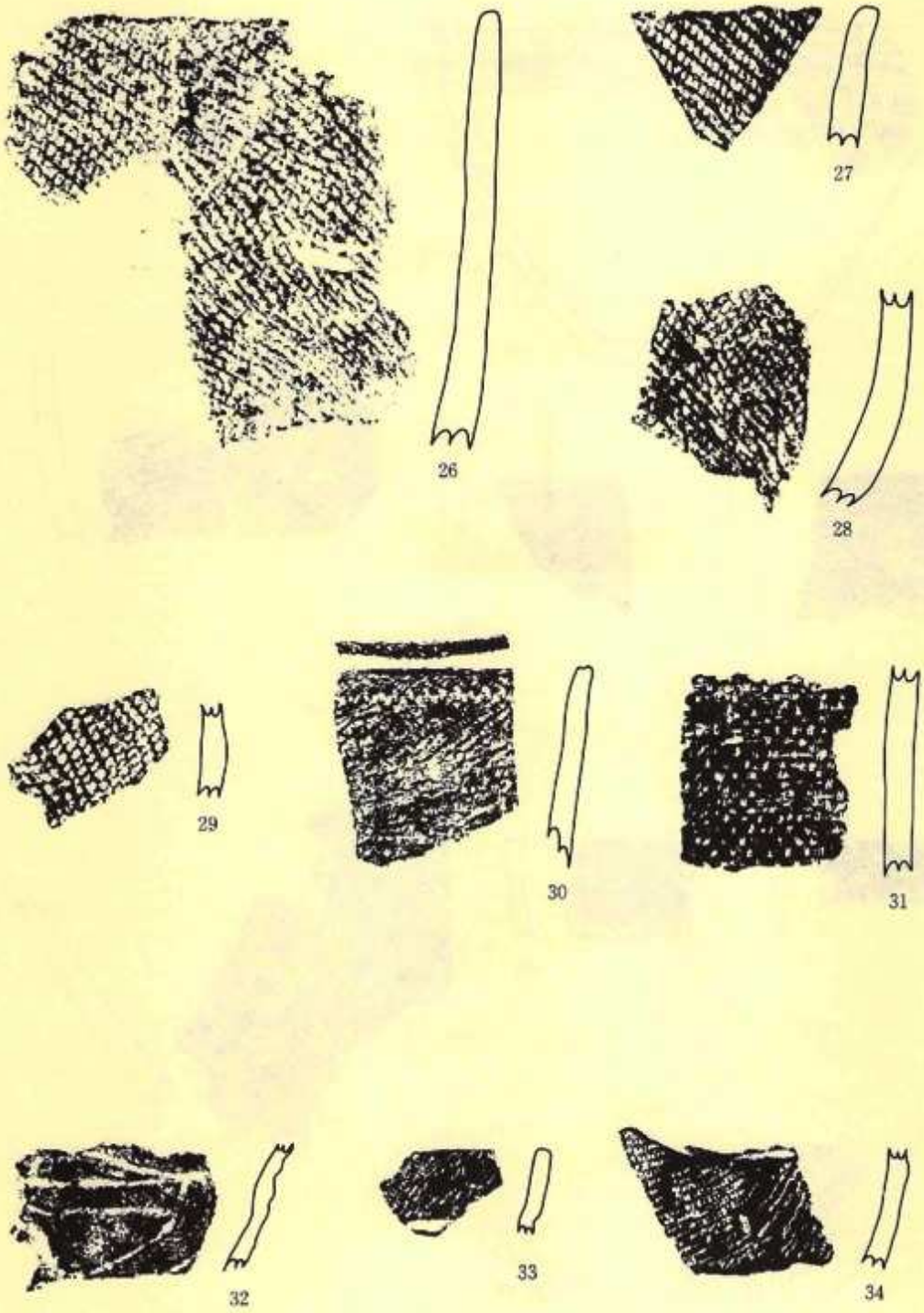


24

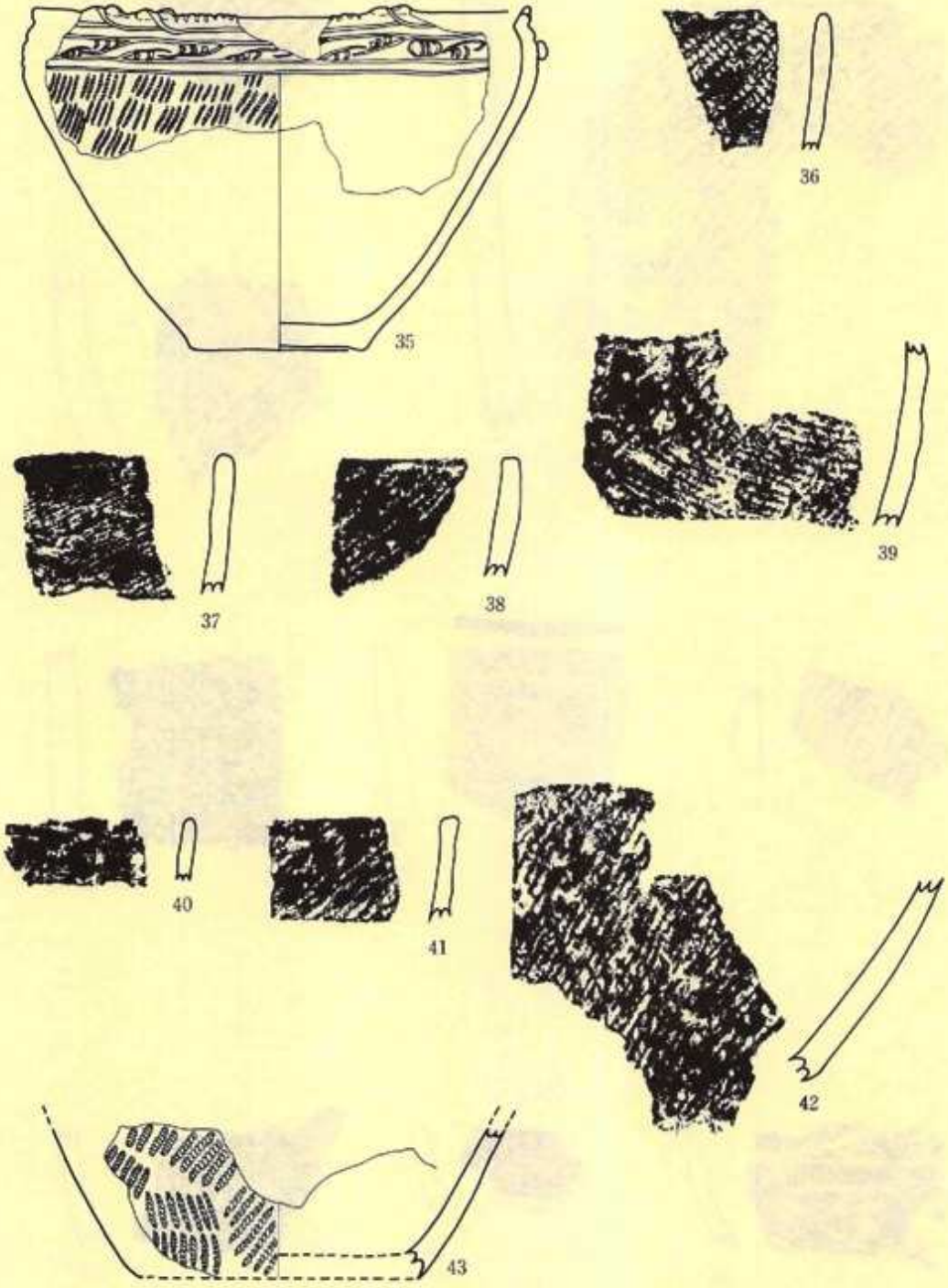


25

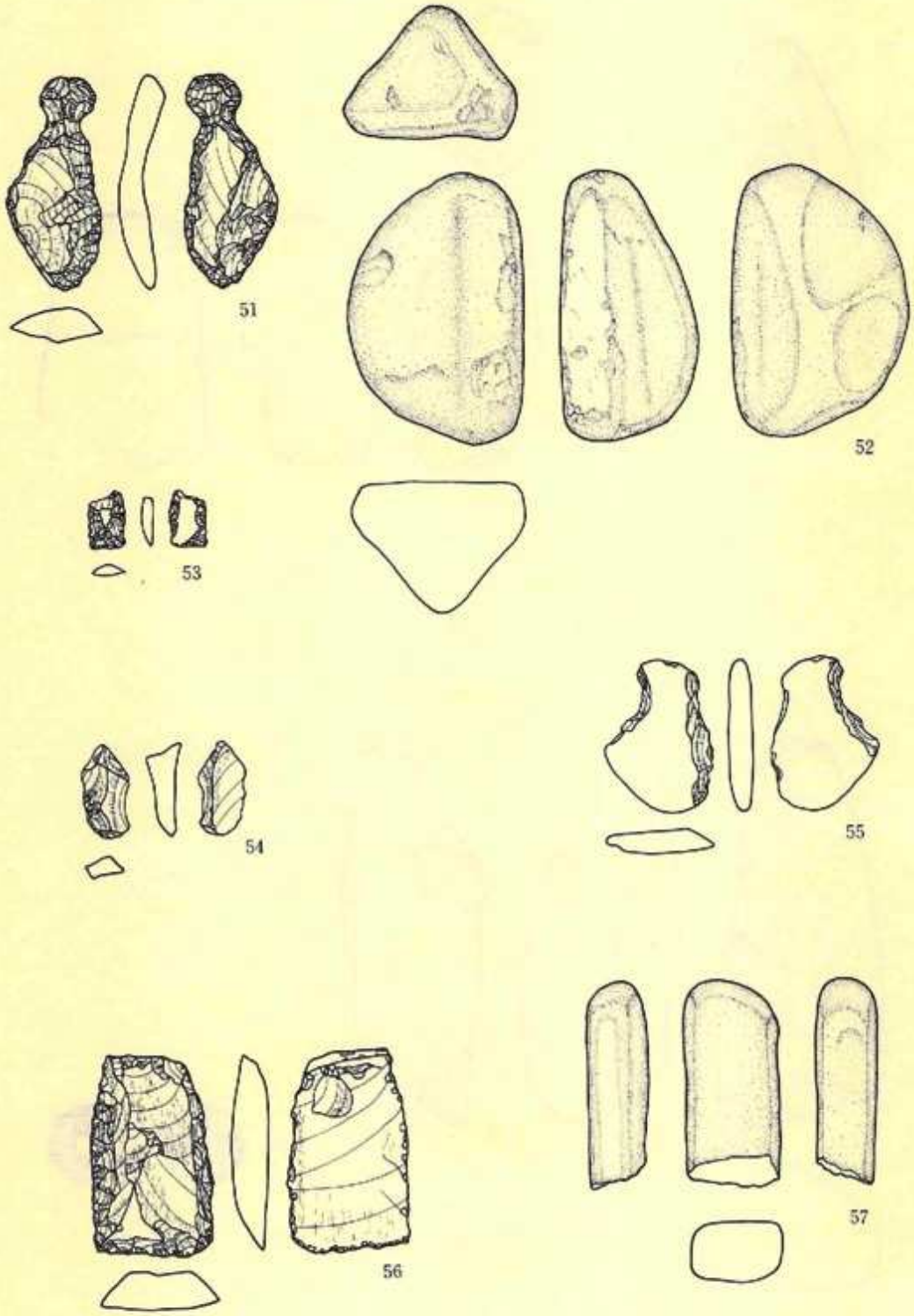
第20図　ⅣB－6ピット内出土遺物(4)



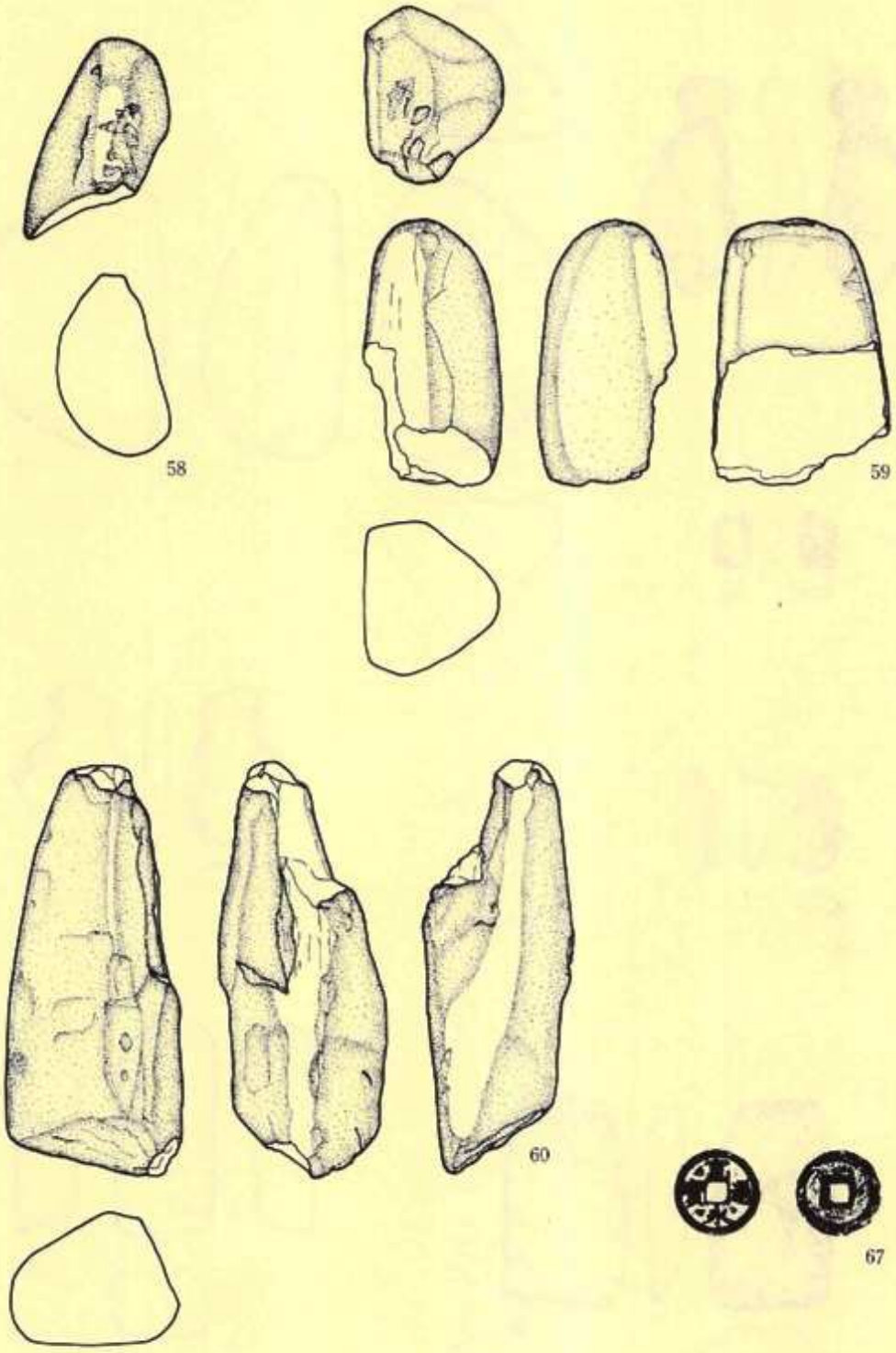
第21図　遺構外出土遺物、土器(1)



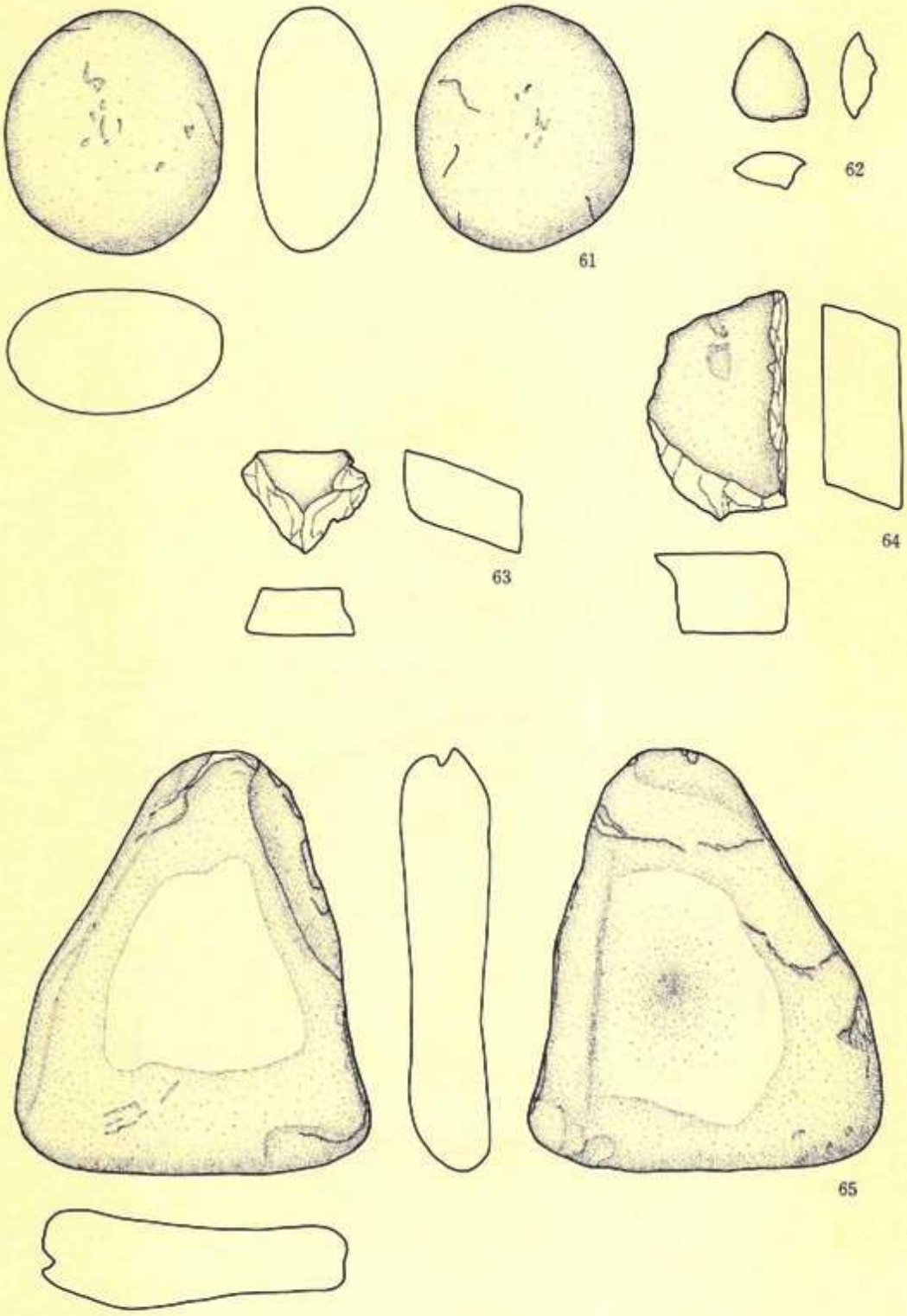
第22図　遺構外出土遺物、土器(2)



第23図　遺構外出土遺物、石器（剝片・礫）

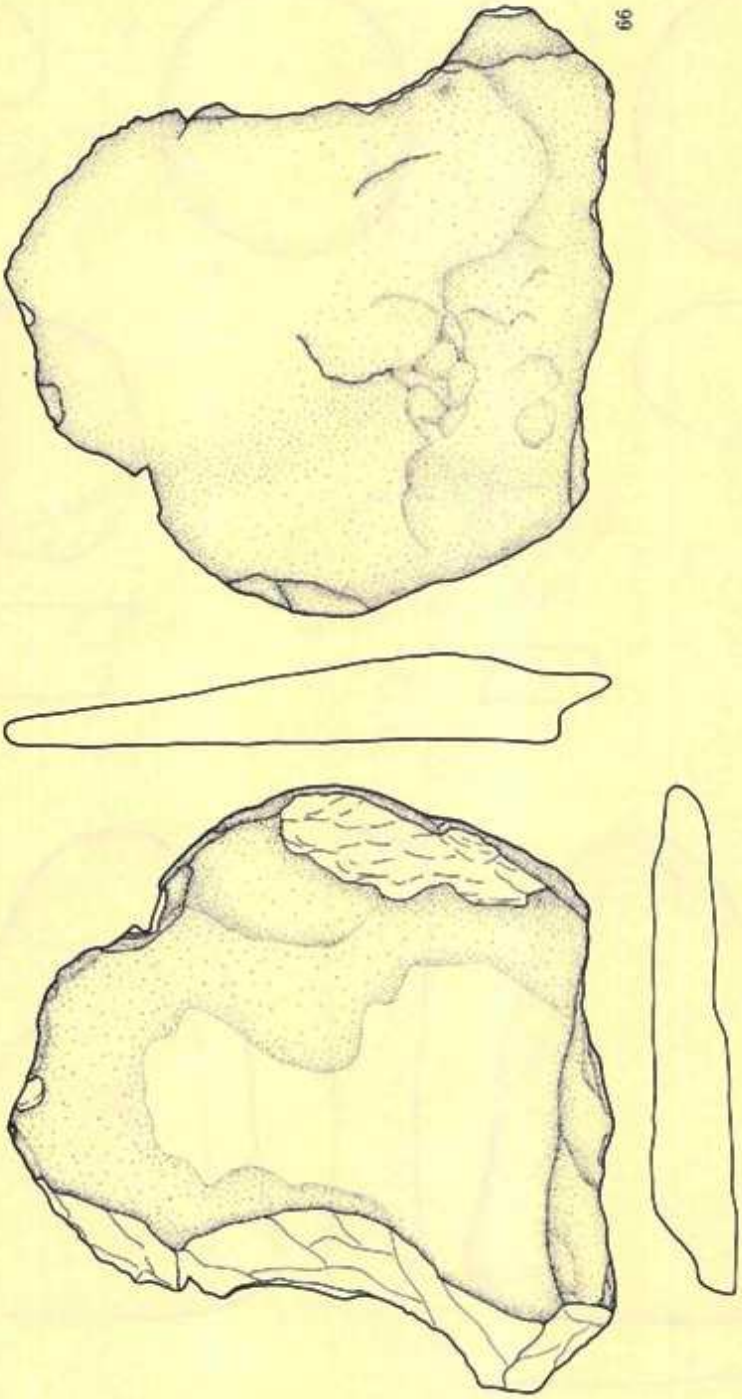


第24図　遺構外出土遺物、石器(礫)・古銭



65…S＝$\frac{1}{4}$

第25図　遺構外出土遺物、石器(礫)



S=$\frac{1}{4}$

第26図　遺構外出土遺物、石器(礫)

V　まとめ

本遺跡で検出された遺構はピット20基と陥し穴17基である。

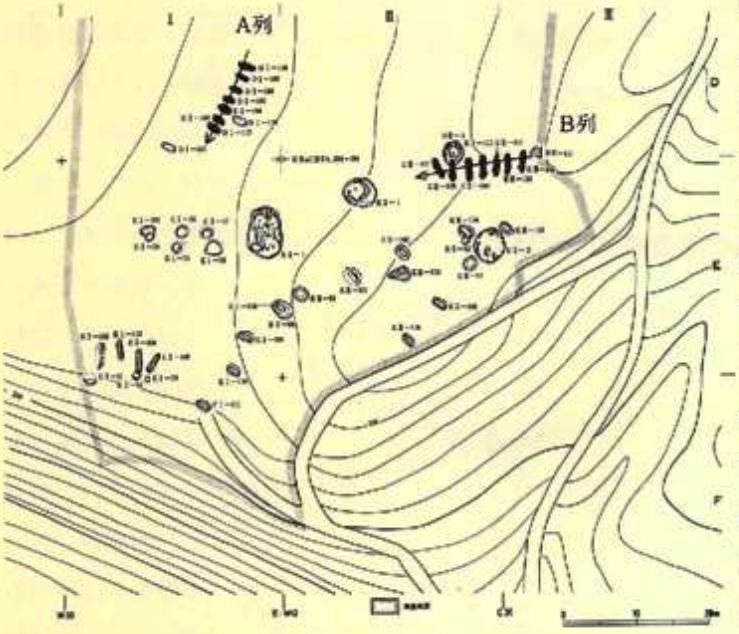
1．ピット

ピット20基を時期区分すると平安時代中葉３基、縄文時代晩期１基、縄文時代中期以降10基、縄文時代前期または早期６基となる。

平安時代のピットは３基とも規模・形状が異なる。ⅣB－１ピットは掘り込みも浅く隅丸方形状を呈する。柱穴等はみられない。性格は不明である。ⅥC－４ピットは半分が道路によって切られているため詳細は不明である。底部は南部浮石層上面である。ⅥC－１ピットは典型的なビーカー状ピットで、その性格は貯蔵穴を想定できるかもしれない。

縄文時代のピットは晩期の土器を多量に出土したⅣB－６ピットを除けば、時期決定の資料に欠ける。しかし、検出面と埋土から２群に分けられる。すなわちⅣ層（中掫浮石）を切って構築され、その埋土に中掫浮石が混入する一群（A群）と、Ⅴ層の上位で検出され、その埋土に中掫浮石を含まない一群（B群）とに分けられる。A群は中期以降、B群は前期または早期に属すると思われる。

A群のピットは占地と規模によって更に２群に分けられる。A１群は尾根の頂部に占地し、深さが概ね80～130cmである。A２群は尾根の東斜面に占地し、深さが概ね30～65cmである。A１群はⅣB－５ピット、ⅣB－６ピット、ⅣB－９ピット、ⅣB－11ピットの４基である。A２群はⅣB－10ピット、VB－１ピット、VB－２ピット、VB－３ピット、VC－２ピット、ⅥC－３ピットである。A２群はC－３ピットを除けば、斜面に占地するため下位側の壁高はより低くなり、A１群と比した場合、数値以上に浅く感じるピット群である。また、断面形状も皿状、ビーカー状、フラスコ状と多様である。以上のことから、仮にこれらのピットが貯蔵穴として使用されたもので



（挿図１）荒屋Ⅱ遺跡遺構配置

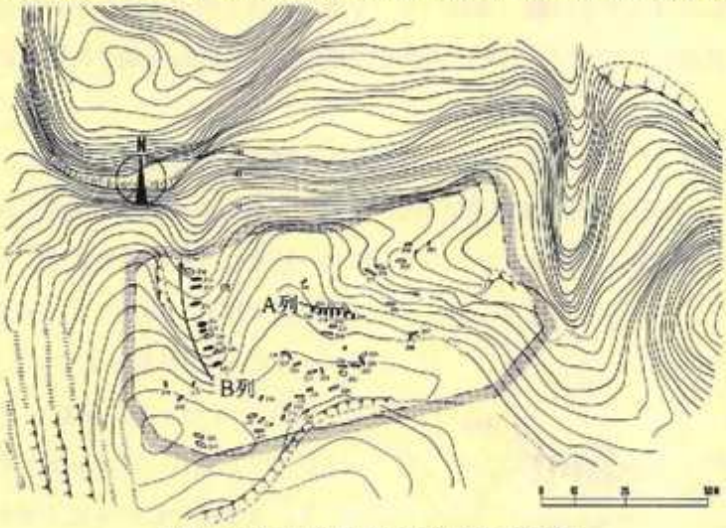
あったとしても、貯蔵されるものがＡ１群とＡ２群とでは異なっていた可能性がある。

２．陥し穴

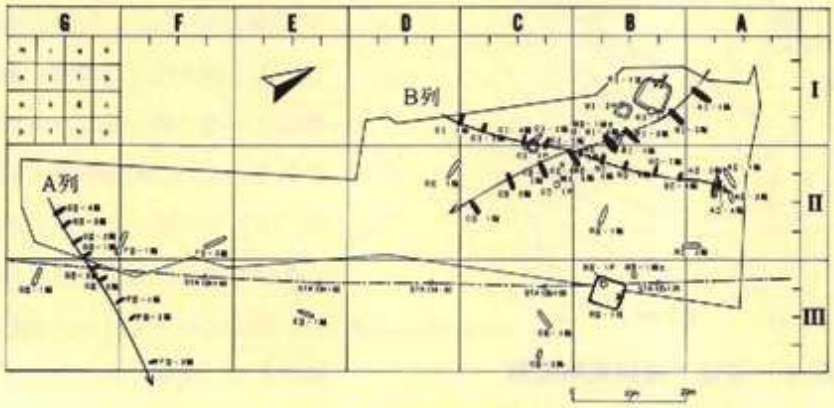
陥し穴17基のうち、溝状のものが２基、円筒状のものが15基である。溝状陥し穴はいずれもIII層上面で検出されており、縄文時代中期以降に属する。それに対して円筒状陥し穴はVI層上面で検出されたもので縄文時代前期または早期に属する。

（１）溝状陥し穴について

占地からみると次のことが言える。VIC－２陥し穴は尾根の下部にあり、その長軸方向は斜面と平行で東西方向を指す。VIIB－１陥し穴は東側の沢に向かう平坦地に位置し、その長軸方向は沢と平行し南北方向を指す。２基の長軸方向はほぼ直交するように向きが異なっている。しかし、後述する円筒状陥し穴の配例からすれば、尾根を迂回する方向と尾根から沢に向かう方向に獣道があったと推定されることから、この２基の陥し穴は各々別の獣道に仕掛けられたものと解せられる。規模は底部が305×15cm、475×37cm、深さが183cmと150cmで比較的大きな部類に属する。陥し穴には荒屋II遺跡(注1)(挿図１)、小井田III遺跡(注2)(挿図２)、安比内I遺跡(注3)（挿図３）などのように何基も連続して作られている例と、五庵I遺跡(注4)、江刺家遺跡(注5)、馬場野II遺跡(注6)、桂平遺跡(注7)のように単独ないし２～３基の単位で作られている例とがある。それらの規模を比較すると（付表）前者は後者より概ね小さく同規模同形態のもので構成され、画一化しているのに対し、後者は方向、規模とも比較的多様である。本遺跡で検出されたもの



（挿図２）小井田Ⅲ遺跡遺構配置図



（挿図３）安比内Ⅰ遺跡遺構配置図

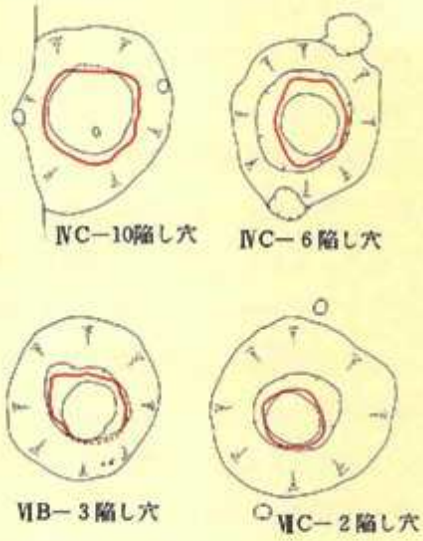
は後者に属する。杭跡はVIC－2陥し穴の頚部の壁に直径5cmのものが3基見られる外はまったく見られない。

（2）円筒状陥し穴

円筒状陥し穴の配列も溝状陥し穴と同じように、直線状に並ぶもの[注9]と単独ないし規則性に乏しいもの[注10]とがある。本遺跡ではVIIB－4陥し穴～VIIC－3（またはVIIC－2）陥し穴やVIB－2陥し穴VIIC－1陥し穴へと並ぶものが想定できるものの、VIC区は何通りかが想定され速断できない。円筒状陥し穴は底部の規模と付属する施設によって細分が可能である。底部の規模によって分類すると二つに細分される。ひとつはVIC－9・10・11陥し穴とVIIC－1陥し穴の4基で底部の直径が75～95cmでやや広く、深さ120～130cmとほぼ一定している。もう一つは底部の直径が45～60cmと狭く、深さは124～184cmとばらつきがみられる。これに分類されるのは残りの11基である。これは時期差によるものか、捕獲しようとした獣の種類の相違からくるものか、あるいは陥し穴に加えられた何らかの施設による構造上の問題からくるものかは不明である。本遺跡で検出された同筒状の陥し穴で特徴的にみられたことは、穴の内部や開口部の周りに何らかの施設を作ったと思われる痕跡がみられたことである。その痕跡を詳細に検討してみると3群に分類できる。第I群は、底部より約30cm上がったところの壁が数カ所で抉られ隅丸方形状になっている（挿図4）ものである。この群に属するのはVIB－3陥し穴、VIC－5陥し穴、VIIB－2陥し穴、VIC－6陥し穴、VIC－10陥し穴、VIIC－1陥し穴、VIIC－2陥し穴の7基である。そのうち前3基は壁の一部が柱状に崩壊し、その向かいの壁は底部から20

付表：溝状陥し穴規模比較対照表

遺跡名	種別	数	深さ cm	底部長径cm	備考
荒屋II遺跡	A列	7	88	152	平坦地
	B列	7	104	271	〃
小井田III遺跡	A列	7	113	173	谷底
	B列	7	153	359	〃 同一列かどうか再考の要
安比内I遺跡	A列	9	78	163	緩斜面
	B列	10	97	162	〃
	C列	8	138	324	〃
	単独	8	150	381	〃
五庵I遺跡	単独	37	99	322	緩斜面
江刺家遺跡	〃	4	122	367	平坦地
馬場野II遺跡	〃	4	133	333	斜面
桂平遺跡	〃	9	110	343	〃 一部の調査は除く
	A列	3	108	215	尾根頂部 〃



（挿図4、下位の壁のプラン例）

～30cm程上がったところが杭を斜めに刺した跡のように柱穴状に抉られている（挿図５）。

第II群は開口部付近に２個一対の杭跡状の痕跡を持つものである。この群に属するのはVIC－５陥し穴、VIC－６陥し穴、VIC－10陥し穴、VIC－11陥し穴、VIIB－３陥し穴の計５基である。そのうち埋土が黒褐色土で明瞭に杭跡とおもわれたのはVIC－10陥し穴のみで他は埋土の褐色土が地山のVIII層と識別が困難である。しかし、南部浮石層及びその直下のVII層を切っていること、その配置がいずれも同様であること等により杭跡の可能性が高いとと判断したものである。

第III群はこれまでに他の遺跡からも多く報告されているが、底部に杭跡を持つものである。これはVIB－２陥し穴、VIC－８陥し穴、VIC－10陥し穴、VIC－11陥し穴、VIIC－１陥し穴である。杭跡はいずれも１基または１カ所である。直径５cm、位置は中央である。

この３群は各々別なタイプと見なされるかどうかは不明である。なぜなら、陥し穴の使用回数とも関連するが、同じ方法で繰り返し使用されたものか、それとも何度か作り替えて使用しているうちに作り方に変化がみられたのかは分らなかったからである。

以上が大堤II遺跡で検出された遺構についてのまとめであるが、幾つかの点に付いて若干述べておきたい。

第一は、「陥し穴」についてである。まず、従来「溝状遺構」、「Ｔピット」、「陥し穴状遺構」などと様々に呼称されてきた遺構についてである。この遺構の用途が陥し穴であるとの論に先鞭を付けたのが『霧ケ丘』[m11]の報告書である。しかし、それ以後当該遺構は上記のように様々な呼称を与えられてきた。それは単に呼称の問題ではなく常に「果して陥し穴と言えるのか」、或は「陥し穴と断定してもよいのか」という基本的な認識に関わる問題として意識されてきたものである。しかし、近年当該遺構の発掘例が急増するに及びやはり「溝状遺構」は陥し穴と考えるのが最も妥当な状況になってきている。次に、円筒状陥し穴についてであるが、これも既に『霧ケ丘』で陥し穴の一形態であることが指摘されていた。しかし、『霧ケ丘』の場合は僅かに二例であったことと、その後他からの報告も溝状遺構の類例が急増したことと相待ってこの円筒状陥し穴はそれほど多くの論議の対象とはなってこなかったきらいがある。本県に関してみれば、当該の遺構が陥し穴であるとの認識に立って、最初にまとまった報告をしたのは筆者が知るかぎりでは『館山遺跡発掘調査報告書』[注12]である。その後当該の遺構の発掘例が増加してきているが、その調査研究は未だその緒についたばかりといえる状況である。したがっ

（挿図５、内部施設痕を有する陥し穴断面模式図）

て、今後当該遺構の性格についてさまざまな論議が起こってくると思われるが、現段階では積極的に陥し穴ではないとする論もなく、むしろ一連の報告が陥し穴とする立場を支持する内容であり、本遺跡でもそれを補強する資料が得られたものの何ら否定する資料は得られなかった。以上のことから本書では当該遺構を陥し穴と考えそのように呼称した。

第二に、構築年代についてである。円筒状陥し穴については掘り込み面が縄文時代前期に降下したといわれる中掫浮石層より下位であり、縄文早期に降下した南部浮石層より上位であるから縄文時代の早～前期であることは間違いない。しかし、溝状陥し穴については中掫浮石より上位の層から掘り込んでいることから縄文時代中期以降としか言えない。ただ、筆者が調査した桂平遺跡に於ては当該遺構が平安時代後葉の遺構2基と重複していたが、どちらも平安時代の遺構によって切られていたことを付言しておきたい。

第三に、円筒状陥し穴に見られた内部施設についてである。それは、捕獲にともなうなんらかの施設を構築していたと考えられる。それがどのような施設であるのかは今後の類例を待って検討したい。ただ、付言すれば今村啓爾が指摘した[(注13)]例は有益な示唆を与えるものと思われる。

3．遺物

（1）縄文土器

繊維を含む縄文土器が得られたが、いずれも少片のため形式名は特定できない。胎土、地文から前期と考えられる。後期の土器も数点出土した。しかし、出土した土器の主体が晩期であることから後～晩期とした大部分は晩期に属すると思われる。

（2）石器

チップ、フレークは出土せず、剥片石器が極めて少ない。礫石器の大部分が磨石で、しかも円礫を使用したものは1点のみで、他は角礫ないし亜角礫を使用したものである。

注記

1．四井譲吉（1981）『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第21集）、岩埋文セ
2．栃沢満郎（1985）『小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第85集）、岩埋文セ
3．田村壮一（1986）『安比内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第106集）、岩埋文セ
4．石川長喜（1986）『五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第97集）、岩埋文セ
5．田鎖寿夫（1984）『江刺家遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第70集）、岩埋文セ
6．中川重紀（1986）『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第99集）、岩埋文セ
7．平井　進（1986）『桂平遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第110集）、岩埋文セ
8．もっとも、これらが同時存在かどうかはなお検討の余地を残している。
9．館山遺跡、川口Ⅰ遺跡（埋文セ第83集）、五庵Ⅰ遺跡など
10．柿の木平Ⅲ遺跡（埋文セ第89集）、駒板遺跡（埋文セ第98集）、桂平遺跡など。駒板遺跡の場合、北尾根で検出され、ピットとして報告されたうち幾つかは(少なくともVC－26ピット、VC－2ピット、VE28－1ピット、VH34ピットの4基―筆者が調査したものであるが―)その後の検討結果、早～前期の円筒状陥し穴であるという見解に達している。それらのピットは特定地区に集中するが規則的な配置を取るとはいいがたい。
11．霧ケ丘遺跡調査団（1973）『霧ケ丘』、武蔵野美術大学考古学研究会
12．鈴木恵治（1983）『館山遺跡発掘調査報告書』（埋文セ第65集）、岩埋文セ
13．今村啓爾（1976）「縄文時代の陥穴と民族誌上の比較」（『物質文化』（27号所収）、立教大学）

〈参考文献〉

福田友之　1986：『考古学からみた「中撫浮石」の降下年代』（『弘前大学考古学研究』第3号所収）

近藤宗光・他　1983：「赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」（岩埋報第58集）、岩埋セ

中川久夫　1981：『第四系』（北上川流域地質図説明書」（長谷地質調査事務所）所収）

瀬川司男　1981：『陥し穴状遺構について』（「紀要Ⅰ」（岩埋文セ）所収）

石岡憲雄　1980：『所謂「Ｔピット」について』（「土曜考古」第2号所収）

福田友之　1981：『「溝状ピット」研究に関する覚書』（「弘前大学考古学研究」第1号所収）

福田友之　1982：「鶴ノ子遺跡」、青森県教育委員会

大泰司紀之　1983：『シカ』（「縄文文化の研究」第2巻所収、雄山閣）

林　良博　1983：『イノシシ』（「縄文文化の研究」第2巻所収、雄山閣）

今村啓爾　1983：『陥穴』（「縄文文化の研究」第2巻所収、雄山閣）

直良信夫　1968：「狩猟」、法政大学出版局

加藤晋平　1980：「図録石器の基礎知識」Ⅰ、Ⅱ、柏書房

鶴丸俊明　1980：「図録石器の基礎知識」Ⅰ、Ⅱ、柏書房

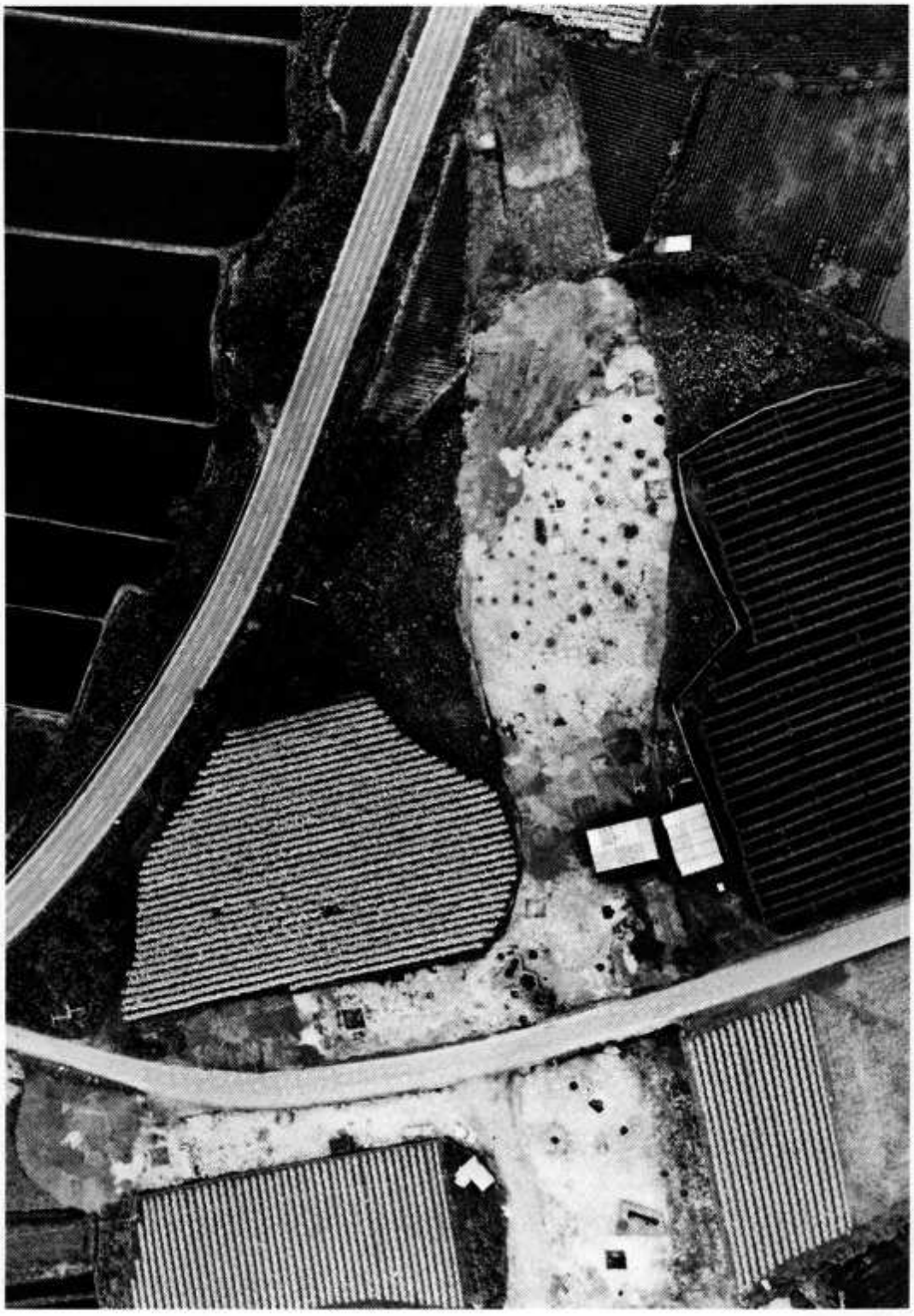
山内清男　1979：「日本先史土器の縄文」、先史考古学会

講 談 社　1982：「縄文土器大成」

高橋与右エ門・他　1986：「水神遺跡発掘調査報告書」（岩埋報第96集）、岩埋セ

※脚注で引用した文献は再録していない。

写真図版



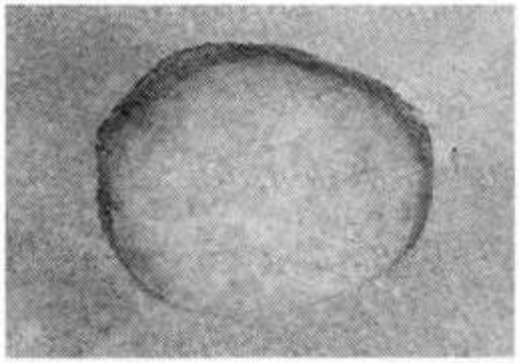
写真図版１　遺跡全景（空中写真）

（精査状況）

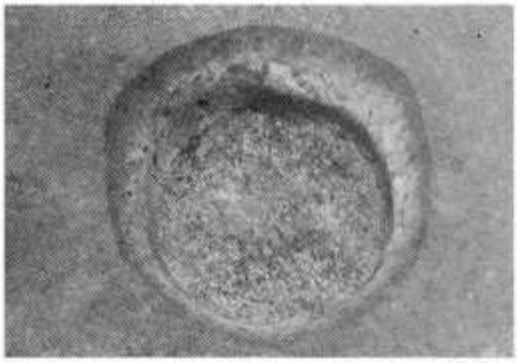
（実測状況）

（ピット群）

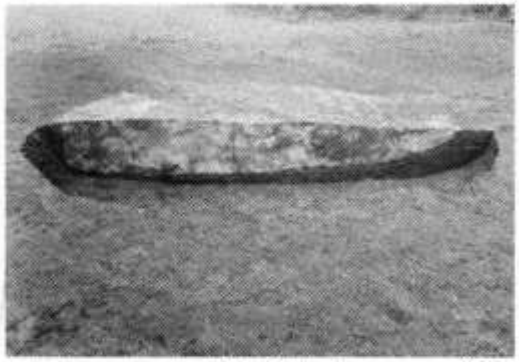
写真図版２　作業状況等



（平面）

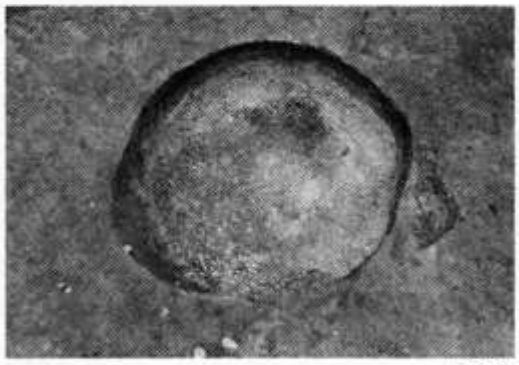


（平面）



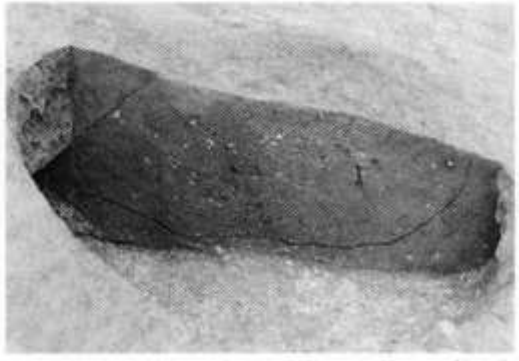
Ⅵ B－1 ピット　（断面）

Ⅵ C－1 ピット　（断面）



（平面）

（平面）



Ⅴ C－1 ピット　（断面）

Ⅵ C－4 ピット　（断面）

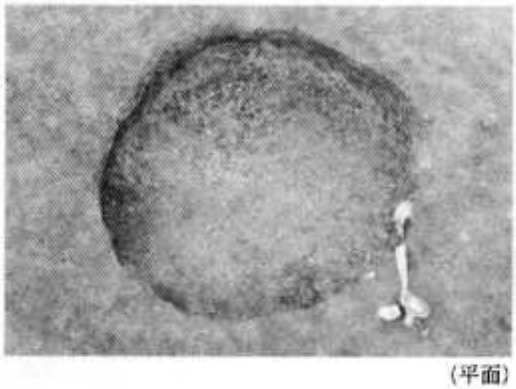
写真図版3　ピット（Ⅵ B－1、Ⅵ C－1、Ⅴ C－1、Ⅵ C－4）

(平面)

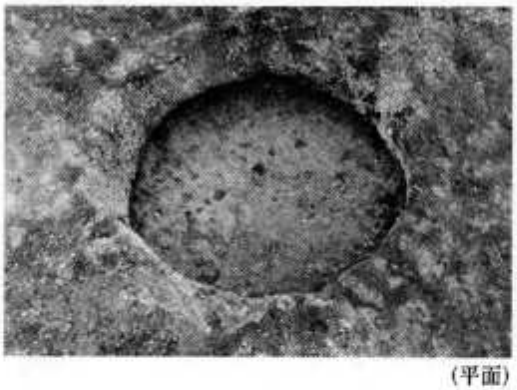
(平面)

ⅣB－5ピット　(断面)

ⅣB－6ピット　(断面)

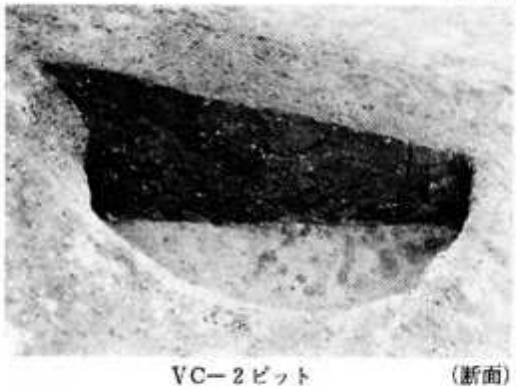


(平面)



(平面)

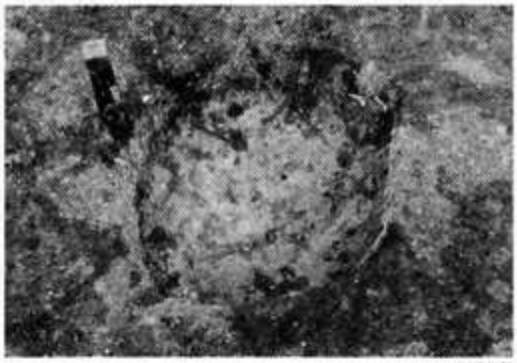
VB－2ピット　(断面)



VC－2ピット　(断面)

写真図版4　ピット（ⅣB－5、ⅣB－6、VB－2、VC－2）

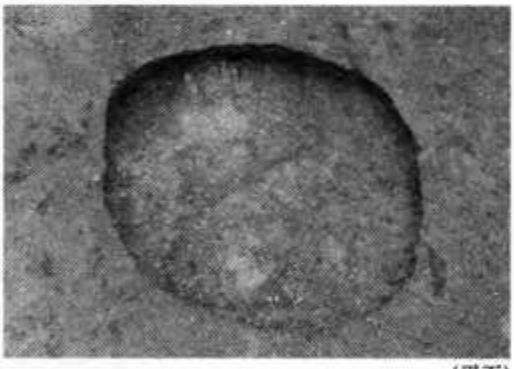
（平面）



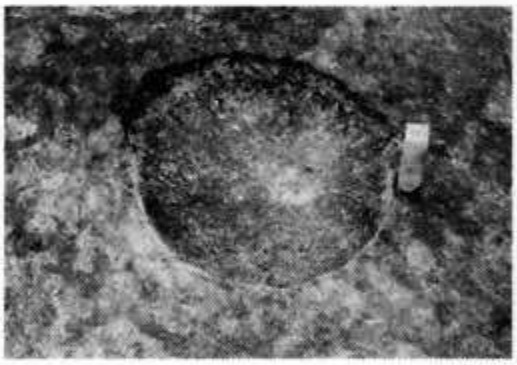
（平面）

NB−11ピット　（断面）

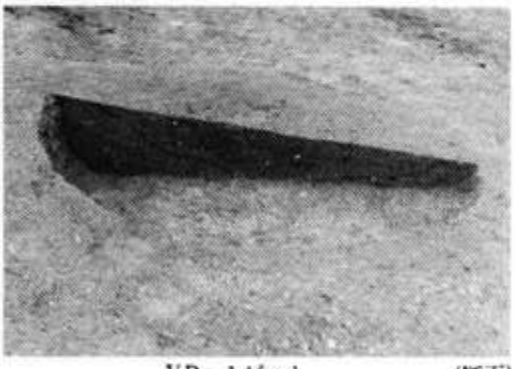
NB−10ピット　（断面）



（平面）



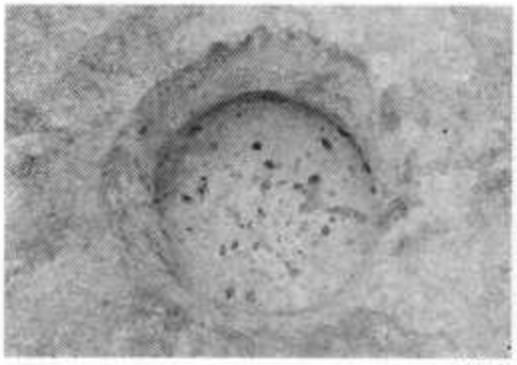
（平面）



VB−1ピット　（断面）

VB−3ピット　（断面）

写真図版5　ピット（NB−11、NB−10、VB−1、VB−3）

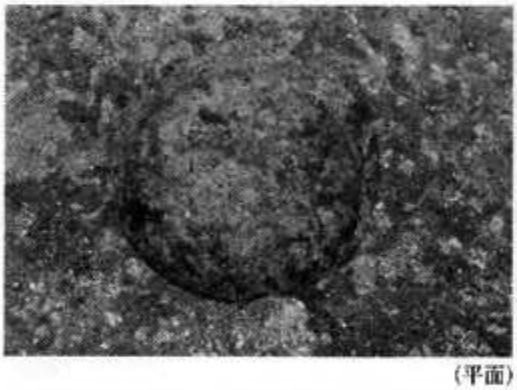


（平面）

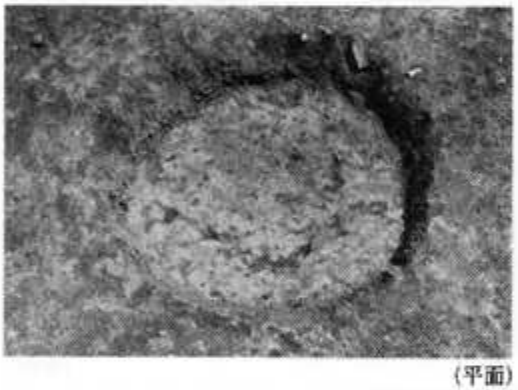
（平面）

ⅣB－9ピット　（断面）

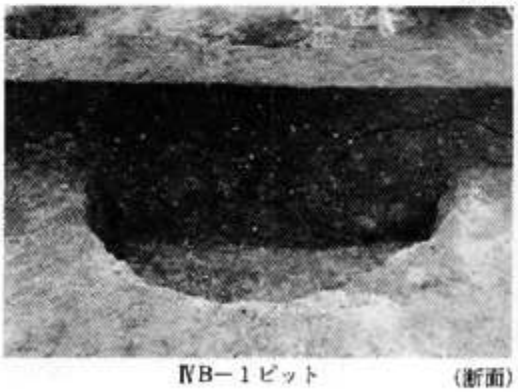
ⅣC－3ピット　（断面）



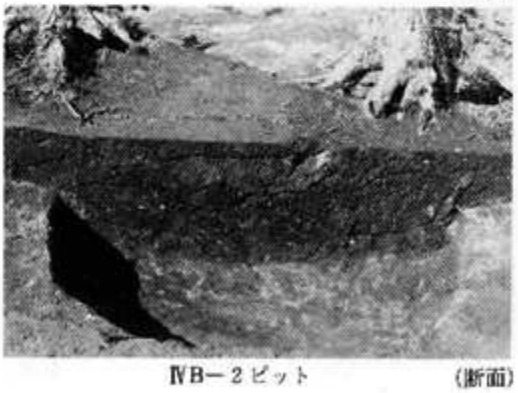
（平面）



（平面）

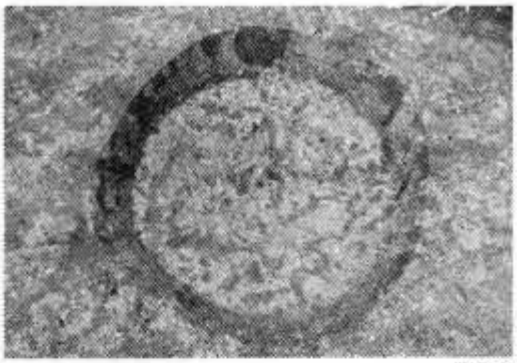


ⅣB－1ピット　（断面）

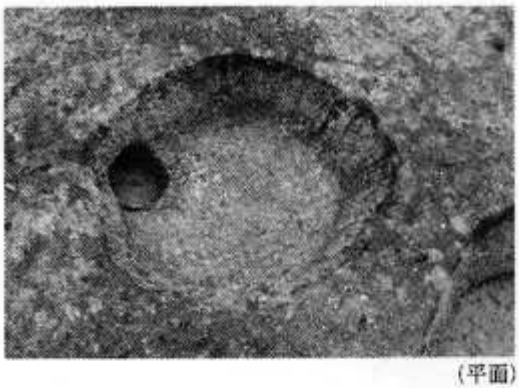


ⅣB－2ピット　（断面）

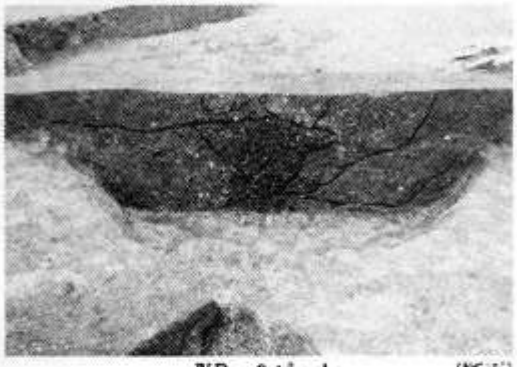
写真図版6　ピット（ⅣB－9、ⅣC－3、ⅣB－1、ⅣB－2）



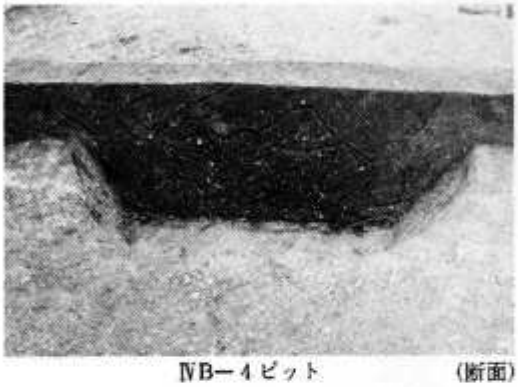
(平面)



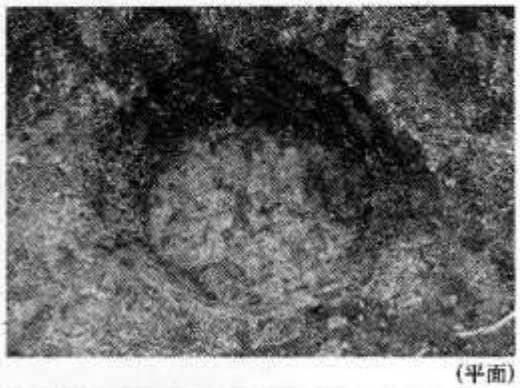
(平面)



ⅣB－3ピット　(断面)

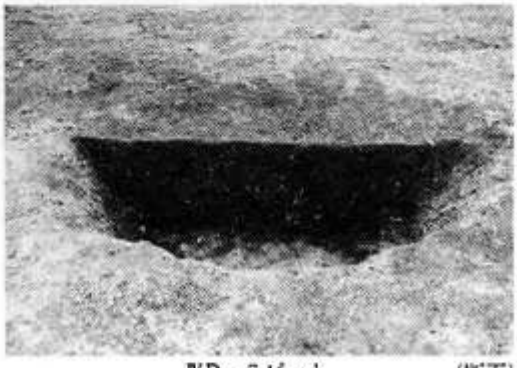


ⅣB－4ピット　(断面)

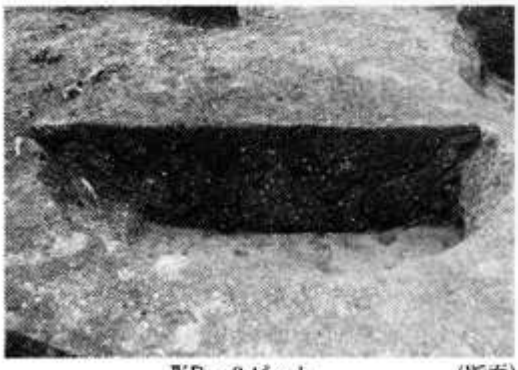


(平面)

(平面)

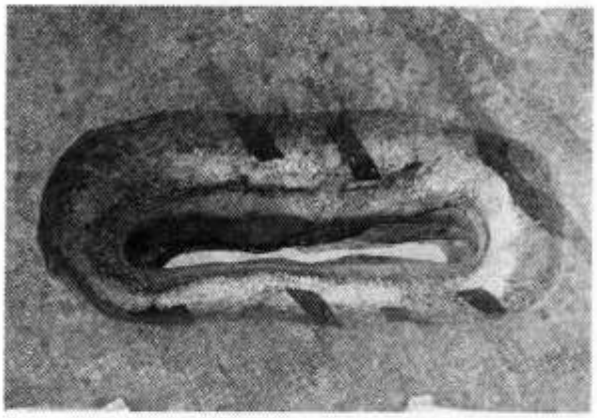


ⅣB－7ピット　(断面)

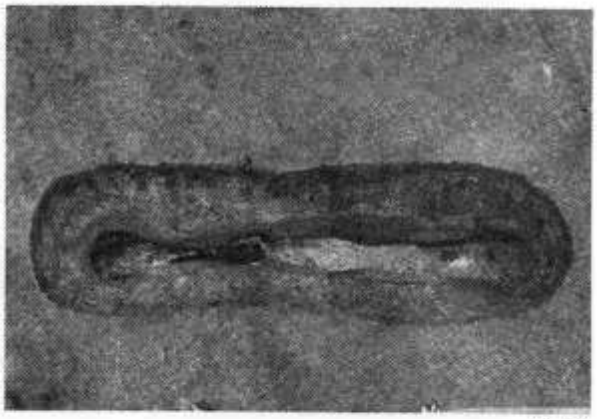


ⅣB－8ピット　(断面)

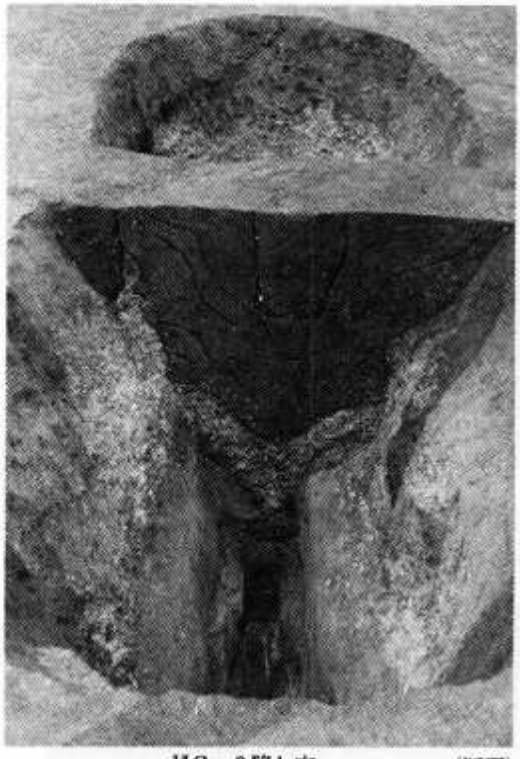
写真図版7　ピット（ⅣB－3、ⅣB－4、ⅣB－7、ⅣB－8）



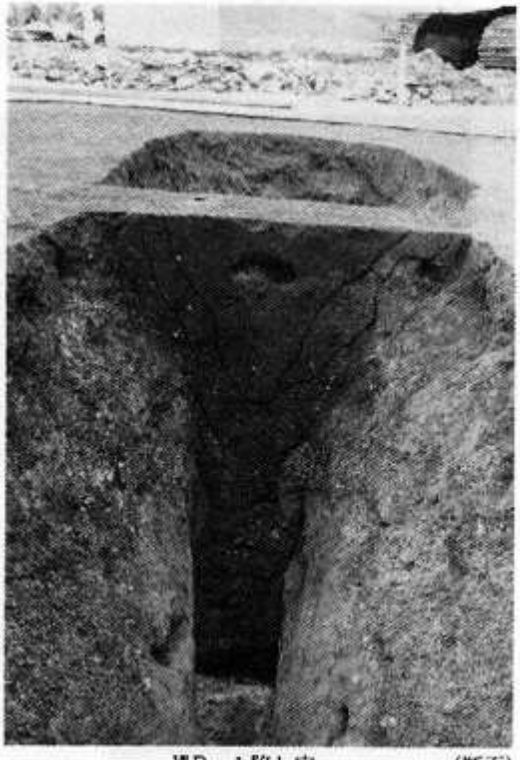
（平面）



（平面）

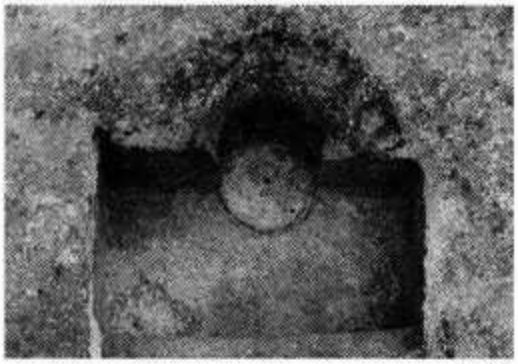


Ⅶ C－２陥し穴　（断面）

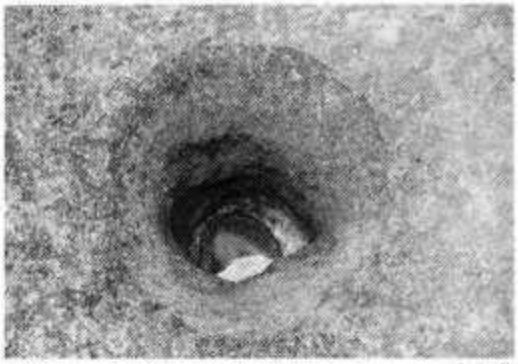


Ⅶ B－１陥し穴　（断面）

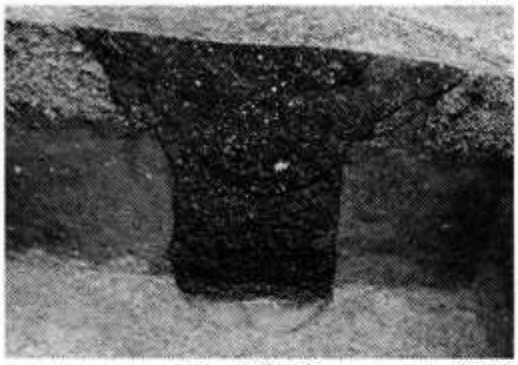
写真図版８　陥し穴（Ⅶ C－２、Ⅶ B－１）



（平面）

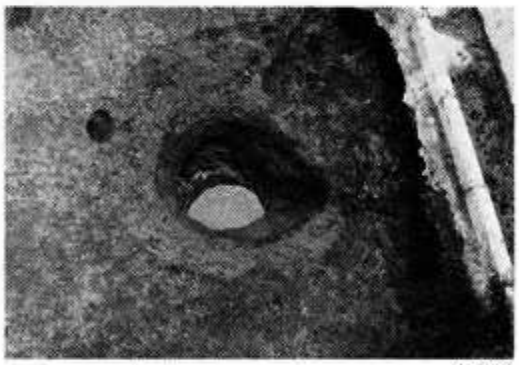


（平面）

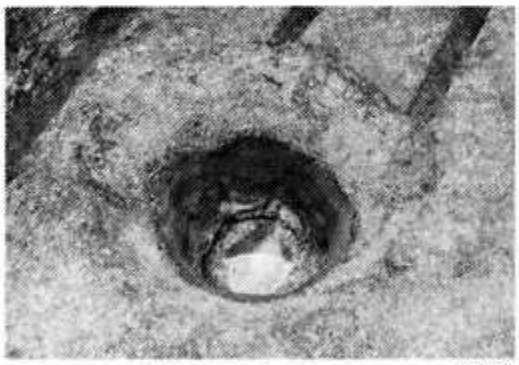


Ⅵ B－２陥し穴　（断面）

Ⅵ B－３陥し穴　（断面）

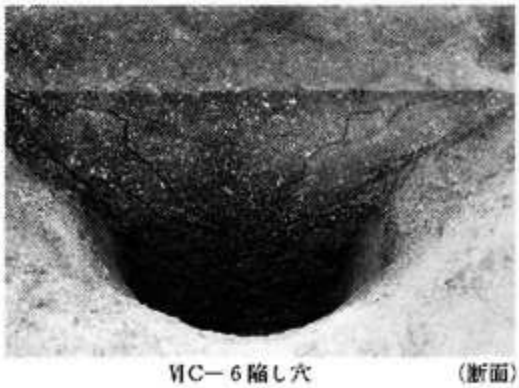


（平面）



（平面）

Ⅵ C－５陥し穴　（断面）

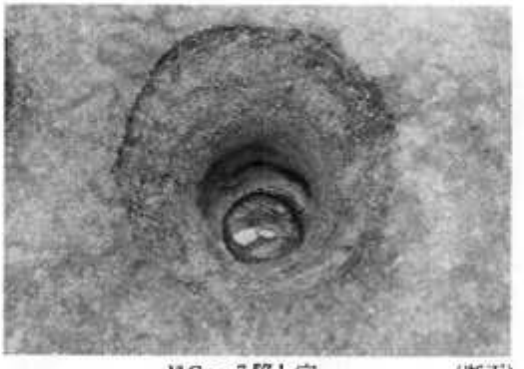


Ⅵ C－６陥し穴　（断面）

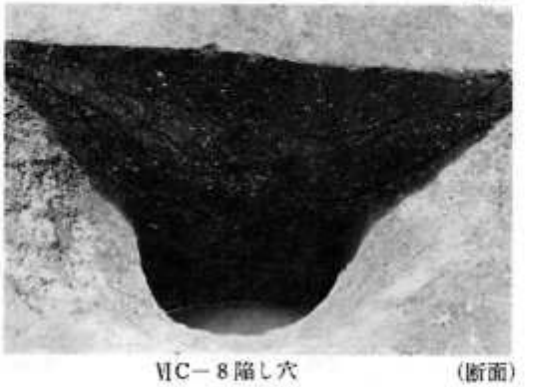
写真図版９　陥し穴（Ⅵ B－２、Ⅵ B－３、Ⅵ C－５、Ⅵ C－６）

（平面）

（平面）



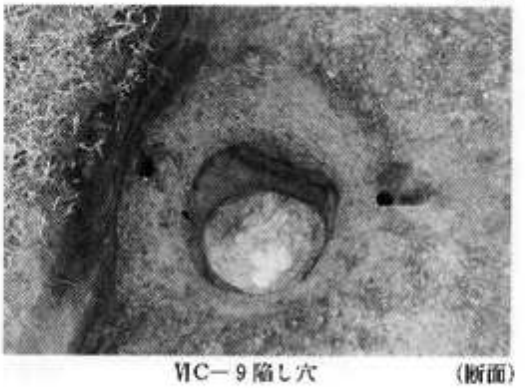
Ⅵ C－7陥し穴　（断面）



Ⅵ C－8陥し穴　（断面）

（平面）

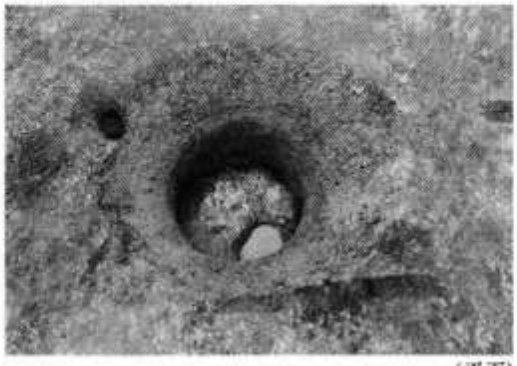
（平面）



Ⅵ C－9陥し穴　（断面）

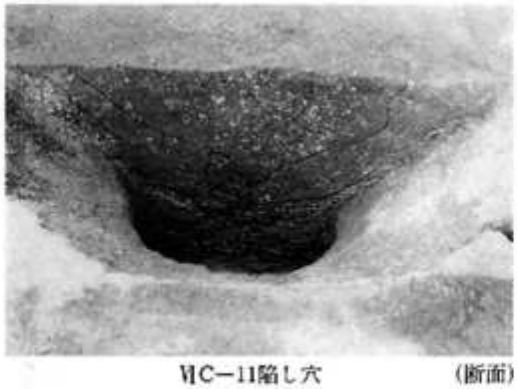
Ⅵ C－10陥し穴　（断面）

写真図版10　陥し穴（Ⅵ C－7、Ⅵ C－8、Ⅵ C－9、Ⅵ C－10）



（平面）

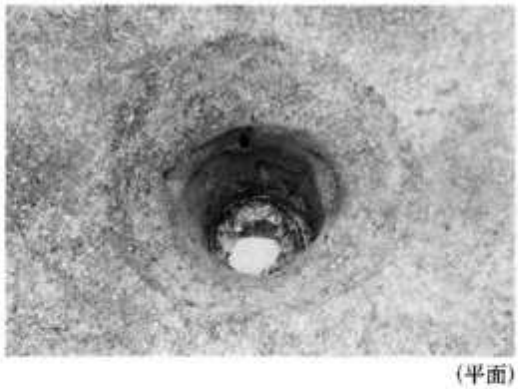
（平面）



Ⅵ C－11陥し穴　（断面）

Ⅶ B－２陥し穴　（断面）

（平面）

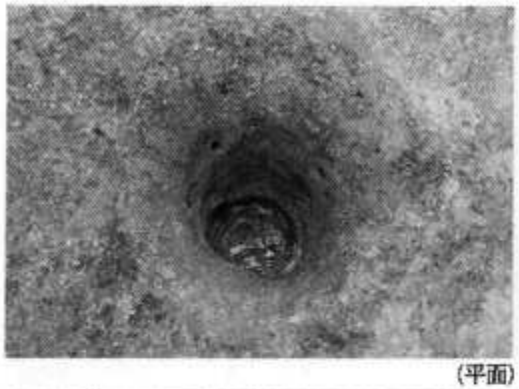


（平面）

Ⅶ B－３陥し穴　（断面）

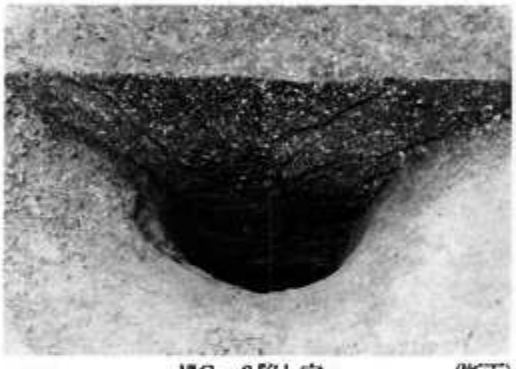
Ⅶ B－４陥し穴　（断面）

写真図版11　陥し穴（Ⅵ C－11、Ⅶ B－２、Ⅶ B－３、Ⅶ B－４）



(平面)

(平面)



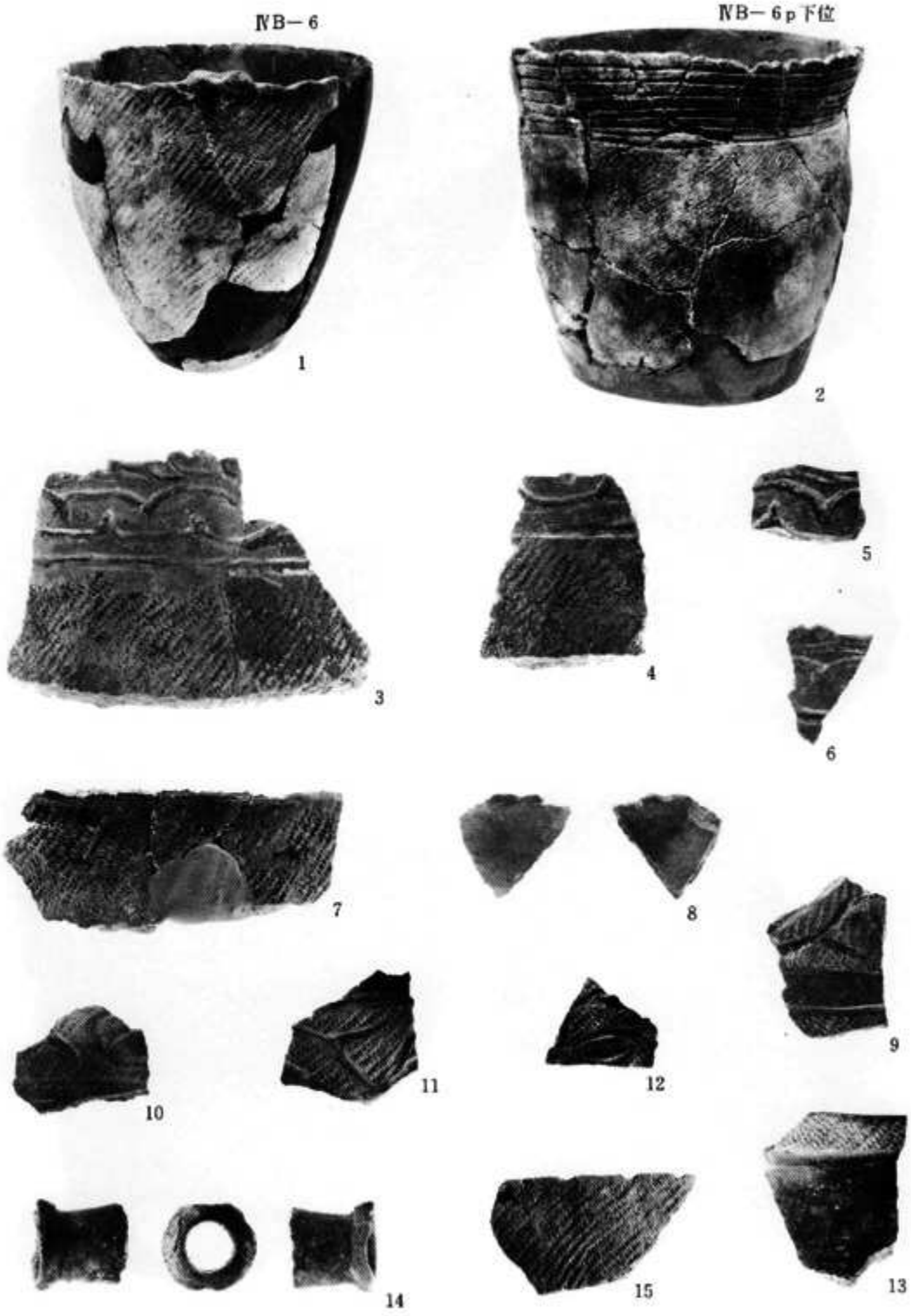
Ⅶ C－2陥し穴　(断面)

Ⅶ C－1陥し穴　(断面)

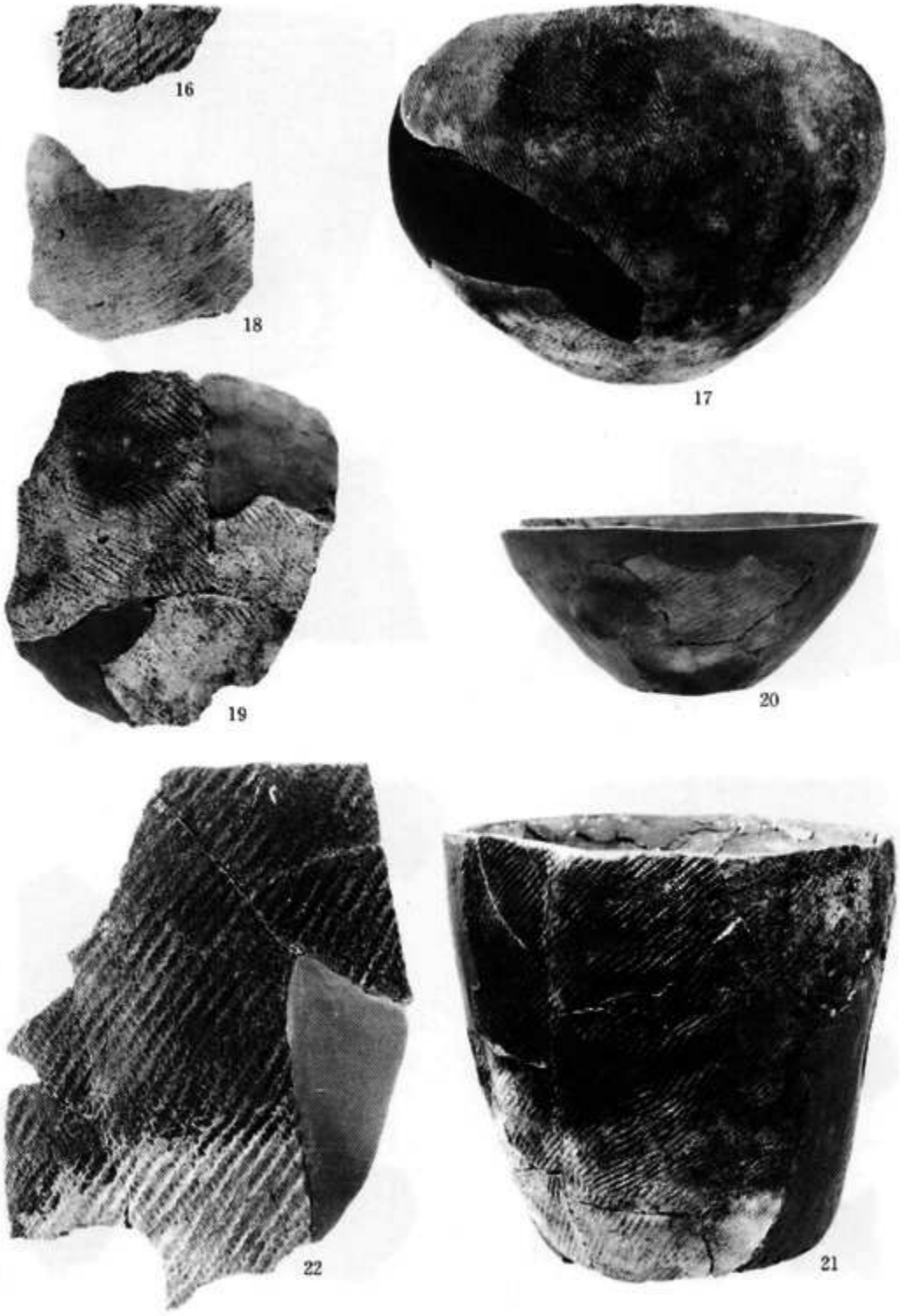
(平面)

Ⅶ C－3陥し穴　(断面)

写真図版12　陥し穴（Ⅶ C－2、Ⅶ C－1、Ⅶ C－3）



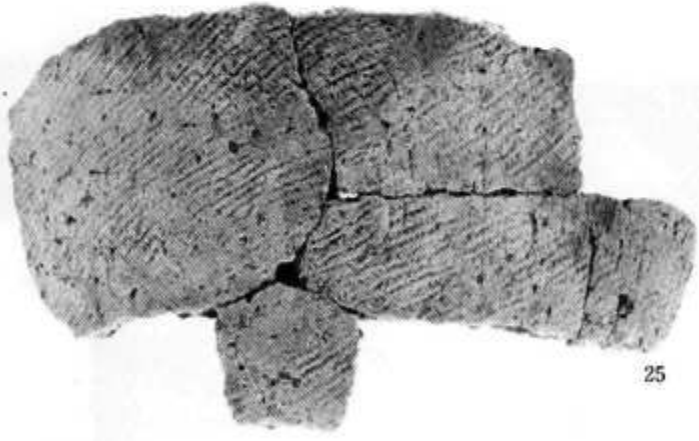
写真図版13　ⅣB－6ピット内出土土器(1)



写真図版14　ⅣB－6ピット内出土土器(2)

23

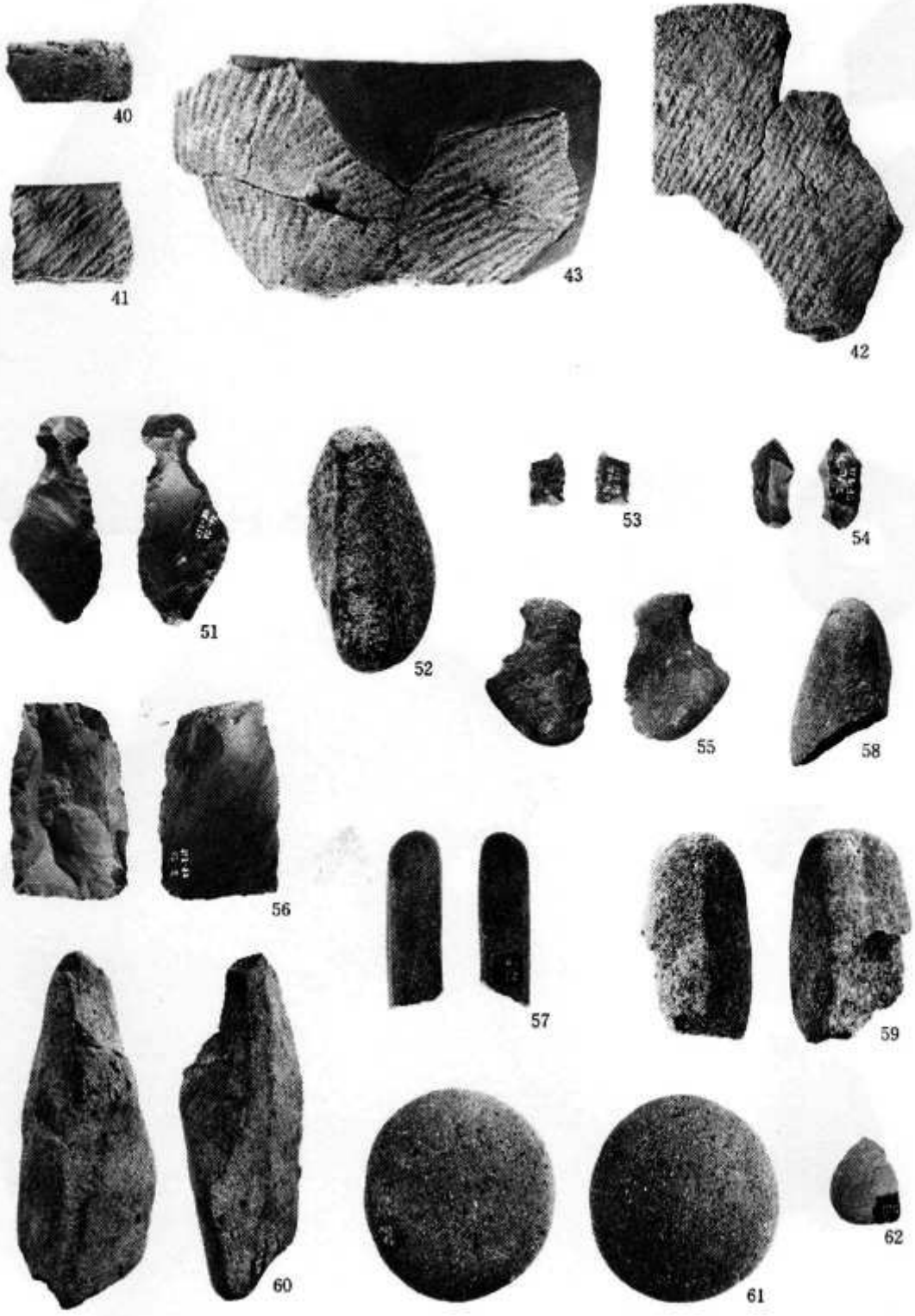
24



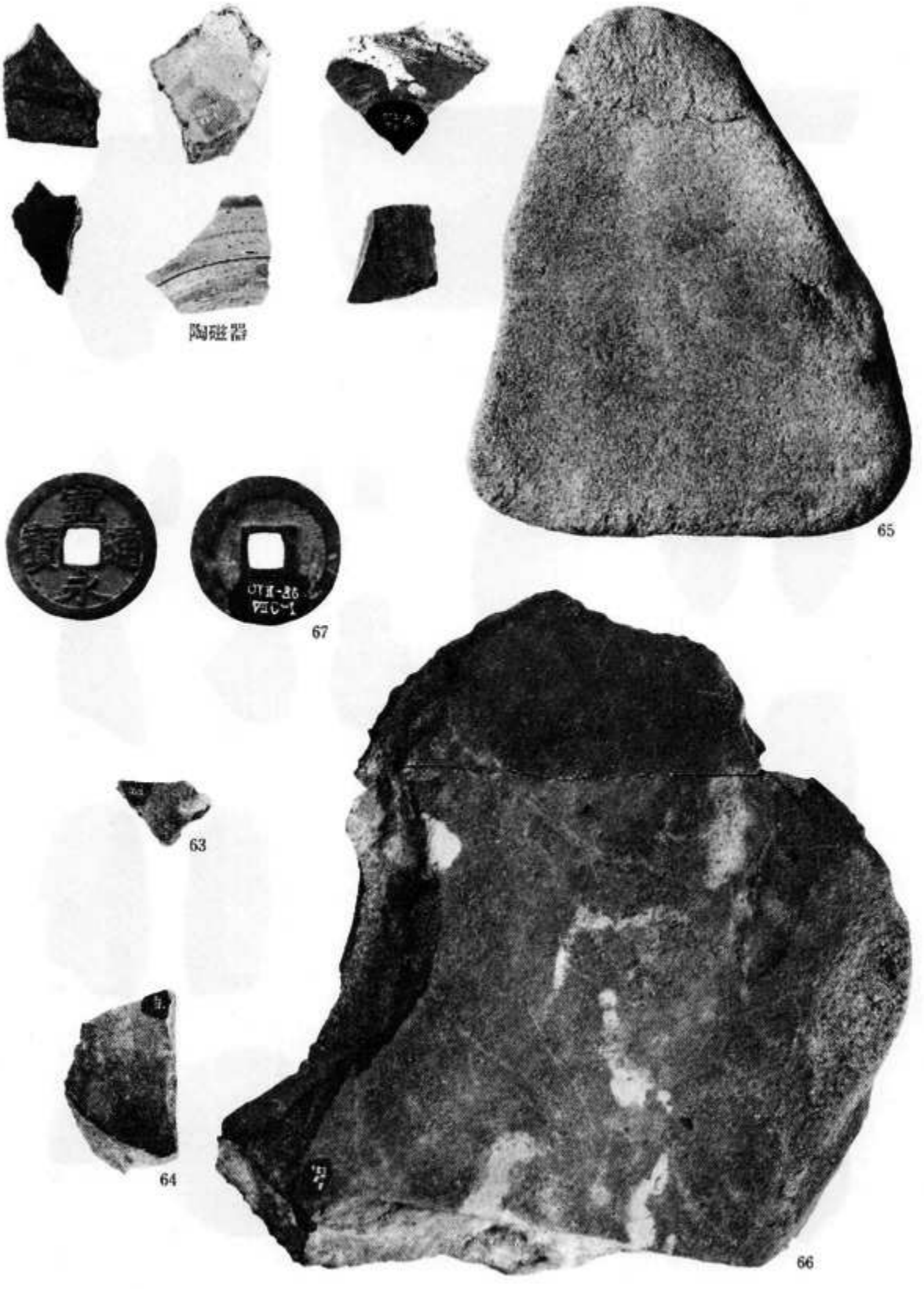
25

写真図版15　ⅣB－6ピット内出土土器(3)

写真図版16　遺構外出土遺物（土器）



写真図版17　遺構外出土遺物（土器・石器）



写真図版18　遺構外出土遺物（石器・陶磁器・古銭）

昭和62年度

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二
副所長	宮英一

〔管理課〕

課長(兼)	宮英一
課長補佐	伊藤吉郎
主事	立花多加志
嘱託	似内喜兵
運転技士兼技能員	佐藤春男

〔調査課〕

課長	昆野靖
主任文化財専門調査員	小田野哲憲
〃	三浦謙一
〃	工藤利幸
文化財専門調査員	佐々木嘉直
〃	平井進
〃	中村良一
〃	田村壮一
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	佐藤嘉広
〃	中川重紀
〃	高橋義介
〃	酒井宗孝

〔資料課〕

課長	新田和雄
主任文化財専門調査員	高橋与右エ門
文化財専門調査員	田鎖寿夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第119集

大堤II遺跡発掘調査報告書

一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷　昭和62年12月20日
発行　昭和62年12月25日

発　行　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　紫波郡都南村大字下飯岡11－185
電　話　(0196) 38－9001～2
印　刷　三　陽　印　刷　株　式　会　社
〒020　盛岡市脅町13番28号
電　話　(0196) 51－1321

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1987